

小說

春雨

冰心
子代子著



小說
春雨

內藤千代子著





春 雨

—

1

鈴音は極く寡言でおとなしい物静な少女でした。種々の事情の爲女學校も三年級の時他校から轉校て來たのでまるつきり馴染はなし、始終おどくどくと寂しさうに人目を避てゐた癖が、いつまで過つても去りませんでした。教室にあつても運動場に出ても道を歩くのにも、いつも下ばかり向いてゐるので、やがてはそれが目標にされる位でした。別に友達をつくらうともしないのです。それに服装や容貌もさう眼に立つ方で

はなく、成績も中位だし、間もなく一部のお轉婆連中からは「はんべん」と云ふ仇名さへ頂戴したのであります。柔かいばかりで齒ごたへのな
いと云ふ意味ださうです。

それがあの活潑な女王の様に氣高い勢力家のお千賀さんに見出されて
その知遇を厚うしたと云ふことは、校中一の不思議と喧傳され、嫉視の
的になりました。

お千賀さんにはみんなが近附きたがつて騒いだのでした。専攻科の上
級生ではあり、身分もよく美人で才媛で學校の花で、多くの部下と崇拜
者と競争者の人氣や衆望や羨慕やを一身にあつめてゐましたが、それだ
けではまだ物足らない。自分でも意識はしなかつたでせうが、なほ何物
か求むるところがあつたのであります。

偶然そこへ現はれたのが鈴音でした。しかし最初はたゞこの新入生がテニスやボールの仲間にも入らず、藤棚の下のベンチに集つて目白押をしてゐる群からも離れ、わざと肩手をかけ合つてさゝめき乍ら通る人達からは憎さげな流し眸と嘲るやうな笑ひ聲とを浴せられ乍ら、消然と紫銘仙の背を校庭の桐の木に靠せかけてゐたり、廊下の窓からぼんやり音楽室のヴァイオリンの音に聞き惚れてゐたりする、いつもひとりぼつちの寂しさうな風姿を可憐く思つて、何かと世話をしてやつたのが、すこし交際してみるとお千賀さんの方からすつかりこの少女が好になつて了ひました。

全校幾百の生徒中にはもつとく美しい賢い愛らしい少女たちが澤山ありましたけれど、なまじ才氣があり過ぎたり反撥しあつたりして、そ

れではお千賀さんの異様に強い征服慾が満足しませんでした。鈴音は若い女王様の理想的の愛物だったのであります。

鈴音はどんなにうれしいと思つても口に出したり、他の者の様にお追従もつかはなければお上手も云へませんでした。むしろいよゝむつたりしてゐる位でした。それをまたお千賀さんはみんなに見せつけがまし、度を越えた鍾愛をするのでした。お千賀さんの注目にはにがみ勝ちの鈴音もやつと會釋するやうになつたのはつい先達、まだ紅い八重櫻が梢に咲き撓むでゐる頃でしたが、今ではもう首筋を手に擁されて葉櫻のトンネルの下をそいろ歩いたり、毎朝電車を下りてから互に待合せてゐて一緒に校門をくぐれることをば上もなく喜んだり、聰明なお千賀さんにも似合ぬ他目には笑止な熱中の仕方でした。それら相手が相手なら兎

も角、鈴音では一向引立ちません。

矢野さんと云ふ姓を鈴音が呼ぶと、他人がましいと云つてお千賀さんはおこりました。けれどもお姉さまだの千い様だのと、甘つたれた口を利くことはわざとらしくてどうしても出来ませんので、誰に教へられたともなくいつからかお千賀さんくと呼び馴れますと、それからと云ふものは名前におの字をつけて呼合ふことが學校中の流行になりました。かうなつて來ると妙なもので、やれあの鈴音の眼が素敵だの、聲が美いのと持てはやす連中も出て來ました。意地わるの同級生も、お千賀さんを恐れて鈴音を侮蔑することをやめました。

青つばい爽かなセルの單衣にセビヤの袴を裾長うつけてゐるお千賀さんは、日本婦人としては珍しい程背が高うございました。みどり滴る初

夏の嫩葉を洩るるやはらかい光線は物の色を一しは美しく見せるもので例の藤棚の陰などに集つてゐる若い女たちの白い頬や艶やかな黒髪や、丸みのある肩やら胸やらの恰好がまるで觸つてみたい様に好ましく見えるのでしたが、殊にお千賀さんの線の美は女神像の様に立派でした。

十八とは云つても鈴音は小柄で、お千賀さんの口の邊に前髪がありました。身體も一たいに弱々しく、手のいろなど血の氣のないまで透き徹つて蒼白いのでした。

たゞ髪だけが黒くて豊でした。お下髪にすると腰の邊までありましわ「髪美人」などと陰口つく者もありました。そして思ひ深げなしつとりました、睫毛の長い美しい玉の様な眼を持つてゐました。

鈴音には両親がありませんでした。同胞もありませんでした。血縁の

者もすくなく、たつた一人のお祖母さんに六歳の年から育てられてゐるときけば、そのはきくせぬ早急の物の役には立つまじき打洗ひだ性質も、半は境遇の犠牲となづかれるのでありました。

二

無論お千賀さんの邸へも繁々出入するやうになりました。その頃は矢野家の一番活氣に満ちてゐた時代で、總領の兄様は醫科に、次兄の公二さんは一高の一部に、妹の泉子さんは双葉高等女學校の本科二年でした。四人とも顔立のよく似た仲のよい同胞で、鈴音はまだこんな賑やかな樂しさうな家庭を見たことがありませんでした。殊に初對面から母のなしい鈴音の心を惹いて、その温情の染々と身に泌み渡るやうに覺えたのは

お母様なる人の態度でした。

まだ五十には間のあるらしいのに質素な綿服に髪も引詰の束髪、細い銀ぶちの眼鏡をかけて、笑ふと金齒が似氣なく目立つほど優しいのでした。お父様は満洲の方に經營の御事業があるので、東京へ歸つて來られるのは僅に議會の開期中だけなさうでした。お兄様は如才なくさばけた方で、よく面白い諧謔を云つては家内中を笑はせたりしてゐました。鈴音なんぞはまるで子供扱ひにされて居りましたから此方でも馴れて、遠慮なくお話をせがんだり甘へたりふざけたりも致しましたけれど、公二さんはそれはぶつきらぼうで女にでも逢へば黙つてお叩頭を一つするばかり。氣づまりでおつかなくつて仕方ないので、臆病な鈴音はおち合ふとピク／＼ものでゐました。

夏休み中など兄さま達が旅行に出拂つてしまふと、泊りがけで遊びに呼ばれたりしました。鈴音はお千賀さんからお繪を教はりたいのが一心でした。丁度その頃は上流社會の令嬢間に浮世繪のお稽古の流行はじめた時分で、無論お千賀さんもその數には漏れませんでした。毎週習ひに行つてゐるお仲間が花の様なら若い令嬢達ばかりが三十人からありました。そしてお千賀さんは夏期休暇の大部分をその爲にあてゝおましたから、早朝から二階の八畳に引きこもつて、参考品やら下書やら一杯に取ちらした中に打吟じつつ、俯けた面をぼうつと上氣させて、熱心に繪筆を動かしてゐました。唇などは五色に染て……。

鈴音は繪の具の皿をあぶつたり、筆洗の水でも取替たり團扇の風を送つたりし乍ら、根氣よく傍に待つてゐました。お千賀さんも繪に取りか

ゝると人が變つたやうになつて、鈴音のゐることなどは忘れてしまひ、たまに口をきいてくれかと思へばつゝけんどんなお叱言などを頂きました。しかし鈴音は儼かすに座つて居りました。

お母様は二人の爲にぶ手製のゼリーだの涼しい飲料だの果物だのを、よく氣をつけて持つて來て下さいました。そして、鈴音のたのしみの一つでありました。綺麗な玻璃のお皿から銀の匙で一口すくひ入れる時の美味さ、冷たさ！舌もとろけさう。

さうしてお千賀さんの仕事の日々歩進してゆくのを、鈴音はわが上のやうにうれしくてたまらなかつたのであります。時折はモデルの役もつとめました。けど無暗に固くなつて叱られたり、十五分間も一つ姿勢をつゞけてゐさせられたりすると、首が痛くなつて困つたりしま

した。梓に繪絹を張つたりドウサを引いたりするお手傳ひもいつのまにか覺えました。

夕食後家内中で買物や散歩に出るたのしい夕もありました。浴後の夕化粧の香を追風に散らし乍ら!! 銀座へゆくことをお千賀さん達は何故か一高語で「南へゆく」と云つてゐました。派手な麻の葉模様の中形もすりんや明石縮の浴衣に、燃え立つやうな紅地羽二重の絞りの帯など締て。

髪は泉子さんはお下髪ときまつてゐましたし、お千賀さんも前髪を七三分に分て鍔でもあてやうと云ふ、その頃にしてはすばぬけたハイカラでしたけれども、お母様は日本髪を結ふことがお上手でした。で、よく鈴音にだけ結つて下さいました。それがまた髪の艶など惚れくと匂ふば

かりの出来榮でした。するとお千賀さんが花櫛だの根がけだの簪だの、惜しげもなく買つてくれるのでした。わざわ金春新道の小間物屋へ入り込んでまで。

眩い白光電氣の光りを浴びた美しいお酌達が友禪の袂を土間にひきずり乍ら店先に腰かけて、あれこれと品定めなどしてゐる間に交つて、お千賀さんのわるびれぬ態度が鈴音は上もなく誇らしがつたのでありました。緋や紫の鏡附、紙入、島田の兩天、結綿をかざる藤色や紅や淺黄や淡紅色鹿の子、摘細工の薬玉簪、銀の短冊のちろめく前挿、はこせこ、平打。さうして橘だの重ね扇だの裏梅だの波に千鳥だのの圖案がみんな人氣役者の家の紋であるといふ智識をも始めて得ました。

夏の夜の銀座街は燈火と色彩と浮きくした笑ひ聲と舗石道に反響す

る儼然たる足音とが、入亂れもつれ合つてゐました。暗い横町においし
い蕎麥屋のあることや、輝かな白堊の洋館の樓上で麥藁の管でチウ〜
ソウダ水を吸ふことや、鈴音はいろんな變つた世界を見ました。

三

十八にもなつて鈴音は始めて芝居と云ふものを見るのでした。それは
如何なる歡喜と驚異であつたでせう、丁度二幕ほどすんだ場内の空氣は
ざわ〜と取りとめもなく浮き立つて、歡樂の微風に幕がゆら〜揺れ
てゐました。もうたい眼を圓くして四邊を見まはすばかりで、お千賀さ
んに優しくたしなめられたりしました。どちらを見ても白い顔や紅い襟
や紫の羽織や花やかな色彩の中に、公二さんは細かい紺飛白の無骨な

姿を點じてゐました。さうして幕間になると敷居に腰を下して、ふくらました懷中からノートやフランスの小説を取出して讀んでゐました。お千賀さんは鈴音の手を引いて人々の袖と袂の間を縫ひ乍ら、運動場へ出て簞店やゑはがきなど見て歩きました。化粧室には美しい女たちが一杯でした。

「阿波の鳴戸」のどんどろ大師の場では、みんな随分泣かされました。公二さんまでが袴腰にはさんだ手拭をとつて涙を拭くのでした。誘はれて鈴音も悲しくなりました。世にも偉い親子の宿世！可憐なお鶴の順禮姿が花道にびつたり座つて、楓の様な手を合せながら、

「何處をどうして尋ねたら父様や母様に逢はれる事ぞ、逢はしてたべ、

南無大悲の觀音様……」

懐紙よとしろがみもはんかちも襦袢じゆばんの袖そでもびしよくに濡ぬらしてしまつた鈴音すずねは、

遂つひにお千賀ちがさんの膝ひざに俯伏うつぶせしました。お千賀ちがさんも眼めをしばたき、乍はならも笑わらつて、鈴音すずねの肩かたに手てをおいて、そして自分じぶんの手布てふちをそつと握にぎらしてくれました。床ゆかしい香水かうすみの匂におひがぶんとしました。鈴音すずねは眼めをつぶつてその香氣かきをなつかしみました。瞬間しゆんかんは舞臺ぶたいも子役こやくも何物なにものをも忘わすれて……。

その他文展ほかおきてんに演奏會おんしやうかいに運動會うんどうかいに菊見きくみに紅葉もみぢに、いつも鈴音すずねの加くはへられないことはありませんでした。しほれた切花きりはなの水みづを得えたやう、彼女かのぢよはめさきく當世風たうせいふうの乙女おとめになりました。

「貴女あなたはこの頃眞實ころほんたうにお綺麗きれいになつてよ。もし私わたしがこんな仲なかよしでなければいつそ憎にくらしいと思おもふ位くらゐよ。」

お千賀ちがさんはちつと鈴音すずねの手てをとらへて横顔よこがほを見つめながら、こんな

申談を云ふこともありました。鈴音はぼつと頬を染てだまつてうつむいて了ひますが、實際學校でもやかましやの老嬢の先生達に白眼れるやうになつたのは九月の新學期からのことでした。衣紋の抜き方袴の穿き様からお化粧の秘訣まで、すつかりお千賀さん直傳でした。

けれどもそれは老祖母の氣には入りませんでした。鈴音はもう以前のやうに柔順ではありませんでしたから。しかし今までもとても音無しいと思はれたのは默然家だからで、内氣なやうに見えたのもその實ひどい強情だからで、鈴音の性格と云ふものはさう單純に取扱はるべきものではなかつたのであります。

たのしい冬の休暇には、お千賀さん達は絶えて久しいお父様につれられて、豆相あたりの温泉場へ出かけます。鈴音はそれがたとへやうもな

く嫉ましく怨めしく、世の中が味氣ないやうにさへ思はれるのでした。その爲に切角のお正月も面白くはありませんでした。早く學校が始まればいゝとのみ願ひました。

そんな時お千賀さんからはよく手紙が來ました。お千賀さんの文章は學校でも評判の、艶麗なものでありました。それを讀むとき鈴音の頬は燃えました。まるで酔はされたやうに！

そして返事を書き送る爲めに伊東屋や榎原へ行つて、お千賀さんとの同じやうな、高價な舶來の西洋封筒だの、玩具みたいな巻紙など探してゐることを覺えました。紫、白、青、淡紅、水色、いろ／＼の紙箋の上には、戀、涙、思慕、姉君、妹などと云ふ字が幾つも／＼散つてゐました。鈴音は一時またもやこの新しい道樂の爲に熱中し出しました。

榮ある卒業式のその日、お千賀さんは専修科の總代として答辭を讀み天晴れ才媛の譽高く、巻いた證書を手にして、名殘惜しげにまた嬉しげに、角幌の俵に姿をかくして永遠にこの王國の校門を立ち去つて了ひました。

新學期が始まつてからも鈴音はぼんやりと氣拔けのやうにしてゐました。當分の中は何かと云ふと同級生が取まいては、御愁傷さまだのお察し申してよだのと調處つたり冷かしたりしました。無論お千賀さんとの交通が絶たわけではありませんけれど、力は距離の自乘に反比例すると云ふニュウトンの引力説は、かうした場合にも適用されるもので、逢見

る機會の遠のくにつれ、ついお互に遠慮や隔も出来て來ました。たまたまの日曜に訪ねて行つてもお千賀さんはお稽古事けいこことに忙しく暮してゐました。今まで投げやりにしてあつたお裁縫だのお料理だのお三味線だの……。

さうして間もなく婚約のことが發表されました。何にせよ降るような申込の中から選りぬいた又とあるまじき良縁、智君は外交官で赤門出の俊秀、いま本省詰の少壯のちやき。

鈴音は限りない失望と哀愁を覺えました。と云つて何もお千賀さんがよそ／＼しくすると云ふではなし、相變らず會へば話もつきませんでしたが、折々無形の沈黙が二人の胸を流れました。笑ひ合つても心のなかはそれほど可笑しくはないのでした。お芝居などへつれられて行つても

何となく他人がましい感じがしました。それにもう鈴音にもおひく個性と云ふものが固まりかけてゐましたから、甘いばかりで理解のない祖母の愛には勿論のこと、あまりに専制的なお千賀さんの愛撫にもいつか不満を覚え初めたのでありました。

お千賀さんから離れた鈴音の心は、藝術家の名譽や權威や榮達と云ふ高いく憧憬的に向いたのであります。好きなお繪に専心にならうと思ひ極めました。無論祖母を説きつけるまでの面倒さと苦心と云つたらありませんでしたが、鈴音の決心は強うございました。萬障を排して某大家の許に入門することになりました。

喜んでくれるかと思つたお千賀さんは、案外冷淡でありました。それはお千賀さんの身にして見れば出し抜かれたやうな不快もある上に、

この頃そろ／＼自我を見せかけて来た鈴音の振舞が、小僧らしきも音もなく、しくも思はれました。鈴音の擇んだ師匠がお千賀さんの先生を、すつと凌駕した人であるのも氣に入りませんでした。

『まあ、しつかりやつて御覽になるがいゝわ。』

と云つたばかりでした。それにお千賀さん自身にはもうゆつくり繪絹に向つてゐられるやうな、時間の餘裕も心の餘裕もありませんでした。

鈴音ももうお千賀さんの顔色の動き方などを、さう氣にしてはゐませんでしたから新奇な希望と努力の世界が前途に美しく展げました。幸ひ鈴音は斯道には天稟と云つてもいゝ程の器用さと、鋭い頭腦の働きを持つて居ました。技はずん／＼すゝみました。めつきりと面瘦のするまで意氣込みと勉強の仕方すら烈しうございましたから。

五

その年鈴音の夏瘦は秋になつても回復しませんでした。終に萩の花のこぼれる時分から學校も休み勝ちにぶら／＼してゐました。身體が何となく疲勞切つて、熱が出たり悪寒がしたり、床につくほどではありませんけれどもやつれた顔して、朝晩はひどく咳嗽に苦しめられたりしました。あげくに到頭或うそ寒い朝眞紅なもの、交つた痰を啗きました。はつと思つた鈴音は驚きよりも悲みよりも無性に腹立たしく感じました。醫者からは肺炎加答兒だと云はれました。そしてその恐ろしい豫後を説かれて、なるべくならこの一冬は暖い海岸へでも轉地するやうにすゝめられましたので、當人よりも老祖母の驚愕と狼狽が甚しかつたので

あります。常々自分の老健さに引きくらべて、當節の若い人の鷹鷲といふことを口癖の様に嘲つてゐただけ、わが罪の様に氣もとがめ、そこは年寄りの効性なく、神佛に日参め、斷物までする騒ぎ。轉地のことも海岸と云へば幸ひ鎌倉に別莊を持つて住んでゐる知人のあるのを幸ひ、その人の世話で其の他に兎も角も一軒の家を借りうける運びにまでなりました。鈴音は憎い程おちついて、病床からあれこれと祖母に指圖して居りました。

病氣と聞いてお千賀さんは屹驚して、早速見舞つてくれました。けれども俾が戶外に待つてゐるので、さうゆつくりするわけにはゆきませんでした。お天氣だつたら明後日鎌倉へ立つと云ふ日で、荷造りなどもしかけてあつて、家中はらちもない有様でしたが、鈴音は案外暢氣にして

ぬました。お千賀さんの案じたやうなことは少しもありませんでした。力づけやうとした身が反對に、かへつて張合のない位でした。

かうして別れて了つたのであります。かけちがつてそれつきり逢ふことなしに、お千賀さんの花やかな結婚式の記事は、翌年の三月新聞紙上で讀みました。

六

花咲き花はうつろひて幾春秋、鈴音ももう二十三になりました。

その健康は普通以上に、病氣の痕跡もといめず回復されました。娘盛りにもなかつたほどすつと肉附がよくなつて色が瑞々と白く、四肢がのびやかに、背丈が高く、年齢のつけたひれもありました。それに長い間面倒を見てくれた老祖母が、年來の心勞の結果か、中風症の様な氣味で

立居が不自由なばかりではなく、大變にばけてしまひましたから、鈴音も今では一家の女主人として、何事も處理してゆかねばなりませんでした。人間もさばけて自分から諧謔の一つも云ふやうになつてゐました。

假寓とは云へこんなに住みなれてみれば、さう居心地もわるくはないので、鈴音はもう都へ歸らうとはしませんでした。この頃また出席はじめた舊帥の許の研究會も日歸りに汽車で往復しました。

足掛五年と云へば短い月日ではありませんでしたから、市區改正や新築やらで、東京の様子は目ざましく變つてゐました。鈴音は當分一人歩きや買物したりするのが恐うございましたから、眞直ぐに先生の處へだけ行つて眞直ぐに鎌倉へ歸り／＼してゐました。

が、少し都會馴るゝにつれて懐しく思ひ出されるのはお千賀さんの一

家かでした。矢野やのの小母おはは様は病氣びやうきのことについては人一倍ひとはい神經質しんけいしつで、鈴音すずねはそれをよく知り過ぎてゐましたから、遠慮えんりよして訪ねなかつたのであります。が、もう大丈夫だいぢやうぶだと思ひました。元來もとより友情いうじやうだの舊友きゆうゆうに逢ひたいなどと云ふ心の底そこには、自分の好奇かうき的興味てききやうみを満足まんぞくさせたい慾求よくきうが七分ぶちをしめてゐるものですけれど、矢野やの家の人々ひとびとに對してだけは純粹じゆんすいな好意かういと思慕しほと感謝かんしゃの念ねんをもつて居りました。そこである時突然とちとつぜん何の豫告えんがれもなしでしただけ共、思ひ切つて訪問ほうもんいたしました。

電車でんしゃを下りてから鈴音すずねはまごつきました。さう變化へんくわの度ほどの激はげしくないと、邸街やしきではありますものゝ、でもずゐぶん變つてゐましたから、曲まがるべき道みちを行き過ぎたり、唯一ゆいの心こころあての建築たてものがあとかたもなくなつて了つてゐたり。

昔馴染の黒板塀の前に立つた時、鈴音は異様の昂奮に頬を紅くしました。さうして内玄関の香脱石の上に並んでゐる柱目の薩摩下駄や紫鼻緒の草履やに、もしや他に來客かと胸を轟かせ乍ら案内を乞ひますと、折よく直ぐ次の室にでもゐたらしく「はい。」と優しい返辭がして衝立の蔭からしとやかに現はれたのは、お千賀さんに日本髪を結はせたかと思ふほどに成人した泉子さんの娘姿でありました。

でも見覚えがあつたと見えて、

「あら、鈴音さんでせう。まあお珍しい！どうぞお上りあそばせ。よくねえ！」

と指の附根に壓のやうなくぼみの出来る女らしい手を組み合せ乍ら、笑みを含んで見上げました。あの裾短な紺サージの洋服に引詰の垂髪で

跳まはつてゐた泉子さんが。

「突然……お差支はございませんの、御都合は？」

鈴音は履物を脱ぎかけ乍ら、流石に他人行儀でした。

「えい〜。何にもございませぬのよ、差支なんか！母は一寸他出して

居りますけれど直ぐ歸りますから！さぞよろこぶでせう、どうぞ。」

早速背後へまはつて、コートを脱がせてくれました。

「おみ大きくおなりになりましたねえ。もう以前のお姉さまそつくり!!

これですもの、私たちのお婆さんになるのも無理はありませんわね。」

鈴音ももうこんな世馴れた口の利き様をしました。泉子さんは背のす
らりとした、櫻の花片を溶いたやうに顔色の麗はしい、瑞々しい桃割が
よく似合ふ、殊に藤色鹿の子の半襟は一入襟元の白さを引立て、見せま

した。

が、それよりも鈴音を驚かせたのは公二さんの變り方でありました。どうでせう、インキだらけの小倉の袴はセルになり、ゴツ／＼の飛白の羽織を着ぶくれてゐたのが細かい大島など着て、マントもよしてインパネスで、殊にその頭髮は鴉の濡羽色よりも濃く艶々と分けられてゐました。それが今何處かへ出かけるところで階段を馳け下りて來た出合頭の玄關で鈴音とぶつかり合つたのですから、お互にはつとたちろぎました。が、やがて鈴音は挨拶もしない先に『まあ。』と云つて思はず笑ひ出しました。泉子さんは微笑み乍ら、あきれ顔の公二さんに、

『お兄さま、鈴音さんよ。』

「何です、鈴音さんだつて！これは驚いた。だが失敬だな、突然あらま

あだなんて……。」

「だつて感歎詞ですよ。ほ、ほ、ほ。」

公二さんの方でも數年間の變化を歴然と目の前につきつけられて、少なからず驚愕しました。あれほどに小柄だつたひとが普通以上の背丈を持つ女になつて、精悍な額つきや利かぬ氣らしい口元の締り工合や、全然別人の様な感がある。

「ふけたなア。」

と公二さんは思ひました。鈴音は歓迎の笑聲に包围され乍ら奥の間へつれられました。昔に變らず心置きない歡待され方に、鈴音は涙の滲むほどうれしく感じました。外の方ではないから此方がよろしいでせうと云つて泉子さんがお茶の間から置炬燵を布團ごと引張つて來ました。そ

炬燵布團にお千賀さんの不_ふ断_{だん}着_せだつた赤_{あか}と黒_{くろ}との棒_{ぼう}縞_{しま}の荒_{あらい}い銘_{めい}仙_{せん}が直_{なほ}されてあるのも堪_{たま}らない寢_{なつか}しさでした。

公_{きみ}二_にさんもインパネスの裾_{すそ}をはねたまゝそこへ腰_{こし}を据_{すまこ}込んでしまひました。お炬燵_たの上_{うへ}には銀_{ぎん}紙_{がみ}の丸_{まる}めたのやキャラメルのパラフィン紙_しやが散_ちらばつてゐました。泉_{せん}子_こさんはそれらを拾_{ひろ}ひあつめ乍_なら、鈴_{すず}音_ねの顔_{かほ}を見て恥_{はづ}かしさうに笑_{わら}ひました。

「チヨコレートを頬_ほばつて居_ゐ眠_{ねむ}るブリンチュリー大_{たい}尉_{じゆう}よ。」

つくづくお前_{まへ}が慕_{した}はしけれ、羨_{うらやま}しけれ。」

歌_{うた}ふとも口_{くち}ずさむともつかず公_{きみ}二_にさんはそんな事_{こと}を云_いひ乍_なら、むぐむぐと何_{なに}か食_たべてゐました。泉_{せん}子_こさんは馴_なれた手_てつきでお茶_{ちや}を注_つぎ乍_なら、

「さうく、大_{おほ}き兄_{あに}はねえ、去_き年_{ねん}歐_お羅_ら巴_ばへ立_たちましたんですよ。」

「あら！些とも存じませんでしたわ。それはお寂しうござんすのね。でもお羨しいこと！」

「鈴音さん、僕だつてもうぢきマルセーユへ立つんですよ。だからいつ獨乙の潜航艇にどかんと一發やられるか知れないんですよ。」

「あら!! 嘘でせう。」

「嘘なもんですか、尤も立つと云つても七月學校を出てからのことですか……。」

「まあ、皆さんして日本を見限つておしまひなさるんですねえ、心細くなりませすわ。今度は泉子さんの御順番でせう。」

「それを母が云ふんですのよ。ですけれど私のやうな意久地なしはどうせ駄目!! もうあきらめて母のお傳役に残つてますわ。おとなしく。ほ

／＼。』

お千賀さんはいまリヨンにゐます。鈴音の許へも折々消息はありますけれど、あまりにかけはなれた身分といひ、白百合の様に氣高い洋装の寫眞など見るととても近づきがたいものゝ様に思はれる。

『千賀の奴もういやに夫人ぶつてゐばつてるんですよ。妹のくせにね！』

『兄さまのお嫁さんの世話を焼いたりなんかするんですよ。』
と泉子さんがすつばぬいたので、みんな一せいに失笑してしまひました。

その笑聲の反響の静まり切らぬうちそつと襖を開けて、

『お嬢さま、あの満子さまがお出ででございます。』

『まあ、丁度いゝところへ。鈴音さんもお久しぶりでしょ。きつと屹驚な

さるわ、こゝへお通し申しておくれ！』

満子さんと書いて鈴音は固くなりました。それはやつぱりお千賀さん時代からのお友達で、鈴音とも見知越しの間でありました。その頃からなかくのやりてい小母様とも親しく、兄様や公二さんたちとも討論でも何でもやりました。そして満子さんはしつかり者だと讃られてるのを及ばぬわざの羨しく鈴音は心ひそかに妬んだこともあるのでした。で、思はずも面が熱くなりました。無論もういまそんな感情は少しもありません、たゞ微かなつかしさのみが残つてゐますけれども……。

「やあ珍客来々、満子さんは僕の喧嘩友達ですよ。」

と公二さんは例の快活にはつはと肩をゆすりました。

「あら！』

満子さんは巧妙な驚きの表情をして、鈴音の傍にすりよりました。女優のやうな分髪に白粉こつてり、兩頬には臙胎が濃く潮されて紫紺地に浮模様の繻ひのある金紗の羽織は華やかでしたけれど、流石に年のおとろへをかくすことは出来ませんでした。何處となく骨立つて皮膚も荒れてゐました。

「ちよいと何年ぶり！まあこの間に貴女はどんなにか向上進歩なすつたでせうね。長い月日にはお互に随分さま／＼の教訓を得ますわね、私だつてお話しすれば嘘のやうにつきないロマンスもありますわ、いつかゆつくりお目にかゝりたいと思つてましたの。以前を知つて、下さる方とならしんみりと心のふるえるような、ほんとうの涙が流せるかも知れない……。」

「満子さんまた初めましたね。もうそんなお話はよしにしてどうぞ。」

もつと何か景氣のいゝやつに願ひたいものですなア。」

「あら、貴君も随分ね。女の生命にはこの涙が甘い飯料なのですわ。このなやみが心の食物なのよ。」

「ところがあんまりこれも滋養になる、あれも食べなくちやと云つてると食傷しますからねえ、……それとも涙をのんで世を暮すか。そんなお方はこちや知らぬ……アハ、ハ、ハ。」

「駄目よ、あれだから兄様は。」

泉子さんは満子さんのあまり眞面目なのに仕方なく笑ひ乍ら自分の方へ引取りました。鈴音もどつちつかずの薄笑ひしてゐますと、

「貴女は相變らずお温順いのねえ。」

など、物足りない氣に云はれました。こんな人に人がわるくなつてもか
 鈴音は心中で可笑うございました。泉子さんは林檎をむいてみました。
 くるくると巻いた物をほつすが如く紅い皮は長く膝の上に……。

公二さんはその一片をナイフの尖きに突きさして口へ入れ乍ら、
 『時に満子さん、恵美ちゃんは其後どうしましたね。先刻もね、泉とそ
 の話をしたとこですよ。』

『あらつ。』

と何かは知らず満子さんの面には、春の様な歡びの血潮が颯と昇つた
 のでした。膝を進めて、

『あのね、先達のお手紙には何だか時間といふものが非常に重く感せら
 れ、すべてが自分一人を強逼しつゝある様に思はれますつて。……お

友達ともだちはみんな嫁かたづいてしまふし、昔むかしのたわいなかつた女おんな學校時代がくどうじだいを思おもはれて……理知あきらしれぬ涙なみだに誘さそはれます、なんて頗すこぶる非觀ひくわいの體ていよ。』

『先日このあひだねえ、金比羅こんびら様さまのお縁日えんじちに會あつたと云いふ人ひよがあるんですのよ。そして驚おどろいたと云いふんですのよ。だつて惠美子あみこさんはね、金比羅こんびら様に御お願ねがをかけて、恰度ちやうどその日ひが結願けつぐわんの日ひだつたのですつて。』

『苦くるしまぎれの神頼かみだのみか！それにしても近頃ちかごろの新しい女おんなにも似合にあはぬ殊しじう勝者しょうものだね。何どうですか、鈴音すずねさん、僕の妻めかけに貫ぬはふか？ねえ、戀こひだの愛あいだのつて騒さわいでた女おんなの様やうでもないぢやないか。』

『でもね、昔むかしはね、そんな方かたぢやなかつたんですわねえ！満子みつこさん。』

『おや、泉せんちゃん。お前まへも何なにか知しつてゐるのか。これや初耳はつみみだ！なにか惠美あみちゃんについて珍めづらしい話はなしでも聞き込きこんだのかい。何か具體化ぐたいかされ

に事件でも……』

「それや別に……そんな深い事情は知らないけれども、随分面白い事もあつたのですつて。」

「生意氣云ふなよ。それや仕方がないさ、惠美ちゃんが他の男に惚れたといふ事と、孝さんが惠美ちゃんに夢中になることとは因果關係がないんだからねえ、ねえ、鈴音さん、満子さん、さうでせう。そして女が自分は男に惚れられてると感付いたら最後なんとなく、強くなりませう。男を手玉に取つてやれ、かういふ氣も起るぢやありませんか。それが人間の本能でせう。僕なんかそう思ひますよ、女だつたら男を散々弄んでやる。面白いぢやありませんか、よく講談にあるぢやありませんか。何とかいふ美人が大家の甚六をだまして金をとつて、

「昨日来いと突き出しちまアなんて。」

「公二さん、その毒婦と惠美ちゃんと何か關係があるんですか。」

「おつと、それやねえ満子さん、——いや脱線大脱線！然らば話しは元に戻つてと、惠美ちゃんと孝さんが……如何したんだつけ。」

「兄さまつてば、もうおひやらく云ふのはおよしなさいな。」

「然しね、泉ちゃん、それは決して惠美ちゃんは悪くアないんだよ。孝さんがグヅ／＼してるだけなんだよ。男が勝つか女が勝つか、われわれの戀はそれ下目出度い結末をつけたり、悲しいドラマの最後の幕を閉ぢるんですよ。孝さんの場合はそうだね、孝さんは決して悲しまないんです、それでも愉快ではないんです、不安のうちに蠢動してゐながらそれでうれしいんですよ。惠美ちゃんに甘い言葉をかけられると

まるで盲目になつちまつて、惠美ちやんの行動なんか見えないんです。
惠美ちやんから冷遇される、孝さんは悲しく思ふけれども、惠美ちや
から離れたくない、——惠美ちやんが放さないのかも知れぬ。要する
にあくまで甚六の好型に出来上つてるんですねえ。』

『しかし可愛いぢやアありませんか。そこが……。』

『そうさ、女から見たらいゝおもちやでせうよ。』

『先達ね、この頃孝さんにお會ひになる？ つて訊いたら、否、些とも
なんて云つてゐましたが、孝さんは遊びにゆかないんですか。』

『まアそうです。お互に綺麗に？ 別れたんでせう、——不爲だから。』
『でもおかしいわねえ。私共は戀の爲に戀をします、つて有仰つてらし
たぢやアなくつて！ あれほど——。』

「初めは……、でも今はそうぢやない。惠美ちゃんは別れの日に孝さんに云つたさうです。私は貴君の前途の爲に別れます。あなたの幸福の爲に、あなたの不安をなくす爲に……。孝さんも同じ様な事を云つてさよならにしたんですつて。」

「さう……それぢやあなたや涼子様と同じ運命に陥つたわけね、同じ第一歩から踏み出して。」

「そうですね、然し僕のと少し異ふ。結果は同じですがね。謂ば孝さんはだんく戀人の短所や缺點が見えて飽が來たのです。惠美ちゃんもさうです、高い情熱の燃えてない男はわたし嫌ひよてな譯で……。涼子と僕との間にはまだ利害問題なんていふ具體的なものが出て來ないんですよ。——たい運命の定められた道をおとなしく行かう、かう考

へたのですよ、涼子も僕も。』

鈴音は恍惚と伏目になつて、布團のとち糸を弾いてゐました。面白さうな話だけれども、何のことやら一向事情がわからない。これだけもうこの人達とは後れ遠ざかつてしまつたと思へば、うら悲しくも嫉ましくもありました。

そこへ小母様がお歸りになる。一番變つてないのは小母様でした。まだ髪も黒く、お顔の艶もようございました。お眼をなくしてしみ／＼と早速縁談の有無など云ひ出して、鈴音の耳朶を染めさせました。

七

これを復活の機縁に鈴音はまた泉子さんや公二さんから、繪端書など

貰ふやうになりました。上京すると三度に一度は其家の格子戸をくゞり
 もしました。それはお千賀さんがゐないのですから何かにつけて、亡き
 人をなつかしむにも似た寂しらは湧きましたけれど、泉子さんが無邪氣
 で快活で、ほんとうに氣持の好い令嬢でしたから、お千賀さんほどの
 才氣と威容にはとばしいか知れませんが、もつと實際的でしたつかり
 したところがありません。氣性も公二さんにいちばんよく似てゐるやう
 でした。公二さんも同じ妹ながらお千賀さんよりも一入、泉の奴が泉の
 奴がと言葉は荒いけれどそれは大切なものにしてゐました。鈴音はそれ
 が羨しくつて、兄様でも弟でもいゝ、男の同胞が一人あつたならとつ
 くゞり思ひました。

ある日生憎お母様も泉子さんもお留守のところへ行き合せました。鈴

音は失望しきつて式臺に腰を落したまゝ考へ込んで居りました。新參の下婢の梅は鈴音の顔を知りませんので、これも迷惑さうにまじくと、お愛想らしいことも云つてくれませんでした。そこへ折よく公二さんが學校から歸つて來ました。

「なんだ、鈴音さんか。お上んなさい、上つて待つてれば可ぢやありませんか。みんなもう直き歸りますよ。さあ、泉の奴の室へでも行つてらつしやい。ホラ、僕だつていゝお土産がありますよ。」

公二さんは櫻ひもで結んで下げてゐる新聞紙包を眼の高さで振りまはして見せました。

「あてゝ見ませうか。また眞黒に焦げたやうなバナ、でしよ。店ざらしの店じまひでもしてゐらしたの、本郷通りぢやよく大道に露店をひろ

「げてるぢやありませんか。」

「これは手きびしい。は、は、は。」

泉子せんこさんのお部屋へやは下の六疊むつたまで、お千賀ちかさんからゆづられた調度てうど類るいも多いので、机つくろ、本箱ほんはこ、鏡臺やうだいの様なものや、大きな京人形きやうにんぎやうの玻璃函はりやう入りやお琴ことやヴァイオリンの置場所おきばしよも、以前むかしとさう大差たいさはありませんでした。一隅いつぐの黒塗くろぬりの衣桁いかけには脱捨ぬぎすての平生着へいぜいらしい、菊水きくすい模様の紫地むらさきぢの銘仙めいせんが派手でな友禪ゆうぜんめりんすの長襦袢ながじゆばんと重なつたまゝ無造作むぞうさくに打うちかけられてあります。壁かべにはお千賀ちかさん筆すぢの半身たうせいの當世美人たうせいびじんが、淡紅色たんせきしよのウニールうにールを片手ひとてにかゝげて金かねぶちの額がくの中なかから見下みおろしてゐます。

そこへ公きんじ二にさんも這入はいつて來きて、どつかりと書物しよぶつ包つみみを投げ出なして、オーバーおーばーを着きたまゝ座すはりました。その笑顏わがはが堪たまらないほどお千賀ちかさんに

よく似てみました。

『どうしてゐます、この頃は！ いやに納まつちまつちやいけませんよ。妹の奴もお噂してゐましたよ、ちつと出かけてくればいゝのにつて。若い者には刺戟が必要でせよ、刺戟から遠ざかるとお婆さんになりま
す。』

『もうすつかりなつてしまつたんですよ、仕様がありませんわね』

と鈴音はお紅茶の茶碗を取上げ乍ら笑ひました。

公二さんはこの日大變な氣焰でしたがふとした動機からそのグループ

——鈴音はこれを稱して一名「平家の公達」と云ふ、氣の弱い美しい青

年達——の高等學校時代から大學へかけての、さまざまなローマンスを

聞かしてくれました。

鈴音はもつと立ち入つた質問がしてみたくつてたまらなかつたのですけれど、流石に公二さんも自分自身のことについては、何にも言及しませんでした。誰しも自分の口から自分のロマンスを人に語るといふ事は——恥かしいからなのではなくつても、何となく厭なものですから。鈴音もまた訊巧者の方ではありませんでしたから、いづれまアその内になど、うまく胡麻化されて終ひました。

鈴音自身にはこの年になるまでまだ戀といふものゝ經驗がありませんでした。その最初物なつかしう瞳のうるみ初めた時分には、お千賀さんと云ふ對象がありましたから、外に心のうつるところではありませんでした。次には繪筆の先に身も心も打ち込みました。それは程なく病氣の爲に打捨なければなりませんでしたが、しかし鈴音は失望はしま

せんでした。きつと復活して見せると云ふ前途の希望と光明に鞭うたれ乍ら、一生懸命になつて養生しました。醫師の命令などはどんな些細なことでも正確に守らないと云ふことはありませんでしたし、長くなつても飽きませんでした。その神妙な行爲と心がけは他の患者の模範にあげられる程でありました。それやこれやで機會のないことはなかつたけれど、戀なんぞしてゐる暇はありませんでした。

病氣の治つた時分にはもの分別が出来過ぎてゐました。藝術に對する執着も以前のやうではなくなりました。が、今まで夢にも知らなかつたほどの強い好奇心と慾望をもつて、すべてのことを知りたがる皮肉な傾向を帯びてきたことも事實であります。鈴音は好みな苦心を重ねた末にやつと公二さんの戀した女と云ふのをつきとめました。それは柏木邊に

住む有名な某大學教授どの、愛嬢で、

「吉野博士の令嬢！ あれは貴女、それや非常な美人ですよ。」

知る程の人はみなかう答へました。例へば緋桃の花の様なタイプを持つた……、純日本式のお化粧の濃い、いつも桃割に水油を勻はせて滴れるやうな美しさを見せてゐると云つた風な人なさうでした。

公二さんといふ人は子供らしい方だとばかり思つた最初の印象が先入主になつて居るものですから、今でさへ鈴音はともすれば自分の方が年上の様な氣がする位ですのに、そんなことを聞きますと殆んど隔世の感が致しました。おかしな比喩ですけれど、丁度姉が妹の初めての丸鬘を見た時の様な氣持にも似て……。そしてつい人わるく冷かして見たくて、ある時公二さんを追究しました。公二さんは眞面目でした。一束の

文殼や古日記のノートをどさりと投げ出し、その餘白へ鉛筆で鈴音の顔
をにらまへながら書きつけました。そして無言で鈴音の前へおしやりま
した。

「自分達は今や長い學生生活を終らんとするに際して、その反映たるこ
れらの紀念物を焼いてそして悲しき、そして愉快なる吾人の若き短き
命にサヨナラを高唱したい。そして華々しい奮闘の生活に入りたい、
その餞別として貴女に告白します。このやるせない悲しみを幾分なり
と知られることによつて、私共は慰められるかも知れません。」

八

三月の中旬過ぎと云へば向陵では第二學期の試験が間際になつて、勉

強家は四時半の夕食がすむとすぐ圖書館へつめかける。平生なら十一時過ぎてから一高屋のオデンを荒しに行く連中も早く歸つて来て、ストームが滅つて蠟勉が殖、寢室の壁にはおそくまで大きな海坊主のやうな影法師が、五夕蠟燭の灯影にゆらめくと云ふ光景。

そうしてそれは春雨が音もなくしめやかに降りそぐ、生暖い晩でした。十一時といふ消燈後の向陵の天地は珍しく静寂としてゐました。まだ物思ひ知らぬ身の幸福なその頃の公二さんは、窓際に近い自分の寢床に横たはり乍ら、もう櫻の蕾の紅くふくらんだことや間近いポートルースのことや、自分の關係してゐる辯論部のことなどに思ひを馳せてゐましたが、何だか妙にその晩は眠れない。檐を傳ふ雨だれの音は一種の眠りと秀らこちかはらず、神経が冴えてしまつて、どうしても寝つかれ

ませんでした。そのうちにふと孝さんのことが氣になり出しました。

孝さんはこの頃同じ部の委員になつた爲、公二さん達の部屋に合宿することとなり、北寮の方からついこのあひだ引移つて来たばかりなのです。當年とつて二十才、外交官志望の白面の美少年、お父様は工學博士のちやきく。

丁度公二さんが始めて入寮したとき、例の中堅會の連中に呼び出されて洋服の検査をされたことがあります。公二さんのカラは規定より少し高かつたので、梁寮のお友達のところへ借りに行きますと、生憎お友達は留守で室には孝さん一人でした。しかし孝さんは公二さんの爲に自身その繊細な制服を貸してくれました。これが二人を結びつけるそもそもの第一歩でした。

が、公二さんの方ではそんな出来事もさういつまで氣にとめてはゐませんでしたが、ある時ふいにお千賀さんが、

「ねえ、兄様、兄様の方に藤尾さんて方ゐらして？ 私とピアノで御一緒の令嬢がその方に大變なお熱なのよ。一高の生徒は可愛い〜つてねえ、さうしてその方からうちの兄様のことも伺つたと有仰つていらしてよ。」

と云ひますので、何の氣なしに公二さんはあゝ居るよ、と答へました。けれども公二さんは不思議に思ひました。今まで別に親しく話合つたこともない藤尾君が自分の噂を誰にしたろ、それは妹のお友達にだ。妹のお友達なら若い娘さんにちがひない。お千賀さんにきくとその令嬢の名は恵美子さんと云ふのでした。

その後公二さんが孝さんに突然、君、恵美子さんと云ふ方御存じですか、と云ひましたら、エ、とどきまぎし乍ら孝さんはその美しい細面を紅くしました。孝さんはどちらかと云へば女性的な細い胸を持つた、まるでギリシヤのスタチューを見るやうな顔かたちをしたおとなしい人でした。

素朴な眞正直なむつつりやで、別に思想上の煩悶や友達と云ふ程の友達もなく、また欲しもせず、ひとりでこつ／＼やつて満足してゐた公二さんも、丁度その頃から變化が來ました。謂はゞ進化的の蟬脱の経路だつたのであります。

さうしたところへ孝さんとの交渉がついた。殊に同じ室に寢起するやうになつてから、二人の友情は急速に接近しました。

四五日前のこと、春によくある物なつかしい宵で甘々しい香に充ちた細霧がグラウンドの邊まで立ちこめ、朧な月は夢の様に低く煙つてゐました。

ひつそりとした自修室の電燈の下に光澤の美しい毬栗頭をうつむけて書見に餘念のなかつた公二さんは、ふと孝さんに呼びかけられて面をあげますと、白い手に額をおさへたまふ孝さんは暫時ためらつてゐましたか、

「僕はね、僕は、非常に頭腦の工合がわるいので、試験はやめやうかと思ひます。」

と突然さう云ひました。

この一言に公二さんは少からず吃驚しました。別に病氣らしくも見え

ないのに、と、規則正しい生活をして来た孝さん、試験などいつでもチャーンと用意の出来てゐる宮の秀才が！と。しかし世馴れない公二さんは何と云つてよいやらわからないので、そのまゝ二人は黙つてしまひました。スチームの鐵管のしうしう音を立てるのばかりがいやに耳立ちました。そのうち同室の人々がどやどや歸つて來ましたので、その話はそれきりになりました。

孝さんはそれから四五日自宅へ歸つて居りました。そうして公二さんの寝苦しがつた春雨の晩、闇の裡に影のやうに二階の寢室に戻つて來ました。やつとうとくしかけた公二さんは半意識の状態で寢返りを打つと、孝さんのちつと自分の方を見つめてる氣配が薄闇の中ながら感じられました。はつと頭をあげるまもなく、

「公さん、君まだ寝ないんですか。」

低い聲で話しかけました。公二さんもよろこんで相手になるつもりでしたが、それに適當な言葉が直ぐには出て来ませんでした。起き直つて蠟燭に火をつけました。と見ると、孝さんの兩眼には涙が光つてまました。

「孝さん！ 僕は貴君の惱みの原因が知りたいんです。そしたら不肖ながら一臂の力を貸す事も出来やうかと思ふ。ねえ、君、僕は常々思つて居るんです。慈愛深い御兩親を持つて立派な家に住まひ、可愛い妹や弟と團欒の生活をしてゆかれる君に煩悶のある筈はありますまい。あればそれは君の我儘とも云ふべきではないでせうか。費澤煩悶、貴族的懊惱!!」

熱心に云ひ、けて公二さんは、言ひ過ぎなと思つてはつとしました。

部屋の人々は熟睡の夢を貪りつゝある最中、大きい西洋蠟燭の光りが牢獄の様な厚い壁や屋根裏にふら／＼と震へてゐる。す。上野の動物園の猛獣の恐ろしい叫び、うなりの聲もいつしかやんで、ヂトと燭涙の煮ゆる音ばかり耳立つ静寂さ。

「公さん、君そりや残酷な言葉のいひ方だ。僕は贅澤な煩悶なんか……
第一煩悶にそんな餘裕のあるのがあるでせうか？。僕は生命がけですよ。それを……だから僕は猶更に一高の寄宿生活そのものに對して反抗の念を増すのです。ねえ、僕等が一高に入つたとき先輩はなんと云つたでせう、ことさらに聲を大にして、向陵の美風は愛の生活それ自身である」と説いた。冷たい利己主義ばかり滔々たる社會の風潮を外に

して、此處柏葉の下蔭には萬石の友情を湛えた樂園があると云ふた。
 僕は多大の希望を抱いて校門をくぐつた。そして更に熱烈なる思ひを
 もつて寄宿生活に臨んだ。然し期待は僕の心を裏切つた。寂寞、荒寥
 残るは單なる悔恨。たい涙あるのみである。弊衣破帽、鐵拳制裁、ス
 トーム！ 世間ではこれを向陵生活の嘉賞すべき表現事實としてう
 け取るかも知れぬ。が、僕は自己を偽ることなしに弊衣破帽を謳歌し
 て立つことは出来ぬ。僕は涙なしに鐵拳制裁を肯定することは出来ぬ。
 あゝ僕は熱い血を以つてストームに心酔することは出来ぬのである。
 豪放な寮風——粗野な風姿——傍若無人——五州一吞、それ等は僕も
 決して嫌ひではなかつた。おどり子の一人として一高健兒獨占の舞臺
 に上ることの出来るのを光榮と感ぜぬ日はありません。あゝそれだの

に僕は……僕の心は不幸にして弱かつたんです。あまりに不羈な單調なこの特種の學生々活には、どうしても満足されず歸する事も同化も出来ないで、その失望や寂寥を遣る爲の慰安を外に求めた。自己の内を求めずして外に求めた。そしてそれは父母弟妹、友人の間に得られずして、異性によつて……。」

公二さんは聞く事毎に意外の感に打たれました。今の今迄戀や女なんていふものについては、少しも考へた事がありませんでしたから。ほんとに當惑してしまひました。そして更に自分が先に云つた言葉を思ひ浮べて見ました。……それはあんまり酷たらしい言葉です。つて……何故だらう。

孝さんは吐息し乍ら黙つて了ひました。上野の方にはけたゝましい一

番汽車の汽笛が聞え初め、雨脚も思ひ出したやうにすこし強くなつて來ました。

九

いよいよ試験の終つた日、學生達は籠から放たれた小鳥の様に四方へ散りました。孝さんと公二さんとはその晩帝劇のファウストを見にゆきました。

北側の車寄から這入つたとき、廊下での出合頭二十歳ばかりの目の醒めるやうに派手やかな令嬢が孝さんに挨拶しました。その瞬間に颯と動いた友人の顔色を見て、公二さんはその令嬢が恵美さんであることを直覺しました。そして公二さんもその令嬢ならば他ながら記憶があります。

それは公二さんの一家がまだ虎の門に住んでゐた時分、界隈の女學館で評判の美人の三人姉妹がありました。末の妹はその頃まだ十三四の蕾の花でしたが、六年後のこの夜公二さんははつきりと孝さんの女がその令嬢である事を知つて、何だか狐につまゝれた様な氣がいたしました。然しまつたく美しくございました。幼な顔が残つてゐると云ふよりは、恰ごその時分この位の年齢だつた姉君たちの顔立と同一型なのです。よく寫眞で見る佛蘭西の女優にあるような束髪をして、胸高に締めた褪紅色の帯が孔雀の精のやうに誇らしく背中に翼をひろげてゐました。黒く薰するやうな濃い紫いろの着物の袖にも、胸にも、見る眼眩ゆい金縷や寶石がちろく光つてゐます。たゞお辭儀だけして、そしてつれの後を追ふやうにいそいで小走りに向ふへ行つてしまひましたが、周圍に居合せ

た程の群集は誰も彼もが、みな云ひ合せたやうに見返へたり見送つたりしました。それほど人目に立つ容姿でした。

孝さんは公二さんと並んで自分達の座席に着きましたが、妙にそれはそはとして心がそこにないらしく、そのくせ沈み込んで了つて顔を得上げませんでした。話しかけてもとんちんかんな返辭ばかりしました。公二さんは友をいたはる様な氣持でそつとしておくうちに、いつか舞臺への鼻味に眼も心も吸ひよせられてしまひました。ファウスト博士のモノローグは大失敗でしたけれども、眞紅なマントに鳥の羽を挿した帽子を冠り長い劍をぶら下げてギタアを抱えたメフィストが登場すると、満場の學生達は痛快がつて手を拍つてよろこびました。まだうら若い女優が初役のグレートヘン、初心なドイツむすめのブロンド姿は可憐でした。

「むかしツールに王ありき……」の唄、その後東都の學生間を風靡しました。

十一時過ぎ芝居が閉場てから公二さんは孝さんを誘つて、銀座まで柳並木の影をそゝろ歩きました。やゝ興奮した頬をしつとりと物なつかしい夜氣にしみと浸し乍ら。そうして先夜きゝさしたまゝになつてゐる惠美子さんとの關係を、もつと委しく訊きたゞして見たいと思ひましたけれども、何だか變な氣がして切り出せませんでした。二人は資生堂でアイスクリームを食べただけで、その晩は平凡に別れました。

10

夏になる。學生達は思ひ／＼にこの長い／＼夏期休暇を如何に暮すべ

きかについて、樂し計畫を立てました。ある者は故山に、或群は鏡ヶ浦の水泳部に。あるは日本アルプスに、滿鮮旅行に。公二さんは待ちかねて麴町の邸に歸りました。淡泊な公二さんのその頃はもう孝さん對惠美子さんの問題などは疾に念頭から去つてゐました。

すると七月に入つてから、孝さんから來遊をうながす葉書が來ました。孝さんは鎌倉の叔父様の家へ行つてゐるのでした。いろいろ貴兄に話したいこともあるから是非!! とのことなので公二さんは急になつかしくなり、二三日遊んで來やうと思つて或日新橋から横須賀行の汽車に搭じました。

孝さんの叔父様の家は海岸通りにありました。午後二時過ぎの太陽の直射は目も眩むばかりなので、公二さんは頬に傳はる汗を拭き、妙

に優りのわるい思ひをし乍ら、玄關の電鈴の打點を押しました。

生憎孝さんは不在でしたけれども、まだうら若い束髪の夫人が氣輕に迎へてくれました。

『矢野さん、孝ちやんは口癖のやうに矢野の奴何故來ないのだらう、何故來ないのだらう、もう明日からは迎へに行つてやらない〜と云ひ乍ら、それでも矢張り心配になると見えて、毎日〜停車場まで行つてゐましたのよ。』

初對面からかう云つた調子、公二さんは非常にうれしうございました。そしてこの叔母様がすぐと好きになつてしまひました。袴腰にした手拭で、丁嚙に足の砂を拂つてから上りました。

滑るやうな廊下傳ひに通されたのは北向きの八疊で、廣いお庭には丈

一丈ばかりの松樹がびつしり生え續いてゐました。その梢を動かして颯と涼しい風が渡つて來ました。固くなつて坐りながらも公二さんは、ほつと生きかへつた氣がしました。

—

公二さんが鎌倉へ來てから一週間は夢の様で過つてしまひました。東京は燃えるやうな暑さでした。停車場へは列車の到着毎に夥しい避暑客が吐き出され、海濱でも一日毎に新しい海水浴帽や美しいバラソルの増えるのが目立ちました。ひつそりとしてゐた別荘町は花やいだ人達のざんざめきによつて、夜の燈火もおそくまで輝きました。

若い人達の生活は暢氣でした。水泳にも疲れ、ランプにも飽き、所在

なさにお八つまでは縁側の藤椅子か松林の中のハンモックで晝寝でもするほかは、叔母様がお留守になるとよく手文庫からいろんなお寫眞を探し／＼ては見ました。寫眞には女學館風の美人が多く撮つてゐました。

この叔母様は最初公二さんの何となく見たやうなと思つたのも道理、惠美子さんのお姉様なのでありました。艶麗な惠美子さんにはあまり似てゐませんが、それよりも品は優つてやつぱり艶に美しい方でした。御主人は遠洋航海中の長いお留守!!

一ヶ月待つほどの宵や夕食後は端近う團欒して、一連り雑談に時を移す。それがまた楽しい日課の一つでした。その時は叔母様もお仲間入をなさいます、岐阜提燈の灯影また／＼く下にルイザ卷の襟元白う……。

紫淡くたそがるゝ

武香ヶ陵に我立ちて

下界遙に眺むれば

さても汚れし……

孝さんはいつも縁側の柱に身を凭せて歌ひました、夢見る様な眸をして……。その清しい聲に誘はれて、公二さんもつい調子を合せるのでした。

「矢野さんや孝ちゃんの様な美男子がこんな美しい聲で寮歌を歌ふから、近頃の女學生が騒いで困るんだわねえ。」

と叔母様は笑ひながらゆるやかな團扇の風を分ちました。

「然し一高の何處が好いんでせう。汚い洋服を着て……お聲の處がピカ／＼光つてるぢやないの。私先達ね、三月の記念祭に行つて見たんぞ。」

すよ。だけどねえ、あの萬年床を見せられてから、食堂へ行つたけど胸がわるくて食べられませんでしたよ。」

「貴女も記念祭にいらしたんですか。アンチ一高ニズムの人が記念祭に行くなんて随分矛盾ですね。」

「だつて恵美ちゃんかね、是非孝ちゃんの爲に行くつてきかないんですもの。仕方がないわ。」

「だがそれにしても近頃の女學生は別として、貴女時代の女學生は何處を崇拜したものですか。慶應？ 早稻田？ 赤門？」

「崇拜ですつて。よして頂戴よ、昔の女學生はそんな言葉は用ゐませんでしたよ。だけど、さうね、學習院が一番好きでしたわ。」

「へえ！ あんな頭腦のわるい連中が好きなんですかね。それにしても

あんまり……。」

「公さん、叔母なんかには鋭敏なる頭の良い人間と、馬鹿な人間との區別がつかないんだよ。たゞ學習院が好きといふのはね……アリストラチックだと云ふのさ。美は即ち生なりかね。女でも男のいゝのがすきだと見える。」

孝さんは白飛白の兩膝を抱き乍ら人を馬鹿にした様な調子で笑ひ出しました。叔母様は案外眞面目で、

「まあさうね、何となく上品なのが好きだったのね。その時分は貴君方の學校なんか全く存在さへ認められなかつたのですもの。今の若い女學生は流石に眼が高うござんすね、實際、最も頭のいゝ一高生を擇ぶなんて……。」

「それは現代の若い女が少々覺醒して來たのです。少くとも理智の友達として生涯の伴侶とするに足る能力を有する人を求めやうとする傾向が具體化されて、所謂一高崇拜となつたのでせう。品性の點からしても頭によさ具合から云つても、一高はたしかに學生中の粹を極めたものです。成る程、美は即ち生でせう、然し形式に現はれた人工的な、精神のない美が何になる。汚いと見えるもの、内に見出されたる美こそ眞善美である、命である。一高氣質を崇拜するは、命を愛づる若き人々の切なる願ひである。」

公二さんはこんな場合にも口角泡を飛ばして、一高主義を鼓吹しました。叔母様は堪えかねて失笑しました。

「何ですnee、それは夢見る様な事を云つてる若い乙女達が、單に一高

生を空想化した心の状態を云ふのですよ。貴君がた、まるで小兒ぢや

アありませんか、崇拜も何もあつたものぢやありませんよ。』

「おい公さん、叔母さんに會つちや辯論部の勇將形なしたねえ。まるで小兒だつて……は、は、は、小兒とはうまく云ひましたねえ、叔母さん。」

「それぢや今度私がお訊ねしますよ。貴君がた何處が一番好き!? 虎の門? お茶の水? 學習院女學部?。」

「さあー さうですね、僕は……一高の生徒としてはですね、お茶の水です。彼女等は多く一高黨だからです。が、僕一個人としては……。」

「叔母さん、公さんはね、さうぢやないんですよ。それはね……。」

「孝ちゃん、出鱈目云ふなよ。』

公二さんは眞氣になつて叱りつけました。

「あら、何か面白い事がありさうね。孝ちゃんなあに？」

「孝ちゃん、海岸へ行かう。」

と公二さんはその話題から離れる爲めに縁から暗い庭へ飛び下りました。

「あら公二さん、逃げるのは卑怯だわ。理由を話して頂戴よ、夫婦饅頭御馳走しますよ。」

叔母様は艶やかな聲で笑ひ乍ら追ひかけるやうに云ひましたけれど、公二さんはもうくるりと彼方向いて口笛で寮歌の節をやつてゐました。

一一一

九月に入るとみんなは云ひ合せたやうに東京へ歸つて來ました。黒く

なつて元氣に充ちて眼と齒ばかりを各々に光らせて。

その中で孝さんの顔色が際立つてすぐれないのを見て、何か大きな事件がこの夏中にあつた事を公二さんは察しました。さうして氣になつて堪らなくなつたので、終に或夕上野の森へ散歩に誘ひ出しました。木の蔭にまたベンチの上に秋浅い夕を遊ぶ三々伍々の群を避て、二人は天王寺の樹立を奥深く分入りましたが、公二さんはふと歩をゆるめました。そして顔はあげずにやゝ嚴然と、

『孝さん、僕は君の身の上に係つてゐる、そして君を苦しめてゐるすべての事情をきかなければならない。君はそれを僕に話さなければなりません。お互に友人の義務だと思ひます。』

孝さんは物におびえた小鳥の様に、さも怨めしげに公二さんの横顔を

打まもつてゐましたが、

「公さん！」

と涙の爲に亂れた聲を出して、

「僕は話します。」

とそれから催眠術にでもかゝつた人のやうに、すらく語り出しました。

「公さん。」

いつか帝劇で逢つた女、あれは僕の義叔母の妹です。貴君もそれを知つてゐませう、そして彼女と僕との間柄、それも貴君は感づいたでせう。

首尾よく一高の入學試験の關門が通過したよろこびで、有頂點になつ

てゐた去年の夏です。僕は叔父の結婚後始めてその新家庭へ遊びにゆきました。その日は朝から出鱈目に歩いたので、鎌倉へ着いたときはめちや／＼に疲れてゐました。疲れた晩は却つて神経が昂まる事がありませんが、その晩が恰度それでした。

僕は眠らうとつとめたがなか／＼寝つかれませんでした。その内に僕はすぐ次の間に誰か寝てる事に気がつきました。向ふでも醒めたと見えて「孝さん」と話しかけたんです。それが惠美ちやんでした。双方の蚊張越しですから顔は見えませんでした。それでも萌黄の色の中に白い俤のはのめくやうに感じられました。僕はそれまで若い女に單獨で物を云ひかけられたことなかなかつたので面食つてしまひました。何と返事していゝかも知りませんでした。

孝さん何故だまつてるの、明日ね、神武寺に行かないこと。私ねまだ行かないの。連つてつて頂戴な、と人なつつこく云ふのです。僕は女の云ひ出した事は聞かなければわるいやうに思つて約束しました。そうして頭から布團を冠つて了ひました。

翌朝はまだ朝霧の晴れぬ中を神武寺に上りました。僕は物におそはれた様にびく／＼ものでした。だつて若い女と手をつないで歩いた事なにかないんですから……。

僕達二人が神武寺の裏山に腰かけて何を話たかは、今更云ふ迄もない事です。僕はこの時から初戀に落ちたのです。

僕は初めて戀の強い力を感じました。僕は惠美ちゃんを忘れやうとして忘れる事が出来なかつた——たゞ無暗に會ひたかつたものです。

そのうちに僕は寄宿寮に入る。秋も過ぎて冬になる頃から、胸の内に不安が萌し初めた。こんなこととしてゐて、彼女はいつか自分の手から逃れやしないであらうか、かう考へると寂しくて仕方がない。涙がやたらに出る。

僕は神経衰弱になりました。父母はかよい僕の身を心配して、また鎌倉へやつてくれました。その頃の別荘町は淋しいものです、語る友を持たず遊ぶ相手なく、思ひはいつか惠美ちゃんの上に及びます。一方學校のことも氣になるし、静心なく亂れ勝な胸を抱いては泣きました。さまじくの懊惱、煩悶の極は自分の苦しみを救ふものはむしろ死であると思ひました。自殺だと思ひました。僕はある月のいゝ晩、惠美ちゃんに遺書を殘して死なうとしました。が、恐ろしかったのです。

矢張り決行し得なかつたのです。そこで僕は東京へ歸つて來ました。

そして貴兄の寢室へ行つて貴兄にすべてを打明けて話さうと思つたんです。しかし怯懦な僕にはそれも出来なかつたのです。……」

「孝ちゃん、そして現在の状態は？」

と公二さんはすつかり云ひ切りました。

「現在の状態！ 彼女は僕を愛してゐるのです。僕は確かに知つてゐます。今年貴兄が歸られてから、四五日過つて恵美子が來ました。

僕は彼女をつれて鶴沼へ出ました。ちり／＼照りつける太陽を赤い洋傘の影に避けた兩人は、小松原の茂みの中に腰を下しました。白い白い砂山のはては藍青に輝く海である、後に迫るは片瀬川である。可憐な色彩の濱晝顔が夢見る様に咲いてゐる。聞えるものは浪の音、小鳥

の聲、さや／＼と青薄を渡る風の氣配ばかり。美しい花も青い水も紫の遠山も、たい兩人の爲にのみ造られたやうに思はれました。僕は幸福でたまらなかつた。

が、折々額の汗を拭いたり前髪のほつれ毛をかき上げたりするたび、惠美子の手頭には燦たる腕環の光輝や、縮緬の着物の袖が艶めかしく纏れたりしました。彼女は平生さういふ華美さと贅澤に馴れ切つてゐます。僕はまたお供のやうな一學生です。だからついよしない不安や疑惑の念が大きくなるのです。で、僕はこの機を利用して、斷然彼女の胸の裡を訊いて見たのです。

惠美ちやん、あなたは眞實に僕を愛してくれますか。物なれない僕の言葉は震へてゐました。惠美子は突然僕を抱擁しました。そうして何

「事も云はず彼女の綾絹の様な唇をもつて、僕の顔を蔽ひました。」

「それでは君は今平和な日を送つてゐるんですか。」

「それが出来ればこんなにも苦まなくともすむのです……。」

「それはまた何故？」

「邪魔物が入つてゐるのです。惠美子の父なる人がうすく知つてゐるらしいのです。僕が遊びにゆくと早く歸れがしに申します、兩人の遇ふ瀬は實に果敢ないものです。會ひたい……と思ひ乍ら會へぬのでそれが辛いのです。」

「贅澤な煩悶！ と僕の云ふた處はこゝの事です、孝ちゃん。君は惠美子さんが自分を愛してると充分知つてゐる。だのに煩悶を續ける。何故だらう？ どうすれば可んです。」

公二さんは叱るやうに云ひましたけれど、孝さんはそれつきり頑な、無言のまゝに歩みを運んで、歡月橋の石の勾欄に身を靠せたとき、秋の氣が冷やも泌みて、月夜に白い池の面では魚がぼちやんと跳ました。

— 三 —

日に／＼向陵の秋もふけて、朝毎に小使の老爺の掃きあつめた落葉の山からむら／＼と濃い鉛色の煙が立ちのぼる。そうしてまた／＼館詰や蠟勉が盛になつて、萬象が沈黙の中に獨り靜に歲月の流を刻みゆく、あの高い時計臺の音ばかり胸に響いて一際物思はしい初冬の頃から、公二さんはもう以前の樂天家の公二さんではありませんでした。

實際どんな人でも青年時代には或時期を割して、よく空しさや寂しさを

に裏はれるものです。毎日／＼おつとめの様に學校へ出て、先生の有難
 ることを筆記することに寂莫と悲哀を感じます。はりつめた勇氣は失せ
 て倦怠と疲勞の爲に世の中が厭になるやうなことがあります。せめて生
 きてゐると云ふ強烈な意識が欲しくなります。いつも／＼咽ぶほどの刺
 戟を食つて、生命を緊張させたいとあせるやうになります。こんな時み
 んな戀に走つたり、藝術にのがれたりするのであります。

お父さまと親交のある吉野博士の柏木のお宅へは、公二さんはまだ中
 學時代にはよくお使いにやられてそのお玄關に立つたものでした。一高
 の寄宿生活に入るやうになつてからとんと御無沙汰に打過ぎておました
 が、ふとした用事をもたらしして先日何心なく訪問したのであります。
 生憎博士は旅行中で御不在、書生好きな愛想のいゝ夫人が笑顔で出迎へ

られました。

公二さんは久し振で令嬢を見ました。一年半の経過がああ、あの仇氣なかつた少女を女にしました。肉附の豊かな皮膚の艶々しい瞳のぱつちりと、見るからにまるで蛇の眼の様な慧さ鋭さと、鳩のまなこの様な優さを兼そなへて人の心を惹きつけました。公二さんの胸は異様に苦くなつて來ました。頸垂れがちな白い細い頸のあたりや、その輪廓の正しい美しい横顔をそつとぬすみ見ながら。

その内にお午になつて、久しぶりに一つ食卓をかこんで御馳走になりましたけれど、禮儀と云ふものが兩人の間を冷たく隔てました。いろいろ昔の失策談なども出て笑ひましたけれど、公二さんと令嬢とは直接には一言も口を利き合ひませんでした。その日吉野家を辭し去つて後、公

二さんの心は柏木に残つて、身體は魂のぬけがらでした。令嬢は公二さんのあらゆる感覺を捉へてしまつたのであります。

戀の力ほど不思議なものはございません。涼子さんを見て以來の公二さんは、今までの思想や肯定が根底からぐらつきはじめたのを知りました。戀が心の眼をさませた。人生の自覺を促した。そうしてどんなに悶えさせましたらう。到頭堪えられなくなつて、孝さんに救ひを求めました。

思ひ切つた公二さんの告白に孝さんは一種の苦惱と羞恥と喜悅の情を覺えました。さうした経験についてはすでに一日の長なのです。實は部分的に多分そんなことであらうと察しては居りましたが、愈々それと打明けられて見ると、今更の様に何とも云へない氣分になりました。

そして自分も何となく荷が少し軽くなつたやうな気がいたしました。

一體感情の非常に激しやすい性質でありながら又非常に臆病で（但し反省から來るのではない、本能的の）舊い道徳とか世間とか云ふものには全然反抗してゐるやうな口吻を洩しながら、どうしてトラディションの致すところ、その大きな影響をうけつゝある現代の若人——少なくとも眞面目にして善良なる——の代表者の様なこの青年たちであります。孝さんだとして今までは自分の戀愛事件についても、勉めて冷靜の風を装つてゐました。けれどももうそんな虚榮の假面を冠る必要もなくなりました。兩人は憚らず熱烈な戀愛觀などを論じて、僅に悶々を慰め合ひました。自己は絶對である。他人と自己との關係は相對である。われ等は何等他人に依る事なしに幸福に生きてゆかれる、また行かればならぬ。從つ

て神をも信ずることなしに！ かうした信念をよく孝さんに浴びせかけ
 た公二さんが今はどうでせう。この世は己れ一人の世ではない、愛の絆
 によつて自他の結合した所である「戀」こそ自他の合致であるもしも人
 間が狭い自己の内部にのみ閉ぢこもつてゐたならば、その生活はいかば
 かり乾燥無味なものだらう。生は即ち愛なり、これが人生のモットーで
 ある。自分等は生命のない虚飾を離れて、眞の自己、眞の情に觸れた生
 活をせねばならぬ。「戀」の爲ならわれらは死をも恐れない。死の中にも
 大いなる樂園を見出し得る。この意味に於ける死は生より勝ると思ふ。
 梅川よ忠兵衛よ、小春よ治兵衛よ、お染よ久松よ、おれはお前達が羨し
 い。平凡なる世の風潮に逆らつて、自己の主張に死んだんだもの。お前
 達は幸福だ。

かく千々に亂れ勝な心抱けば理解のない人々の顔は見るのも臆劫に感
せられ、公二さんはあてどもなく彷彿よひ出て終日寮に歸らないこともあ
りました。毎夜々ふけて火の氣もない暗黒の冷たい寢床に身を横たへて
は、いつそ『生れざりしならば』となげかれました。『知らざりしならば』
『見ざりしならば』と！

でも上部だけはどこまでもあの特有の校風にきたひ上げられた、學術
優等品行方正の模範學生でありました。形式的には一高ニズムによく服
従して居りましたから、孝さんよりほかに誰もそんなことを知るものは
ありませんでした。

再び春はめぐり来て天王寺の塔に薄紫の霞たなびき、上野の森に爛
 漫たる白雲湧いて、本館裏の草原には地から二三尺も盛り上つたやうな
 いろうばあが、無数の小さい白花をゆらめかせる季節になりました。

その日戸塚臺上一高の野球軍は一戦地にまみれてまた立たず、應援隊
 の一員たる公二さんは白旗を巻いて、つまらなくとぼくと麴町の家へ
 歸りました。泣き顔をして。

が、圖らずも吉野家の令嬢が、夫人につれられてお客に來て居られる
 のを發見して、公二さんは天地の灰色が一瞬に掃き去られたのを感じま
 した。夫人は下の奥座敷でお母さまと用談してゐらつしやる。お嬢さん
 方は二階の客間でわにくと云ふ笑聲でした。

お千賀さんとお泉ちゃんのところへも恰ど双葉のお麗ちゃんや女學部

の岡野さん姉妹が来合せてみましたので、みんな一緒になつてトランプの遊びに餘念ない最中なのでした。嚴格な學者の家庭に育つた涼子さんは、トランプの採り方すら知りませんでしたから、公二さんは當然涼子さんの爲に指南役でなければなりませんでした。

公二さんは偶然極く自然に涼子さんの傍に座ることの出来た機會をうれしいことに思ひ込み乍らも、うら悲しくもありました。あまり大勢の若い娘さん達がその場に居るので、何だか氣がとがめて戀しい令嬢の顔をよく見ることさへ出来ませんでした。涼子さんも止むを得ない用事の外は一言も申しませんでした。あれこれと札を指さしうなづき合ふはづみには、絹絲のやうに滑らかな前髪が公二さんの頬を掠めることもありました。赧黒い無骨な掌と眞白な指先と觸れ合ふこともしばし

ばありました。

夕方お二人の歸られる時公二さんは外のお嬢さん達をすて、四谷見附まで送つてゆきました。重たい兵隊靴をひきすりながら、董色のリボンも薄茶色に變色した、澁を塗つたやうな一高の麥藁帽子阿彌陀に冠つて。

道すがら梢に残んの花がひらくくと、公二さんの頭上に散りかゝりました。それが可笑しいと云つて涼子さんは、袖を口にして笑ひました。公二さんは益々生眞面目な顔をして俯き勝に先に立つて居りました。

しつとりと立ちこめた夕靄が膚に心地よく、見附の葉櫻のかげにはもう電燈が夢のやうに輝き初めてゐました。双葉女學校のチャベルからは夕の御祈禱の鐘の音と、アヴェエーマリア……ヅイルジンサンタマリア……

…の頌歌の聲が聞えて來ます。若い二人の胸にはそれがどんな感激をもつて響いたでせう。涼子さんはお母様を離れて、公二さんと並んで歩いて居りました。

停車場へ着いて夫人が切符を買ひに走られた後、茫乎佇つてゐた公二さんはふと垂れた手先に柔かく觸れられて、吃驚我に返りますと、

「あたし一高大好き！でも大學に入るとすぐ變るからいやですわ。」
涼子さんの囁きは少さかつたけれども、公二さんは世界中が音響に化しかと思はれました。突嗟の間に息がたまつて返辭も出ませんでした。

價值轉倒——懷疑——虛無思想——と云ひましても、それは決して

哲學者のいふようなえらいもんでもなく、ロシア邊の青年志士が懷抱くやうな大きいものでもありません。只自分一個の肉體を支配し、思想を統一する上について、かういふ厭世的な色彩が著しく、公二さんの頭腦に食ひ込んでまゐりました。

身神過勞も原因してゐるのでせう。惱ましい五月の暗緑と灰白と、黄色い感じの中に重い頭を抱えて悶えつゝ、それでも學校へは出てゐましたが、課業も人も只わづらはしく、厭はしくてなりません。元氣がなく、熱氣が衰へて、考へること思ふことがすべて部分的で消極的で、絶えず眉をよせる癖をつくつてしまひました。

その年の夏期休暇中のことであります。公二さんは孝さんの例のいき

さつが如何に發展しつゝあるかも知きたく、その足は幾度四谷見附の濠端から江戸川べりに向いたでせう。然しいつも會はずに歸つて来てしまひました。人の事より身に負ひあまる戀の重荷に、可哀想に公二さんの丸かつた頬は瘦せました。

終に堪えかねて旅行に出ました。お母さまや妹君達はいつになくしきりと止めました。面を犯してまで。虫がしらせたのでせう。けれども、腹立ちまぎれに強いて振り拂つて、しかも雨の降る晩、トランクを一個ずつてマントに包まつた身を、上野停車場の倚架の一隅においた時には流石に淋しうございました。

夏とは云ひ條その年は天候がひどく不順だったのでめつきり底冷がして、公二さんの乗つた列車は奥羽線青森直通でした。客室内はがらん

とする程すいてゐました。公二さんの外には八高の生徒が二人に高工の人が一人と、早稻田の制帽が四五人ゐるばかり。旅と云へばたいさへ物寂しきに、殊更雨の夜行列車はわびしい。凄い。

聞き慣れてゐる大宮や栗橋などを通り過ぎると、鐵路は那須野の原にさしかゐる。風雨は益々おめきたけぶ。その偉大なる暗黒と鼻つき合して公二さんは、窓に近く首を垂れてゐました。悔恨の涙がくつくと心の底から湧いて來るのです。東京にゐればよかつた。來なければよかつたと。

やるせない悲しみにそゝられて、火のつくやうに出かけては來てしまつたものゝ、かうして都を離れてみれば、また更に新しい寂莫と悲痛を生む。公二さんのロマンチックな悲哀は今や頂點に達してゐるのでし

た。

さめがちな旅の夢は山形あたりで明けました。四邊がすべて灰色で、人の顔、野の色、山の姿、川の流れ、沈滞した空氣がどことなく漂つてゐる。疲れはてた公二さんの神経はもう何事も見る事を欲しませんでした。何事も聞く事を求めませんでした。殆んど睡り通して青森まで行きました。

一六

青森から乗ついだ連絡船はあまり大きくはありませんでした。三等船室はお極りの船底にあつて、それにひどく汚くるしいので到底かう云ふ生活に慣れない者には、此室で寝るなんと云ふのは思ひもつかない事だ

した。子供は泣く、爺父共は田舎の女を相手にお酒を飲んで、歌ふ、笑ふ、怒鳴る。まるでゴルキーの『どん底』を目のあたりに見るやう。

逃れ出でた公二さんは冷い海風に吹かれながら、深夜いつまでも甲板の腰掛にゐました。寒くつてたまらないので、マント面深に引き纏ふたまま……。

月はすでに波間に没し去つて、眼界は唯みる爛々たる星影と、舷に碎ける眞白な波浪の水沫ばかり。公二さんは淋しさに堪えやらず平生なら大嫌ひのエンヂンの音響のする方へ思はず近寄つて見ますと、火夫が眞紅な火光を浴びて、赤鬼の様な顔をして石炭を焚いてゐます。活動はたとへ暫時にしる寂寥を消す。公二さんは甲板の上を大腿にありこちと歩きはじめました。

一七

公二さんは函館に上陸後すぐと夜半の急行列車に塔じました。こゝから西方七里あまりなるトラピストの修道院を見ることが、最も公二さんの切望してゐた處で、また今度の旅行の眼目の大半はこれにあると云つていゝ程なのですが、北海道内地の旅を早く切り上げて、歸途にゆつくり訪問しやうとさめしました。そして神寂びた修道院の建築、浮世離れた信徒の生涯、牛馬を相手の山のあけくれ、さう云つたものを想像して大きい期待と樂みで胸が充満になりました。

北國の夜は短うございます。羊蹄山の麓で見事に明け放れて、目なれぬ草木や花が珍しい。北海道の景色は東北地方と同じく荒れ、灰色でし

たけれども、然し柔かさが加はつてゐます。むしろその柔かさが七分しめてゐる。東北の天地を老いた女の髪の毛だとすれば、此地の自然は乙女の黒髪の美しさと香りがある、潤みがある。

小樽や札幌は汽車の窓から失敬して、志す石狩の平原へ着いたのはその日の午後でありました。其地の農場には叔父様も住んでゐましたし、また公二さんの父母君たちの第二の故郷なのでした。

げに公二さんに取つては、非常に感慨の深い土地なのであります。公二さんは幼い時から父母に離れて、田舎の祖父母君の膝下で育てられました。他家には父母があるのに何故家にはないだらう、と或冬の夜の寝物語りに祖母上に聞きますと、北海道へ行つたと有仰る。何に北海道へ行つたのと反問すると、子が可愛い、親が可愛いから金を儲けに、と祖

母上は涙聲で答へられましたけれど、公二さんにはその譯がわかりませんでした。そしてつれない御両親を怨んだこともありました。

けれどだん／＼大きくなるにつれて、祖父母の愛にあきたらずなりました。父を戀ひ母を慕ふ念の益々深まつてゆくのを知りました。阿波の鳴戸のお鶴の身の上などが、何だか自分の境遇そつくりの様に思はれて悲しくて／＼たまりませんでした。ですから少々な順禮の子が笈摺かけて鉦を鳴らし乍ら、とぼ／＼と可憐な聲に御詠歌を歌つて來るのなど見ると自然と涙が出て來て、いつでも大切に貯めてゐたお小使をみんなやつてしまつたりしたものでした。

そのうちにお母様は今のお泉ちゃんを産む爲に、遙々故郷に歸省されました。公二さんは流石に子供心の恥しさがうれしさよりも先に立つて

甘へることもようせなんだ間に新しい妹に母上を専有されて了つたやうな位置にありましたが、この親子の同棲も長い時日ではありませんでした。間もなくまたしても別れねばならぬ日が來ました。今までならば兎も角も、一度お母様を見てからは、公二さんはお母様と離れることは厭でした。恐ろしかつた、悲しかつた、どうあつても厭でした。でもその日とは知りませんでした。いつもより早く學校が退けたので、いそいそと家へ歸りました。するとお母様もお泉ちゃんももう居ませんでした。その方がお母様をも公二さんをも惱ませないだらうとの心づかひから一同のすゝめに、餘儀なくお母様は公二さんを見ずに立たれたのでした。公二さんは地團太踏んで泣きました。泣いて泣いて根氣がつきて物置小屋の藁束の上で、泣寝入に寝入つてしまひました。眼のさめた時公二さ

んの悲哀は涙によつて拭ひ去られて、けろりとして母家に歸りました。
探しあぐねた爺やの背に負はれて。

多分あきらめたのでせう。それからは北海道の父母のことについては
決して何にも云はないやうになつたさうでありました。

それは八歳の春でした、だん／＼物心のつくにつれて公二さんは、
埃及から追はれたモーゼがカナンの地を求めた様に、エルサレムのユダ
ヤ人が救世主の出現を待つた様に、常に石狩の農場にあこがれ、父母の
懐を思ふて泣きました。

然し現在祖父母の手に愛育されて居ながらこんなに父母を慕ふのは、
祖父母に不足がある様でよくない、と云ふ分別まで出るやうになりました
でも、一日として忘れることは出来ませんでした。最初からでは十餘年

の長い年月、さうしてその間にたつた二度だけしか會ふことが出来ませ
 んでした。思へば果敢ない親子の縁!!

追憶はデリシアスな気分と同時に痛ましい悲しさを與へます。見渡す
 限りの平野、その涯にふうはりと山脈のやうに浮ぶ白雲。そうして今眞
 盛りな白と紅のクローバー。數日前の大雨に赫く崩れた崖のふちではヨ
 シキリがしきりと鳴く。

いまかうして石狩河畔に立つた公二さんは、曾てあれほどまでに戀ひ
 慕つた幼年時代の憧憬の心をもつて、この田野この山河に接することの
 出来ないのが悲しうございました。否、それどころかすべての事物に興
 味を失つて、父母の奮闘に對する感謝の念を呼び起すことも得せない。
 どうすれば新しい歡びと元氣を回復させることが出来るだらうか。自分

は實に弱しつまらない人間なのだ。

かう思ふとき、公二さんはただやるせない涙を草に落すよりほか、逃れる道を知りませんでした。

一八

公二さんが此方へ來てからと云ふもの、實に天候が不順で困りました。

一村雨の過ぎ行きて、行察に影をひたす青空、蟬が彼方此方のエルムの茂みに鳴き出す。まあ可あんなばいだと思ふのも束の間、またしても雪國特有の淡黒色の雲が出初めたと見るく、山と云ふ山は麓から頂きまで深い霧がこめる。今まで青毛氈の上に金色の線と見えた太陽の光りも消える。あとは青一色に染め返されて何時となく冷くなる。ぱら〜と激

しい驟雨の襲來に、生々しい青葉が枝ごと叩き落されて散亂する。

火鉢を抱え乍ら公二さんは叔父様からいろんな話をききました。これから季節がすゝむと忙しい身にも朝夕の物のあはれがしみ／＼泌みて、増毛嵐に紅葉が散る。アポロの戦車が西の方へ走つて紫色に染まつた山々の頂きには黄金の雲が焼ける。百姓達は收穫に餘念がない。鎌を手にし腰をのばして残り惜しげに夕陽を見送り、この分では大丈夫だと明日の快晴を歡ぶ。が、あはただしく秋も更け、日の光りが何となく薄くなつて渡り鳥の群れつゝ飛ぶ初冬の頃は、人の心も灰色に沈む。冷たい風が糸の様な透間からでもスー／＼やつて来る。木々もすつかり梢を振ひ落して、满目蕭條、あたりが死んだやうな寂寞に入る。

と、空は低く地に垂れて、凍つた雪路に櫛の鈴と馬の蹄の音とが入れ

交つて響くやうになる。何もかも積雪に埋もれてしまつて、半年にも渡る飽き／＼するやうな冬籠りは長いけれども、やがて生温い春風の音づれとともに忽ち雪は消え、生ある植物は一時に萌え出し、石狩の平原に漲り渡る春光は到底内地で見られるやうなものではない。野にも山にも花と香氣と嫩葉が入り亂れ、梅も櫻も梨も林檎も爛熳と妍を競つて咲き盛る。牧場には家畜の平和な鳴聲、空にはすが／＼しい小禽のは、蝶蜂、蛇の羽音、豊かな天の恵み、よろこばしい地上の營み。純眞な土の香、緑の野面に立ちこむる重厚な暮春の空氣、花やかで艶めかしい夏的情調、目の眩るやうにせはしい、しかしながら希望に充ちた清新な活力の溢れて居る生活。叔父様は眉をあげて愉快さうに北海道の大自然と、開墾や農場の事業の眞に男らしいことを説きました。

じ得えませんかつた。優やさしいこまやかな異性いせいの心こころづくしでなければ……否いな涼子りょうこさんのあの眸まぶたの動き方かたと紅唇くわびるの光輝かざやうでなければ……。

一九

「幾山河いくまがは越えさりゆかば寂さびしさの絶たえなん國くにぞ今日けふも旅行たびゆく。」

「今日けふも亦また心の鐘かねをうちならしくつゝあこがれて行く。」

北國ほくごくの夏なつの太陽たいやうは頭あたまから直射ちよくしやします。ミステイな空氣くうきはそよとも動きうごきません。植民地しよくみんちの汽車きしやには一等室とうしつと云いふものがなく、三等乗客とうじようきやくが主おもな華客くわかくですから、みんな草鞋わらじを履はいたお百姓しやうでどの車室しやしつもどの車室しやしつも占領せんりやうされてゐますし、すつばくさい汗あせのにはひと咽むせつばい馬糞ばふんの臭氣しうきとが一

緒にいきれ返つて、何とも云へぬ氣持になります。

鐵路は石狩川の右岸を廻つて神居古譚に出ました。公二さんは人から此地の勝れた景色について種々きかされて居りましたが、思つたほど山も高からず谿の淺いには少なからず失望しました。ただ何となく異郷的氣分に満たされて、處々にアイヌの丸木舟がつかないであつたり、山ウドの白い花の咲てるのなどは内地で見られぬ景物でありました。

この近邊の近文にはアイヌの部落があります、その草屋根を森の間から眺めて過ぎました。

110

その夜は旭川に一泊して翌朝の一番列車で十勝に向ひました。

汽車は全く上川原野にサヨナラをして山から山へ迷ひ入ります、蛇の様にうねりながら。狩勝のステーションを出てからは山は益々深くなつて、大低七千尺以上の連山を蛇々とムカデの如く這ひ上る。車窓から後を見るとLの字形になつたりS字形を畫いたりして悠然とやつて來るのが、我が乗る汽車ながら可笑しい位でした。針葉樹が日光を遮斷する深間のあたりには残雪があり、赤い姫百合も咲き交つてゐます。

登りつめた處が頂上で、十勝の高原は目の前に展開されました。薄霞を透して青い幕が波うつて双眼鏡に映る、それが太平洋の波濤湧くところ。丘は丘を追ひ緑の曠野相つらなりて赫黒い山嶽に集る。

下りた處は海岸に沿ふた平原であります。千紫萬紅名なし草が今を盛りと亂れ咲き、アカシア、ポプラ、エルムの茂みがくれに粗末な棚が結

ばれて、牛馬の放たれた牧場が見えます。

公二さんはこゝに來て初めて自分の空想の實現された様な氣持になれました。自分の對象をこの高原に見出すことが出來たやうな氣がいたしました。

けれども劍路方面は冷たい濃霧の深い所でした。空氣の乾燥した土地に住みなれた人間にはとても長く辛抱することが出來ません。公二さんは直き歸りの途につきました。

一一一

公二さんは絶す苛々と飛び歩いて居ました。長くひとつとところに靜止してはゐられないのです。今度は南の方へ行つて見たくなり、支笏湖の

三井の發電所と製紙會社を見、それから登別の温泉につかり、急行で室蘭まで馳けつきました。

港の内は漣も立たず、時に外洋からのうねりにガイが赤い腹を出す外、すべてが青く水と空と合するところがわからない位でした。汽船は午後になつてから出帆しました。噴火灣！それは公二さんに清水港の龍華寺へ行軍した時を偲ばせました。小船の眞帆片帆はくつきりと浮彫の様に動きませむ。右手にうす煙立つ有珠岳を眺め、左手の駒ヶ岳は麓の紫色が海水に溶けてゐます。虻田と云ふ處で上陸しました。

それからは青い大洋を背にして、輝く陽の方に向つて歩むのであります。風と云ふ風はそよともない。羊蹄山は雪で白く光る。

有珠の噴煙は益々烈しく立ち昇り、蝸の聲の森に姦ましい頃、疲れ切

つた足をひきずり乍ら公二さんは洞爺湖畔の宿につきました。鏡のやうな湖面に筏を組んで小兒達が魚を釣つておました。オーイと力一杯の聲を出して叫ぶと、向ふの中の島から山彦が鮮かに返します。

湖水の面は夕陽を受けて一しきり閃き渡りました。まるで錦を織つたやうに。汀の楊柳もさいめきました。が、谿間ひの里は夕の間が短い。チラ／＼と湖上に縮緬のしぼのやうな小波が渡ると、見る／＼残照の色も薄れて、暮がたの霧の群と共に堪えがたい寂寥は何處からともなく漲りよせて來ます。

公二さんは夕食を終つて、廣間の真中にポツンと座つて居りました。寂しくつて仕方がない、萬年筆の軸をやけに叩き乍ら友達への便りなど書く。孝さんに環さん、新之助さんやお麗ちゃん、それらはみんな繪端

書でしたけれども、涼子さんへだけは長い手紙を書きました。公二さんは涼子さんには何にも知らせないつもりでありました。然し北海道に来て最初に便りをしたのは柏木へでした。別に何の意味もない、たゞ堪えがたさのために。夫人へと二人名前にして。

ところが思ひがけなくも、公二さんは令嬢からの返書を手にしました。それは單なる挨拶とばかり受取られぬ位親切に満ちたものでした。公二さんはその後に行く先々からの消息を怠りませんでした。

一一一

公二さんは案外に早く石狩を去つて札幌の街へやつて来ました。さくらんぼうとアイスクリームが食ひたくなつたからさ、と自分では笑つて

居りましたけど。

あれほどいぢけて人の前に出ることを慚しなかつた公二さんも、寂しい土地に永く心合ふた友の一人も持たずに、無爲に暮すといふことは堪えられなかつたのであります。

汽車の窓からのみ見た札幌は如何に美しいものであつたでせう。農科大学の白堊の建築がポプラの茂みがくれに隠見して、廣い街路、青い／＼アカシアの並木の幾團、公二さんは詩の國にあると思ひました。

若い男女の理想の樂園は此地の外にあるまいとまで胸を躍らせました。

然しいつの場合にもロマンチストの可憐な空想は手ひどく裏切られ勝てありません。美しい並木の下を前世紀式の鐵道馬車がガタ／＼泥をはねかしながら通つたり、瑞々しいと思つたアカシアの葉なども傍で見れば

埃が一面に附着して、風のはほひらいらしい。若い女は筒袖のぢみな着物を着てゐるし、家々が妙に薄暗かつたり……公二さんは齒の抜けたやうな悲みを覺えました。

けれども友人を農科大學に訪ねて、熟し切つたチェリーを恣まゝに枝から摘んで食べつゝ語つた時は愉快でした。その樹下には蜜蜂の小屋が行儀よく幾つも並んで、質科の生徒がヴェールみた様な網を頭からすつぱり冠つて、蜜をとつてゐました。裏の廣場はすべてが質修用の畑でした。そこには古びた作業服に縁の廣い麥稈帽を被つた生徒達が、磨ぎすました大鎌でサク／＼と心地よく草を刈つてゐました。

やがてその生徒たちは燃ゆる様な夕陽を浴び乍ら、牧草を山の様に馬車に積み、ひらりその上に飛び乗ると一聲の口笛と共に四頭の白馬は闊

子よく馳せ出す。長い／＼アカシア街道を一直線に!! 彼等は今や一日の實修を終へて寄宿へ歸るのでした。それは宛然ミレーの繪でした。

その夜狸小路のカンテラの光りが空に赤く映る頃、公二さんは氣まぐれに場末の芝居小屋の一つに這入つて見ました。こゝらでの興行はみんな流れ者の旅役者か何かによつて續けて行かれます。公二さんの入つたのは丁度大好きな淨瑠璃語りの小屋でした。伊達太夫が野崎をやつてゐました。客の少ないひやりとする土間に腰を落した刹那、直ぐ後悔しました。語り物が氣に入らなかつたのではない、太夫がまづいと云ふのではない。公二さんの心のその時の状態が、とてもかうした傷ましい漂泊人の群の(枝)藝を聞くに堪えなかつたのであります。で、そつと立つて木戸を破け出しました。下足番の爺はきよとんとした顔をして「まだお

早うございます。」としやがれた聲で云ひ乍ら、ぐいと掌を返して水滸を横なぐりに拭きました。薄寒い夜風に轢かはたく鳴つてゐました。大通りへ出る角の裸火をともした露店でとうもろこしを灸つて賣つてゐました。香ばしい美味さうな香ひが鼻をつく。公二さんはそれを二三本買つて駄々つ兒のやうに啮り乍ら泣き乍ら闇い旅宿へ歸りました。

一三三

學校の始まるまでにはまだ間がありました。が、公二さんはもうかなり烈しいホームシックにかゝつてゐました。友人達はとめました。今に西瓜が熟するからそれまで待ち給へ、ストープにあたり乍らあの冷い西瓜を食ふのはまたとない愉快なものだから、と。しかし公二さんはどう

しても歸りたくありません。

降りしきる細雨の中を傘もささず、アカシア並木を傳ふて、それでも妹君達への土産物を選ぶことは忘れませんでした。そうして七月以來歩き馴れたステーション通りに長い別れを告げて、乗り込んだ急行列車は七時に札幌を離れました。蒸し暑い晩でした。眠れさうで眠れない、息苦しい。車中の人々の顔には一種の寂しみがありくと見られました。殊に若い男女に。

公二さんは読みさしのマクベスの頁をひらいておましたけれども、思ひは遠く家庭の團欒や銀座の夜景に走り、更に涼子さんに及ぶのみでした。そのうちにふと気がつく、丁度背中合せの席に十六七の愛らしい少女がゐりました。房々とした黒髪を純白の幅廣リボンとともに背中にゆす

つて、董色の袴をつけて、その豊かな圓肩の體温が双方の衣を通して暖く
 滲みます。身動く度に微かに香水の匂ひもしました。荒涼たる異郷の
 空で思ひまうけぬ都風の風姿に接した公二さんは、一種にミカルな喜び
 を感しました。我ながら哀れなものだと淺ましいばかりに……。

雨は益々烈しくなつて屋蓋を打つ音バリくと、落ちては合し合して
 はまた落つる瀧津瀬が風伯の怒號と相呼應して、凄い上にも一入凄い。
 夜もふけました。

突然夜陰の闇をつんざいて、悲愴な汽笛を長く鳴らし乍ら汽車は停り
 ました。そしてバツクを初めました、除々に。

グワラ／＼グワラ!! 車室内は黒闇々、ハツと思ふ瞬間公二さんは水
 の中に沈むでまゐした。列車は河中に轉覆したのであります、出水の爲

鐵橋に故障を生じて。

二四

死傷者も多かつたが公二さんは辛うじて救はれました。中にはその死を報じた新聞紙もありました。お父様はお葬式の用意迄仰せ付けになつた相です。

あまりの激しいシヨックと不眠に疲れ切つた公二さんは、もう物を細かに考へることが出来ませんでした。その頭の中はたゞ東京のお母様のことばかりで充たされてゐました。一刻も早く無事な顔を見せて上げたい、そして安らかにぐつすりとお眠つてみたいと思ふ外、目下の自分の周囲なんと云ふことには少しも氣が付きませんでした。

一一五

負傷した左手を繃帯で首へ釣つた公二さんは、泥と血痕にまみれたセールの單衣を着、帽子も被らずに鐵道院から廻された俵に乗つて麴町の邸へ歸りました。

三十日間の不在中に都門の風物はいかに變つてゐたでせう、途中の車上からなつかしさうに、心地よく澄んだ秋晴の空を仰いで、無暗に心の躍るのを覺えました。そして大きく呼吸を吸つてみたいと思つて胸を張らうとしましたが、公二さんの五體はあまりに疲れ切つてゐて、肋骨の打撲傷が痛かつた。

汽車の内ではまだ氣が昂つてゐましたから東京へ歸つてからの見たり

きいたり、なすべき豫定をすつかりこしらへ上げて來ました。が、玄關
でお母様のやつれたお顔を仰いだ瞬間、公二さんはすべてを忘れて了ひ
ました。お母様が淋しさうに、それでも嬉しさうに公二さんを見て莞爾
されたとき、公二さんは感極まつてなんにも云ひ得ませんでした。たゞ
うれし涙が出ました。自分が遭難したのではなく、遭難したお母様の不
思儀に無事であつたやうな氣がしました。

もうこのお母様の笑顔一つですべてが酬いられたと思ひました。その
外に涼子さんもない、友達もない。以前學校の先生が君達の幸福の標準
について聞きたいと云はれた時公二さんは言下に、母の笑顔を見る事
ですと小兒らしく答へたので、生徒は一せいに笑ひ出したことがありまし
た。恰どそれでした、取絶つて甘へつきたい様な感情がこみ上げました。

二六

傷つき弱つた公二さんの身體と神經をいたはつて、二人の妹さん達は
いちらしいほどよくお世話して上げました、召使の手にもかけさせず。
公二さんは顔も片手で洗はなければならぬし、食事の時にも随分困り
ました。

そして毎晩恐ろしい夢におそはれるやうになりました。甚しい時には
連夜續きものゝを見る。まんじりともせず寢苦しい一夜を明すと、疲勞
が朝の中にとつと出る。公二さんはゴロリと横になり天井を見つめ乍ら
午前を暮す事を常にしました。そのほかには病院へ行くのと友達と遊ぶ
のとで、無理から一日を費しました。

それでも新學期が始まつてからは毎日學校へ出られるやうになりましたので、柏木へも御見舞のお禮がてらに或日訪問いたしました。

涼子さんはいそ／＼と出迎へました。しばらく會はなかつたうちに、二人は極く親しいお友達のやうになつてしまひました。いつものお部屋で公二さんはまるで前とは別人みたいに、しやべつたり食べたりはしやいだりしました。

今度のお正月にはみんなで歌留多をしませうと云ひ出して、涼子さんは公二さんに練習して頂戴とせがみました。公二さんは片手で——まだ左手には繃帯してゐましたから——とりました。涼子さんはその膝近うすりよつて心配さうにそつと觸つて見て、

「痛いのか？」

と心持蛾眉をひそめました。痛いつ、と公二さんはわちと仰山に振り拂つて眼を大きくしました。

『まア、お、こはい！ 覚えていらつしやい公二さん。』

涼子さんは袂をあげて打つ眞似しながら、勿體ないほどの優にらみをくれました。

翌日涼子さんからこんな葉書が来ました。

公二さん、

赤ちゃんの様な公二さん、私はお手々の傷が心配で堪りません。私のはしたなさからカルタなんかさせて、もしまた悪くしたらどうしやう、あたしは今晚眠れない。うれしい様な悲しさが心の底からこみ上げて来る。それを和げるのは貴兄ばかり、御來遊を待つ。

涼子さんも確に變つて來たのです。この態度をどう解して可やら、公二さんはまた更にいろいろ考へさせられなければなりませんでした。

二七

公二さんは寄宿寮の窓に身を凭せてつくづく思ふのでした。一高生活に入つてからもう滿二年は経過した!!

ひとたび自分自身の裡の空虚と欠陥を見出でからは、潮の様におしよせる不安と寂寥をどうする事も出来ません。詮方なしにぼんやりと机にもたれて空を見つめつゝ一日くを送つてゐます。不明瞭な不徹底ないやな日がついきます。折々思ひ出したやうに書物をひろげて、生懸命勉強しやうとするのですけれど、どうしても怠けて手が出ない。五尺の

身體のおき場所がない。

そこで芝居に行つたり旅行にも出たりして暫しの小康を求めますが。

人間にとつて眞に大きい寂みは自己反省から來る自責の念がありますから、何處までもついてまはつて放れない。仕方がないから朝から就寢まで頭腦を始終他の刺戟についてまぎらして、何も考へる餘裕のないやうにとつとめました。然し人は常に一人である場合の方が多ござんす。

眞實を洩らすべき人を求むるも厭。それは親にだつて兄妹にだつて!!
たい胸深く秘めておさめて、人知れず悶え泣くばかりでした。それも晝の間はまだしも、暗い夜の幕がグラウンドの方から重く垂れこめて來る時刻になると、公二さんは堪えられず書物を投げ出して親しい友人の許へ出かけます。けれど友人が馬鹿にはしやいでゐたり、エゴイスチック

な風をしたり、または自分の計畫や快樂について長々と饒舌つたりすると、いつも唾のやうに固く黙つてしまひます。よしやその一日はそれでも過せたとして翌日は如何する！ 公二さんは知らない。後腦部を兩腕に抱えて轉々反則するばかり。

たゞ吉野家を訪ねる時だけによつて、自分自身を感じます。公二さんは先方のおもわくに氣を兼ねながら、よく柏木へ通ひました。が生憎夫人と令嬢のお留守の事などがよくありました。來なければよかつたと悔い乍ら、去りかねて森に入り野をさまよひます。晩秋となればむさしの原ももううらがれて、寒い風のみ吹きすさびますのに。黄色い落葉や薄白い枯草を踏みながらひとりとぼくと、月光に濡れたやうな影法師を曳き／＼……うつろな心を懷いて體內の血の冷え渡る頃までも……。

麗らかな青空には早朝から長閑に、紙鳶のうなりなども聞えました。

厚い高塀越しの隣邸の庭園にも嬉々たる笑声や、カチン／＼と冴えた羽子の音、少女達の色ある衣の彩がちら／＼して、往來の人々も皆美服を着かざつて左右徂來する。公二さんは二階の欄からぼんやり見下してゐました。お正月なのだ、お正月だ？ つまらない。何故世間の人はおんなうれしそうな顔をしてるのだらう、とふと硝子戸にうつる自分を見ました。艶のないその憔悴した顔色!!

午後から公二さんは家を出ました。何處へゆくべきかも全く知らず、たい真直ぐに大またに大道を闊歩して、新宿ステーションへ入りました。

そして冷たいベンチに腰を下してから、自分のゆく先がやつと解つたやうな気がしました。そうだ、吉野家へ年始の御挨拶に！

これで行くべき口實が見出したので、公二さんはひらりと身をひるがして電車に乗り込みました。が、直ぐ五分か六分後には堪えがたい胸の動揺を感じ出しました。何故自分はいかう弱いのだらう、こんなに臆病なのだらう、と眼をつぶつて不覺の涙を拳に拭ひました。

到頭御門近くまでは行つても這入り得ず、田の畦の枯芝に腰を落して太い息をつきながら、泣きたい様な気がいたしました。夕陽がくるめき乍らすべり入らんとして西空を炎のごとく彩どる頃までも……否、それらの色彩が除々に闇に消さるゝまで見守つて……この穩かな音もなく暮れてゆく夕景色が、淋しいけれどもその中に人を抱容する寛大さを何處

となく持つてゐるやうで、公二さんは去りともなかつたのです。が、仰げば星の瞬きはだん／＼しげくなつて、その光度は強さを増し、紅かつた雲は黒く、地面と空が一緒になつて夜の幕はすべての醜いものを蔽ふて了ひました。ステーションの方では電車の火花が夕闇に閃く。

やつと立ち上つた公二さんは、それでも名刺だけを殘して歸るつもりで、眩しい玄關の瓦斯燈の下に、寒氣の爲に蒼ざめた面をさらしました。そしてがた／＼する身體をオーバーに引きしめながら、

「先生はお出ですか。」

と思はず云つてしまひました。その聲は奇しく慄へてゐました、總身も。その時の氣持と云つたらとても口で形容は出来ません。

公二さんは博士の書齋へ通されました。直立不動の姿勢でのべるぎこ

ちない新年の御祝詞を程よく受けて、

「まあお掛け。」

と椅子をすゝめられる。金ぶちの眼鏡がきらりとする。博士はいつも優しい微笑を洩らしつゝ、極く物いひの静な方でした。その優しさが公二さんの胸には錆た針の様に刺さります。

「近頃勉強はどうだね。」

「勉強ですか。あまりしません、出来ません。世間の俗事が多いので。」

告げるやうに云ひかけたとき軽い叩扉の音がして、半分開いた扉のかげから涼子さんがこぼれるやうな笑顔を向けました。但しお父様の方からは見えないやうに。そしてまた別の御客來があることを御報告になつ

たので、博士は應接室の方へ出て行かれる。

公二さんは涼子さんの視線を迎へて笑ひました。涼子さんも笑ひ出してしまひました。紫紺縮緬に光琳の梅の袖模様を出した派手な羽織が、色の白い涼子さんにはどんなに似合つてゐたでせう。白鹽瀬の組襟も品よく、髪は水の滴るやうな桃割でした。暖爐に近く椅子を引き寄せて、向ひ合つた兩人の双頬は燃えました。咲き誇つた緋牡丹の様なたわいな振が公二さんの制服の膝とすれぐれに垂れてゐました。夫人は先刻一寸挨拶されたぎりでもちつとも出て來られませんか。お忙しいのでせう。それに公二さんは夫人の寵兒でした。公二さんのする事なら何でも否定されず、涼子さんとなにを話してゐやうと、少しも氣にとめられないのです。それ程の特權と信用をかち得てゐたのであります。尤も當の涼子さ

んだつて公二さんに戀されてゐやうなどは、夢にも心づかなかつたで
ありませう。あまりに純潔で初心な青年に見えるのですもの。なればこ
そ、

「一高の生徒が一番いゝわね。蠻からで様子なんか一寸もかまはず、元
氣がよくつて。」

「涼子さん、僕は？」

「貴方！ 大嫌ひなの。でも可愛いわ、貴方あたしのベビーさんよ。あ
たし貴方のマ、さんよ。ほゝゝゝ。」

兩人はこんな他愛もない事を云ひ合つて興するのですが、それが上
もなくうれいのでありました。

「君強しはかなき心秘めおきて、歌がるたなどせんと云ふかな。」

「戀しさのかつはまさりぬ思ふこと、いはでまかりしその日その夜。」

二九

この二三日は非常に寒い。モスコの並木を吹く風がそのまゝにシベリヤの大陸を渡つて來るのではあるまいかと思はれるばかり。公二さんは身も心も淋しくてたまりませんでした、先夜のストーブの暖みと眸の艶を思ふにつけても。

學校が終つて環さんはスケートに來いと云ふてくれる、新之助さんと信さんは郊外へ遠足に共に行けと誘ふ。それならと云ふので四人は學校の前から電車に乗り込みましたけれど、同行の三人はいかにも愉快げに手眞似身ぶり、青葉城下の戦やら松島の景色やらについて論じ合つ

てゐます。人の氣も知らないで、ねたましいほどな元氣に充ちて。そしてそのねたましい様な氣が公二さんを、一人ぼつちにしました、そして折角を共にしながら辭を設けて途中から引き返しました。

「あたゝかき友の手すて、彷徨ふか、柏木あたり霜どけ小道。」

三〇

一月の下句公二さんの一家は麴町の舊邸を引き拂つて、麻布の高臺の新邸へ引き移りました。

はじめて新しい邸へ立寄つて檜の木の香の高いお風呂につかつて、いつもになく温みや胸の安さを覺えた公二さんは、今日は不思議になんと云ふ氣持のよい日なのであらう、と透明なお湯の中に胸を擦してさも自

山の天地を得たやうに、紅い血が外部からの刺戟と内心の活動とによつて、皮膚をつき破つて出るやうに感ぜられました。そして和服に着替へて懐には品子の歌集「舞姫」一部だけおしこんで新橋ステーションへ行くと約束の時間に孝さんも来ました。

土曜日なので汽車は満員でした。公二さんは孝さんに議論を吹きかけました。それは目的の地に着くまで續きました。いつの間にかお天氣がわるくなつて雨さへ降り出したのも知らないで……。

冬ざれの夕暮はどこでも淋しいもの。溝の様な野川に沿ふて四つ手網の澤山懸つてるのを眺め乍ら、二人は急に言ひ合せたやうに沈黙におちいつて了りました。そして黄昏の暮は刻一刻濃いものに變つてゆき、丁度森戸神社の傍の旅館までたどりついたとき、日はとつぷり暮れはてま

した。岸打つ浪の音も冷たさうに。

その夜はそこに泊りました。時々濤聲のあひまゝに、チチと鳴きつれる鳥がある。孝さんは耳をすまして、あれは千鳥だと教へました。森戸の森には雨風がザー／＼と騒いでゐます。

床の中から首だけ出して、孝さんは恵美子さんの話をする、公二さんは涼子さんのことを話す、十二時過ぎまで。孝さんはしまひにかう云ひ出しました。「明日は僕の古趾の神武寺に行かないか。」

神武寺は孝さんにとつては忘るべからざるしかも歡ばしい記憶の残つてゐる筈の土地であります。公二さんはもう何にも語る元氣はなくなりました。ねたましい様な悲しい様な……。

眠られぬ一夜を明して翌朝は八時頃に痛む頭を堪えながら起き出でま

した。孝さんも昨夜は眠られなくて、腫れぼつたい眼をし
ばたいてゐました。雨が煙りながら日光に輝いてゐます。濱には千鳥
が一二羽小首を傾げてチヨコ〜〜。

孝さんには氣の毒だと思ひましたけれど、神武寺はやめにして山越し
に小壺から鎌倉へ出ることにしました。雨にぬれた落椿を拾ひながら：

……。

只渺漫たる灰色の海、濛莫たる墨いろの空。

公二さんの心は何物かを恐れ戦いて、彼の空を見上ぐることも海を眺
め渡すことも出来ません。むしろ足下に散らばつた菜屑や蜜柑の皮に心
惹かれます。

「山に入れば山こわし、海に出づれば海こはし、この街道をゆく悲しき

男。」

三二

記念祭も間近になつて、梅がぼつ／＼咲きはじめました。

それは午前中ちら／＼と淡雪の散る底寒い日でした。公二さんは風邪のせいか頭ががぢ／＼痛い。課業は午後からないので暇でしたけれども勉強する氣にもなれず、本郷座の一幕見でもとブカ／＼する靴を引きすつて、ふら／＼校門を出しましたが、青木堂の前まで行くと厭になりまして。近頃は自分であきれる程むら氣になつた、と公二さんは淋しい氣がしま／＼こ。

それで三丁目から電車に乗つかつて、芝のスケート場へ行つて見まし

た。が、輿の乗りの目にはちつとも迂らない。徒らに頭の痛みが増すばかり、早速こゝも飛び出して了つたもの、何處へ行くあてもない

大手町まで歩いて來たらふいに心が江戸川べりへ向きましました。

門前までゆくと折よく孝さんは、恰ど散歩に出かけるところでしたので、早速一緒につれ立ちました。行先は例の通り四谷見附から甲武線電車で!!

原宿でひとまづ下りた時分には日は全く沈むで、僅に一沫の紅の横雲が刷いた様に残つてゐるばかり……。兩人はブラットホームからブリツヂに佇みました。西の山の端の明るい黄昏と灰色の夕闇! 煙突から吐く黒煙は西へくと流れて、闇がだんく濃くなります。公二さんはやけに叫ぶやうに云ひました。

あゝ淋しさよ悲しさよ、早く来てくれ。そしておれを救ってくれ。
あゝよく来てくれたね、

おれはお前とたつた二人で、永久に此處にゐたい。

孝さんは驚いたと云ふ眼をして、公二さんをちつと見つめました。そして悲劇役者なんかにならずに喜劇の役者になり給へな、と静な聲で云ひました。

三三三

その晩は九時頃に歸つて来て、孝さんの許へ泊り込むでしまひました。そして二階の書齋に寝ころび乍ら、數ある手紙などを見ました。中には會て自分の送つたのもありました。その時代のはどれを見ても無邪氣な

むしろ無鐵砲な議論や信念ばかりなんと云ふお人好しだつたらう、しかしこれが自分にとつては非常に幸福だつたんだ。つくづく自分は墮落したなア、と思ひました。そしてこれを書いた當時の心持を味はつて、心ゆくばかり昔の平和な追憶に耽りました。

床を並べた二人は十二時過ぎになつてもやつぱり話がつきませんでした。孝さんはまた惠美子さんのことを持ち出して、この四月は兩人で神武寺に上つてありし昔を偲ぶんだ、などと云ひました。公二さんは堪らなくなつて夜具を引被りましたけれど、眠るところではありませむ。頭がぐら／＼して来る。孝さんはなほ机の抽出しから美しい繪端書を取り出して見せました。それは惠美子さんからのでした。公二さんにはうるさうございました。突然引裂いてやりたい様な狂暴な氣になりました。

寄宿舎に赤痢患者が發生した爲め、學校では一週間の休暇をへれました。

公二さんは久しぶりにのび／＼と築地の邸で暮しました。そして讀書や沈思に日を送り、しばらく不安な苛立たしい生活から逃れることが出来ました。他人から侵されずに自由に考へると云ふことが、甘い蜜の御馳走に會つたより以上の喜びでした。けれどもちつと眼を閉ぢて瞑想するとき、ちら／＼と招く影は何ぞ。白い手、紫の色彩、匂へる頬、溢るゝ笑み、魔にもあらず鬼にもあらねど、この誘惑に對しては、何等の防禦力もありません。いかなる努力も讀物も思索も。

寮へ歸つてからも公二さんは丸一週間を圖書館に引き籠つて暮らしました。殆んど誰とも語らずに消燈時間まで。そして益々燃え熾る彼の怪しい苦惱に、氣は彌が上に苛立ち、心身の惑亂は一日増しに烈しく、而もこの境地から脱しやうとして一層もがき苦しみました。

それでも午の休みや學課の終了後にはきつと希望に充ちた面ざしで、せか／＼と本館の状さしへ手紙を見つけにやつて來ますけれども、毎日／＼その期待は落膽によつて報ひらるゝばかり。泣きたい様な心を持つて公二さんは足疾に去る。

公二さんは四五日前紀念祭の入場券を封入して、涼子さんへ手紙を出しました。餘程の勇氣で、半分は友人の盡力で、君はそれほど恐れなくともよいのだとはげまされ乍ら。それとても、

先日は御馳走さまになりました。

あの時お話し申した詩集、すぐ届けるつもりでしたが遅くなりましてすみません。生憎友人が必要があつて持つて行つてしまひました。然し貴女が是非御入用だと云ふなら早速送りますから否や御返事下さい。

記念祭も一日ましに近づいて來ます。今年は母さまと御一緒に是非ともお出で下さい。

かうしたぶつきら棒な文言に過ぎませんでしたけれども、その實詩集はいま手許にある、そして無用であいてゐるんでした。先達遊びに行つたとき貸す約束をして來たので、持つて行つて上げたく堪らないのでしたが、何だか男の威厳が損せられる様な面眩い氣がしてなりません。

そこでわざ／＼こんな葉書を書きました。否、それもあろうし令嬢から返事を貰ひたいといふ心が大部分を占てゐたのであります。

一日過ぎ二日経りました。夜になる、三日目の朝になつても返事は來ませむ。初心な公二さんの心は動搖初しめまた。夫人が可笑しくとつたのではないかしら。否、夫人は令嬢のよい様になる方でいつも令嬢の手に引かれて公二さんの家へも來るんですもの。そんなことはありやせぬ。どうも博士が恐ろしくて仕方がない。公二さんは令嬢のお父様を一番こわがつてゐました。それは舊道徳にかたまつた、謹嚴無比な方でしたから、ふとしたら公二さんの手紙が目について怒つたのではあるまいか。令嬢は公二さんが北海道から歸つた當時にも深切に見舞をくれた位な人なんだから、きつと今度も喜んで返事を書くつもりでゐたに相違ないの

を、もしや博士に妨げられたのではあるまいか。世の中の人は男と女―若い男と女とをどう考えてゐるのだらう、青年が乙女に手紙でもやれば親殺しの罪ほどに思つてるのかしら。などと公二さんは同室の友人が寝静まつてからも蠟燭をつけて何やら思ひに沈むでゐるし、朝は人並よりおそく起き出で、教室へ行つても浮かぬ顔ばかりしてゐます。親友の新さん達は近頃矢野の様子が異しいと云つて非常に心配いたしました。あれほど戀しがつてゐた邸へもあまりよりつかず、今まではよくあんなに勉強して身體がついくと云はれた位級中でも評判の公二さんが、まるで變つてしまひました。ともすれば太い吐息のみが胸を衝いて出るからしく、ある時は輝る月を仰いでひそかに熱い涙にくれたり、木の葉に風の觸れるのを窓からチーツと見つめてゐたり……。

一時だけでもいい、この煩悶をやる事が出来るならば、と思つてその頃流行つたスケートにも熱中して見ました。そして友人と一緒に散々騒いで汗みづくになつて歸ります。が、毎夜人と同じ様に安らかな睡眠に入ることが出来ないものですから、徒らに疲勞のみ甚しく、一層身體が打ちのめされた様になります。

かうした日が半月餘も續いたでせう、曉星の夜學へも行かず、フランス語の研究も打すてゝ。さうして初めてカッフェで酒をのむ仲間にも入つてみました。寒いく夜を彷徨歩いたり……。

あの刺戟の強い洋酒の味覺に公二さんの咽はどんなに燃えたでせう、頭はどんなに熱したでせう。然し獨り淋しい夜半過ぎの往來を蹣跚と察へ歸るとき、その心はどれほど力なくわびしいものであつたでせう。ま

だ酔も醒め切らぬ中から悔ひ始める。自己批評がもく／＼と首をもたげ
る。苦しい、益々淋しい。

ですからリアリストの新之助さんはよく云ひました。

「君は煮え切らない男だね、今すこし徹底し給へ。」

その度毎に公二さんはあの真面目な眼に涙を浮べ、拳をふるはして、

「それでは君は僕に墮落しろと云ふのか。それとも自殺して死ねと云ふ
のか。」

「何もそんなに親友の言葉の端をむきになつてつかまなくてもよささう
なものですけれども、こゝらが公二さんの真正直な、ゆうづうの利か
ぬ特性を最も簡単に發揮した點なのであります。」

自殺して死ぬ、墮落する。首を抜くことが出来なくなるまではまり込

む!! 公二さんには到底なし得ない事です。君は強者になり給へとはげまされても太息して、否、僕は矢張り弱者である、と云つて眞を落しました。

三四

記念祭の當日には公二さんは九時半から學校の門の處に見張つてゐました。もしやと涼子さんの姿を求めて!! 入場者は既に充滿で公二さんのところへいろんなお客様がありました。公二さんは自治燈の光ほの暗い長廊下を、一々案内してまはらねばなりませんでした。疝癩まぎれにお麗ちやんの手などはぐんぐ引張つて行きました。午過ぎからはお千賀さんや泉子さんもやつて來ました。が、涼子さんはどうも見えません

でした。つまらなくやけ氣味に裏の廣場に寝ころんで餅菓子を頬ばりました。そのうちに妹さん達が歸つてしまふと一層さびしい。

夕方大學のストームがおしよせて來る頃には公二さんは青木堂で、柔道二段になつた友人のお祝ひの御馳走になつてゐました。それから更に數人とともに銀座へ出て、カツフエからカツフエを三軒飲みまはりました。興味は露ばかりも湧きませむ、みんなは大變酔つぱらつてしまつて、赤い頬がほのかに玻璃戸にうつる愉快を遂ふて、はしやぎ立てゝ居りますのに。空な心に悔恨のみをのせておそく歸寮した公二さんは、痛む頭を抱えて倒るゝ如く寝ました。

翌日涼子さんから手紙が來ました。

都合があつて紀念祭にはあがれませんで、まことに残念でございま

す。私は貴方あなたにわるい／＼と思おもひましたが仕方仕方がありません。そのうちにお遊あそびにおいでください。かしこ。

あなたのマ、

公二さま

三五

昔むかし平朝臣たひらのあそ某んなにがしと云いふ大宮人おほみやびとは、京きやうに配所はいしよの月見つきみばやと詠よみました。

公二きみじさん達の連中れんぢゆうもよく勝手かてな熱ねつを吹ふいたものでした。僕等ぼくらも些ちと病氣びやうきになつて寢轉ねころびたいだけ寢轉ねころび、うんとうまい物ものでも食くつて見みたいなにかと。まして轉地療養てんぢりやうなぞする人ひとを心こころから羨うらやましく思おもはないでもありませんでした。ところが公二きみじさんは到頭眞實たうとうほんたうにその運命うんめいに陥入おちいつたのでした。

醫師は神經衰弱だと云ひ、友人達も何處かへ静養に行つた方がいゝだらうとすゝめまますので、早速その氣になりました。

愈々立つときめた日は曇勝な天候の、しかも風は雨氣を含んで寒いので、家の人達は切にのばすやうにととめられました。云ひ出した事はどうでも實行してしまはねば氣のすまぬ質の公二さんは、そんな故障位にひるみはしませむ。新橋まで見送ると云ふ新之助さんも来てくれました。時間の都合で孝さんには逢はずに、汽車の窓から新さんとかたく手を把り合つたまゝ泣きたくなりました。

三六

公二さんが早川口の魚屋に逗留から、毎日／＼濛々と山も沖の方も只

一色にかきくれて、うつとしい雨ばかりが白う煙つてゐました。露の白玉をつゝる簾椿の青葉や紅むが溶けて流れさう。たま〜障子開ければつめたい風が頬にひやりとする。

公二さんは東向きの二階の隅の部屋を占領して、此度こそは心から遊ぶつもりでしたから書物なんかは何も持たずに、たゞフランスの詩集の小型なのを一冊。

あんまり濤の音に近い宿なので、こんな場所の生活にまだ慣れない公二さんは、最初の中は夜半の夢も兎角おそはれ勝ちでした。晝の間もまことに手持無沙汰で、何をするともなく縁の籐椅子から玻璃戸越しに雨に打ち霞む薄墨の海面を眺めたり、煙草も吸はぬ身は餉臺に傍に、徒らに火鉢を抱えて穴伸をしつゝけて見たり……。

新橋を立つ時新之助さんは、呑氣に遊んで來い、と握つた手にぎゆつと力をこめ乍ら、例の艶のある笑顔を見せてくれました。自身でも出来るだけ快活であるやうにと力めてゐるにも不係、如何にも氣が滅入つて仕方がない。

困憊しきつた不愉快な頭の痛みに堪えられなくつて、公二さんは女中を呼んで白晝ながら床をとつて貰ひました。連日來の睡眠不足を補ふ爲に、少しでも眠らう……としても濤聲に打ち消されて、種々の幻想が絶えず腦中を去來します。

やつとうとくすれば夢を見ます。何處だかわからない。何處だかわからないけれども料理屋みたいな大廣間の障子を明け放して、闕の上に腰を下して、公二さんはガブ／＼とビールやらソウダ水やらを飲んでゐる。

る。顔も姿もわからない藝者がまアくくつて驚きながら、大きなお盆の上の大きな玻璃のコップにせつせと注ぎます。ポツ／＼と瓶の栓を抜く音まで聞えます。前と横に誰だか分らぬ四五人の友人がゐますけれども何をしてゐるんだかそれもわからない。が、各々に何かしてゐるやうです。

公二さんは飲んでもく焼つくように咽が渴いて、食道が爛れさう、體ぢゆうも焦げつきさうでした。心臓の動悸が痛いほど疾い。苦しうつて苦しうつて、コップを投げすて、蛇の様にのたうちまはる。

とふと眼が覺めました。雨には風さへ加はつたと見えて戸障子をゆるる音がかた／＼と枕に響く。今まで夢の中で味はつてゐた苦しさは堤を切つた河水の如くに、幻から現實の世界へおし出されてきました。涙は

止めどもなく流れる、公二さんは夜具の襟にかみついて、戀の苦痛に思
きました。

お友達からの見舞状は澤山來ました。今一人の信ちやんから、

卯の花くだしにはまだ早い春の雨に打たれて今日も學校へ出た。あ
る人は實に無味だ乾燥だと云ふ課業の中にも僕はあるスピリットを
搦んでると思ふから實際面白い。教へられる内に欠伸するのは學問
に厭いたからではない、只五官が勞れたゞけである。自分にはどん
な時にもどんな場合にも、行途に希望は輝いてゐる。弱い盲目な
萎へた氣力を鞭つてくれるものがある。やり損へばそれまでである
は僕にとつては無意味だ。やり損へば出來るまでやる。勿論充分の
考察をなした上でやなければならぬ。兄よ、深夜人の寢静ま

りし時靜かに深く自己の使命を内省し給へ。そして僕をして共に語り共に泣き共によろこばしめよ。

たゞ一葉の便りにでもよくその人の人となりを知る事が出来るから面白うございます。孝さんからは、

呪はれたる友よ。

頭の痛むのは治りましたか。養生するにしても只茫然と空想なんか
に耽つては駄目ですよ。まあ此頃は氣候も暖いから朝は少くとも
六時には起きて四邊の散歩にでも出で、夜はなる丈け早く床に就く
様にせぬといけません。要するに規則的に生活せねば……。

それから來週木曜にジローの試験、金曜に石川さんとセーモルの試験
がありますからそのつもりで！ 我等も御忠告を體してしつかり

やるつもりですが相變らず睡眠不足で馬力が出ませぬ、念頭にはいつも休暇になつたら鎌倉に行きたいとばかり思つてゐます。

更に新之助さんからは、

可憐なるセンチメンタリストよ、汝は春の波静けき早川の海岸に何を寂しと云ふや。寝つかれぬなど、ローマンテイクに汝の身を持ち崩しては困るではないか。今夜は麻布のお宅へ行つて小包で歴史を送らうとして、思はず兄さんと話込んでしまつた處へ森田君も見えて、種々御馳走になつて面白かつたが戶外は雨風で寒かつた。

早川ゆきはどう致さうかな、實は早稻田で二十一日に演説會がある。僕も出る、その原稿がなかくむづかしいのでね。行かれなかつたら、他の連中にすゝめて行かせやう。

お天氣てんきになつたら急に晴々はれ々と、三崎みさきの出鼻でばなや大島おほしま、初島はつしまも手に取るやうに見え出だしました。濃緑こゝろをりの海うみ、白しろい鷗う、鯨漁くじらぎよの漁船いさぶねが幾艘いくさうとなく旗はたおし立て、波なみを蹴けつてゆくのを見ると、そいろに自分じぶんの現在げんざいの生活せいかつが如何いかにも意久地いくぢなく、あまり臆病おそびょうなのに堪たえられなくなつて來きます。公二きみじさんは即日宿そくじやうを飛び出だして、歸京ききやうしてしまひました。そして病床びやうしやうから久ひさしぶりで脱ぬけ出いでた人ひとが、始めはじめて外氣ぐわいきにふれた喜びよろこもこんなものではないかしらと思おもふほどでした。

麻布あさふの邸うちの机つくえの上うへに残のこしておいた紅べにと黄色きいろのチューリップは、八日間かつかんの留守中くわしちゆうに枯かれ萎しんで見る影かげもなくなつてゐましたが、公二きみじさんの頭かぶたの

工合は非常にようございました。朗らかなお天氣のせいかも知れませむ。孝さんを引張り出して郊外へ散歩し、戸山ヶ原に寝轉んで話しました。その日は病人の公二さんの方がよつほど元氣でありました。

三八

試験をすませてから公二さんはまた旅行に出ました。休暇中のこととて今度は孝さんも同行でした。

汽車はゆくゆく……椿が光る

波が蹴立てば鷗飛ぶ

岡の櫻は八重一重

桃も見事に咲いて御座る

花のトネル 蜜柑畑

いくつか通つて午後の五時

笥の清水音もなう

闇の静寂に消失せて

たいつくねんと部屋の中

座つて都を偲びます

わたしの心は蟋蟀の

風にさそはれ啼くごとく

しづ心なく呼吸しつゝ

しづ心なく呼吸しつゝ

「八重櫻一重椿こゝら多し、さても海山いくつか輕越し。」

「今日あたり都のたよりきく頃と、指をりかぞへ落花に立ちぬ。」

「旅の子は緋桃花散る門に依りぬ、天城二十里雨押してゆく。」

兩人は伊豆の曲浦を廻りつくして、しばらく伊東温泉に滞在してゐました。孝さんにとつてはかなり退屈な數日間でしたけれども、公二さんは氣が氣ではありませんでした。

それは涼子さんに手紙を上げて、その返事を豫期してゐたのでした。それも退引させぬ様に、ローレライの歌と讚美歌の本とを送つて欲しいと云つて上げたのですから。しかしそれが來ないのです。涼子さんに書いた翌日お父様にお金を要求したらばそれは早速御送り下すつたし、お家からはお菓子が届きました。その時のうれしさ、矢張り身内に限ると思つたり、それにつけても涼子さんの無情に憤慨せずには居られなくな

「今日あたり都のたよりきく頃と、指をりかぞへ落花に立ちぬ。」

「旅の子は緋桃花散る門に依りぬ、天城二十里雨押してゆく。」

兩人は伊豆の曲浦を廻りつくして、しばらく伊東温泉に滞在してゐました。孝さんにとつてはかなり退屈な數日間でしたけれども、公二さんは氣が氣ではありませんでした。

それは涼子さんに手紙を上げて、その返事を豫期してゐたのでした。それも退引させぬ様に、ローレライの歌と讚美歌の本とを送つて欲しいと云つて上げたのですから。しかしそれが來ないのです。涼子さんに書いた翌日お父様にお金を要求したらばそれは早速御送り下すつたし、お家からはお菓子が届きました。その時のうれしさ、矢張り身内に限ると思つたり、それにつけても涼子さんの無情に憤慨せずには居られな

思おもつたり、それにつけても涼りやう子こさんの無つれな情さに憤ふん慨がいせずには居をられなくな

つたりしました。そしてまた不安のどん底に陥入つて了ひました。君の不安は一時的の先の見え透いたもので、直きに欣喜に變るから幸福だ、と孝さんは寂しさうに笑つてゐましたが、さう云はれると力強いのでした。公二さんの感情はまるで活動寫眞のフィルムのように變轉しました。

三九

孝さんが東京へ立つのを汽船の發着場まで見送つた公二さんは、よある農園へ入つて目についたアチモ子と忘勿草の二鉢を買つて歸つて、座敷の縁へおきました。取散らした部屋は留守の間にすつかり整理されて、机の上のコップには昨日自分達の採つて來た紫雲英の花束が生々水と水を吸ひ上げてゐるし、庭の山吹は今が満開、木蓮も二つ三つくつきり

と紫を點じ初めました。櫻は八重ももう末で、ひらくと池中に散り浮く瓣を、よく大きな緋鯉が浮み出てはばくりとやります。

洪水の様な日光に銀色の光りを放つて櫻や檜の嫩葉は營々と生育してゐます。耳をすませば地から吸ひ上げる生氣の音も聞えさう、常に生成して花を咲かし實を結ぶ。事に臨んで退萎することを知らぬ幸福者よ、おれは汝が羨しい、いや恥かしい位だ、と公二さんは頭痛に悩む額を押へました。

都より手紙の來ねばなどかこつ

われこの頃の弱かりけるよ

都より手紙の來ねば氣まぐれに

なりて轉びて日記など繰る

戀を思へ名譽を思へこのころ

何おびゆるぞ若き日の旅に

死は安し生は強しと思ひかへて

耐ゆれば落つるわが涙かな

寝られぬをもどかしがりて悶えては

なほ目の冴えて物し思はる

孝さんが歸つて獨りぼつちになつて了つてからの公二さんの手帳には柄にもなくこんな感傷的な字句が諸所に散見しました。お前の近來の生活は何だ、お前に思想なんかあるか、もしかう問はれても自分には心に恥ぢずに、ありと斷言することが出来ない。何故こんな風になつて終つたのであらう、これは自分の大危期だ。この危期を自覺せずして過して

ふと、それこそ取返しつかぬ事になる。と煩悶せずには居られませんでした。一度は全く失望しきつて、自己の如何にも醜く小さな事が悲しくて、他の眼から見たなれば自分の價値と云ふものは殆んど皆無なのであるまいかと疑はれる程でした。危く自己を放抛する處でした。かうした場合に人はよく自暴自棄になります。

けれども公二さんの手をとつて引き出してくれたのは、僅に踏み止まつた理性と、その頃いくらか首を突込みかけてゐた（涼子さんは早くからかなり熱心な信者でありました故）クリスト教の力とでありました。しかし一面にはまたその感化によつて、卑屈過ぎる反省や堪えがたい自己嫌惡から來る絶望の念を昂めたと云ふ氣味もあります。兎も角も内村氏の「求安録」はこの頃の公二さんの唯一の愛讀書でした。

余は余の言行を聖書の理想に照せば實に汚穢云ふに忍びざるものなる事を知れり。余は泥中に沈み居りしを悟れり。余は故意を以つて人を欺きながら、余の罪人なるを知らざりき。余は人に虚言するを意に介せざりき。余は他人の失策を見て喜び、他を倒しても自己の成功を得ん事を願へり。余は人の薄情を責め、自ら常に他人の不利益を願へり。余は國を愛すと揚言しながら、余の野心を充さんとす。

余は君子振りて野人なりき……。

筆者の懺悔のこんな一節を讀むと、公二さんは穴へでもあれば入りた
い氣がしました。然しこれが爲に一方に安慰をみとめ、一方には微か乍
ら努力の光りを見出す事が出来たのでした。自分のこれからの生活はこ
ゝに新しき方面に向つて、そして常に清く蟠りのないものであらねばな

らぬ。かう決心して、こんな個條書めいたものを日記の冒頭に掲げたりしました。

- 一 人ヲ欺カザルコト
- 二 思想ヲ清ク保ツコト
- 三 勤勉タルベシ
- 四 徳ヲ以ツテ恨ニ報ユベシ
- 五 二度考ヘテ一度語レ
- 六 人ハ意思ニヨリテ判断サルベシ、結果ニ依リテニアラズ

四〇

凡そむら氣な人間があると云つても、自分ほどむら氣な奴が又とある

だらうか。馬鹿者奴が！ と公二さんは机に打伏して男泣きに泣かざるを得ませんでした。到頭期待に裏切られたと知つた時……。遂に自分は馬鹿にされたんだ。だれがあんな事を頼んでやつたからと云つて、眞面目に返事をくれるものがあるものか、と云ふ様な侮辱に壓せられた叫びが聞える。この叫びが喉でも絞られるやうに苦しく感せられました。堪らなくなつて、我が爲には呪はれたる伊東よ、おれはもう居たくない、來たくない。永久に二度と知らぬ土地であれかし、と或朝七時の汽船で飛び出す様にこの港の町を去つてしまひました。少し狂氣じみた態度で……。

それでも公二さんは伊東土産の椿の油を靴の中へおし込んで、土曜日
を幸ひに午後から吉野家へ出かけました。夫人は眼を瞻つて、おやもう
お歸りになつたんですか、それにしてもよく早く全快した事、と祝つて
下さいました。公二さんは座敷へはあがらず、靴のまゝで縁側に腰かけ
て話しました。涼子さんの歸宅を待ちわびて、太陽の高さが刻一刻と低
くなる事に希望をかけ乍ら！ が、春の陽はなかく沈みませむ。夫人
はふと思ひ出したやうに、涼子からの手紙は届きましたか、と云はれま
した。公二さんは獨りで顔を紅くしました。そしてなせ自分がかう人を
怨む事に慣れたのであらう、と心底から涼子さんに罪を詫びたくなりま
した。今の今まであれほど憤満さに堪えなかつたのですもの。

突然涼子さんの、

「只今！」

の聲が、公二さんの耳にはどんなに聞えたでせう。純白に濃紫のふち取ったバラッルをかたげて、上氣した頬に散りかゝるマガレットの後れ毛を振り拂ひ乍ら!! 溢れるやうな紅い笑みを湛えて。その小わきに抱えてゐるスケッチブックを、公二さんは奪つてやらうかと思ひましたが、可哀想なのでよしました。靴の先で尾の切れたどかげをいぢくつてゐたのを、あわてゝ芝生の中へ逃がしてやりました。こんな事しては涼子さんにわるい、涼子さんの美しい情緒を裏切るやうなものだからと思つたのでした。

お庭には丁度植木屋さんが入つてゐました。築山が以前よりも高くなつたので、涼子さんは喜んでその上に馳け上つて、兩手をあげて、

「公二さんよりも背丈が高いわ。」

と威張つて見せました。

「は、お山の大將が相當だ。董でも寫生していraftしやい。」

公二さんはまた縁に腰をおとして、澄まして他方を眺めてゐました。

近頃の公二さんは常に勝者の様な傲慢な態度で人に對する。殊に涼子さんに對してさうでした。

やがて涼子さんは公二さんと並んで、學校の本など見せてくれました。

ウォーズウオスの「わたし七人兄妹よ」は僕の愛吟です、と公二さんが

云ふと、あたしもさうよ、と刻んだやうな片曆を見せて微笑みました。

本の間には香すみれが澤山はさまつてました。大好きと聞いて公二さんは今度根ごとのを持つて來て上げると約束しました。涼子さんは乙女椿

を一輪打つて来て、公二さんの胸釦に挿してくれました。が、手紙の事は二人ともおくびにも出しませんでした。届きましたかとも云はねば受取りましたとも。

四二

やがてその手紙が祝福された文字を包んで、伊東から廻送されて来ました。返事のおくれたのはローレライの歌を教はりに行つてたからですと書いてありました。ゆるしてね、小さいマ、さん、今度マ、さんには香ひすみれを澤山持つて行つて上げますよ、と公二さんは巻紙に頼ずりました。

で、次の日曜日にもまた吉野家を訪問しました。約束のヴァイオレッツ

トを持つて。おれは駄目だ、行くまいと思つてゐても涼子の引力にはかなはぬ。馬鹿な奴め！ 或は馬鹿かも知れぬ。それでもよい、今はすべ
ての誹謗に甘んずる。と庭の木戸を開けていきなり花壇に面した縁側に
腰を下しました。柏木の里は一週間見ぬうちにまるで變つてゐました。
虞美人草やプリムローズ、スウイトピーやシネリヤや忘れな草やら一面
で、白い蝶々がひらくと赤い花にもつれる長閑さ。兩人はそこで歌を
唱ひました。合唱もしました。賛美歌も教はりました。さらぬだにのば
せやすい春の日光に蒸された若人の頬は、紅玉の様に輝いてゐました。
歸つて來てから書いた長い手紙、それをポストに投函することは敢
て致しませんでしたが、公二さんはうれしさのあまりこの日の出來事を
すつかり孝さんに話さすにはゐられませんでした。孝さんは笑ひ乍ら、

「幸福な奴め！」

とどしんとぶつて、

「そんなに毎週行つては不可ぢやないか。」

「そんどは兩人で行くんだ。ね、孝さん。」

四三

美しう晴れ渡つた五月の空、ばつとあでやかな若葉のみどりは憂愁に
さしぐむ詩人の瞳孔をひらけ、アポロの神は黄金色なる征矢を若者の胸
に投げ射れて、休止がちなるあかき心臓を躍らしむるのでした。公二さ
ん達の口からは聲を合せて、勇壯な寮歌が歌はれて居りました。

燃え立つ新縁と麗らかな春光！ 人生は美しうございます、青春は愉

快でございました。二人は馳けるやうに歩きました。

そして戸山ヶ原へ出ました。スウイツルの野やスカンヂチヅイアの山を憶はせるやうな原です。はてしもなくひろがる眞緑、その上に點々とこぼれ咲くすみれ、蒲公英、紫雲英草、くらうばあなどの色彩がまるで友禪模様のやう。力を入れて歩くのも傷々しいやうな草の踏心地！ 榛の葉は生々しい匂ひを漂はせて眞晝の光りに蒸されてゐます。時々微風がそよ／＼と媚びるやうに二人の頬を撫で、ゆきました。

よろこんだ小犬の様に散々ぶざけまはつて喉を渴かした末、飲料水を乞ひに二人は吉野家の門をくゞりました。そしたら奥庭の方へ通されました。

常に好奇心の眼を持つてゐる人は、異常に感覺の鋭敏なものでありま

す。孝さんは丘の上に立つて庭園一面に咲き亂れた躑躅を眺めてゐる中にも、絶ず四邊を物色してゐましたが、早速何物かを見出したらしく、さながら大眞理でも發見したかのやうに、公二さんの耳許へ囁きました。

「君、彼處に涼子さんが！」

公二さんの顔はバツとその赤さを増して、躑躅の花の色が眩しくて困りました。

涼子さんは恥かしさうに縁先に紅茶を持って來ました。が、一寸お辭儀だけして、逃げるやうにお部屋の内へ姿をかくして了ひました。すると奥の方でお小間使の花やがしきりと笑つてゐましたが、

「そんなにおはにかみなさるものぢやございませんよ、お嬢様。さ、お出あそばせつたら、早く！ お待兼でございますよ。」

暫しぎんざめきの續いた後で、涼子さんは耳の根を紅めて紅白の金玉糖堆く盛つた硝子器を持つて出て其處へ据ました。こんどはおちついで、むしろ澄ました氣味で！

若い二人のお客は厚い紫綾の座布團の上にお尻をもちく／＼させて居ましたが、公二さんが花壇の花をほめると、涼子さんは花鉢を取寄せてそして惜しげもなく種々なのを切つてくれました。華奢な片手には持ちあまるまで！！

それを受取らうとした時、公二さんの腕は震へました。涼子さんは自分の可哀い深切や聊かの親しみな舉動が、どれほど公二さんを苦めるかと云ふことなどは少しも感じないでゐました。端近う立身のまゝで話しました。談話は益々佳境に入ります、傍に孝さんの居るのに氣のつかぬ

まで。

けれども太陽はすん／＼落ちかゝります、公二さんは怨めしげに西の空を仰ぎ見、更に視線を涼子さんの瞳に轉じました。が、わりあひ平氣な顔して花鋏を鳴らし乍ら、あらぬ方を見つめてゐるのが憎らしくて仕方がありませんでした。

最早歸らうと先刻から幾度となく決心はするものゝ、何物かゞしつかと公二さんを捕へてゐて、涼子さんから離れることを許しませむ。何よりも力強いこの誘惑にどうして負ずにゐることが出来ませうぞ、氣兼と男性的虚榮心とにむづ／＼遂ひ立てられる様な氣はしながら……。

花束には忘勿草も入つてゐました。そしてバンゼーが澤山！ 公二さんはそれが何よりうれしうございました。果して涼子さんがバンゼーは

「我思ふ」のシンボルであり、忘勿草はなほさらのことであるのを、知つての行爲か無心でか。それは涼子さんの心それ自身の外誰も知りはいたしませんけれど。

「こんどの日曜にはお千賀さんや泉子さんも御一緒にいらつしやいな。」

と長い袂を口にあて乍ら、

「だけど。」と口籠つて、

「ほかにもお友達が來ますから、つまらないかも知れませんが。だからそれよか次の次の日曜がよいかも知れませんが。」

孝さんはもう飽きた様な顔をして、文藝思潮論を読んでもました。夕鴉が鳴き乍ら花やかな夕榮の空を飛んでゆきます。

四四

とつぷり暮れ切つてから孝さんの邸までたどりつき、晚餐の御馳走になりました。

孝さんの幼い弟妹達は公二さんの花束を見て、盛んに欲しがつてゐたらしうございましたが、公二さんは分けて上げやうともしませんでした。そのくせ自分は何といふエゴイストだらうと恥かしく思ひました。

食後孝さんがテニズンの詩を持ち出して来て、レデイオブシヤロツトを読みました。それまでお千賀さんに教へて上げたりした時は、そんなにいゝとも思ひませんでしたのに、その晩讀んで見たら非常に面白うございました。公二さんは涼子さんにもこれを聞かせて上げたいと思ひま

した。そしてシャロットの妖姫まじきの上うへにおちかゝりし……かの塔上たふじやうに獨り閉こもち籠こもつて、神かみから命いのちせられた綾錦あやにしきを織おつてゐた姫ひめは、窓まどから見みそめた美しい騎士ナイトの姿すがたを忘れかね、一夜塔やたふを下くだつて彼かれのもとに行いかむとしたばつかりに、戀こひの非業ひわざに死しんだのでありました。……のやうな奇蹟うせきの彼女かのぢよの上うへにもあれかし。……と呪のろはれました。

この夜十時よじす過ぎ本郷行ほんかうゆきの電車でんしゃの内うちで片手かたてで花束はなたばを大切たいせつにかばひ乍ながら、片手かたてで文藝思潮論ぶんげいしやうろんを讀よんでゐた汚きたない一高かうの制服姿せいふくすがたの青年せいねんは、即すなはち公二きみじさんでありました。こんな様子やうすをお友達ともだちに見みつけられたら笑わらははれるでせう、殊ことに新之助しんのすけさんなどは、ぶゝロマンティスト、汝おまへはやつぱり可愛かあひいと洪笑こうせうするのでありませう。

四五

丸善へ書物を探しに行つた公二さんは、偶然その二階で孝さんとおち合ひました。そして格別面白い本も来てゐないらしいので、セーヌドウラヴィボエームと云ふのを一冊と、孝さんがワグナーの國民讀本を買つただけで直きこゝを出て足の向くまゝに歩き出しましたが、かはき切つたアスファルトの街は並木の風も生ぬるく、あゝデソレトされた白晝の銀座よと云ひたくなる。空はどんよりと曇つて、煙突の煙は疲れ切つた年老いた立ン坊の氣力の様に身動きもさせむ。太陽は汚れた血の様に重く凝つてゐます。兩人のベデストリアンはいつか目黒の臺に立ちました。

野の人は苗代の準備にいそがはしく、充分水を張つた田の面には蛙がやかましく鳴き立てゝゐます。公二さんは草の上に身を投げ出して、熱い太息をつきました。孝さんはかがんで其邊の花を摘みはじめましたが、「おい君、二日前の光景は實に素敵だつたね。僕はね、好奇心を持つてゐたので仔細にあの會話と態度を観察してゐたが。」と云ひ出しました。

「涼子さんは僕の想像と少しも違はぬ、實にレゼルヴな口のきゝ様だね。あの藤柵の杭につかまつて、うるみのある眸で時々ちつと見つめ乍ら、君の心を少しでも害あけまいと心配しながら、それでもレストレインドルする事は出來ずして後からく話す。そして君は僕に些つともおかまひなしに、涼子さんとはばかりしやべつてゐたではないか。」

嘘云ふな。あんな時には何とか君がお愛想でも何とか云ふものだよ。

僕は困つたぢやないか、君と行つたのはあれが始つたらう。だからまさか彼女は出て来やしまいと思つてたよ。また僕もそれを望んでゐたのだ。君がおい涼子さんが来たよ、とあの山の蔭で囁いたときには、僕は目が眩んぢまつた。それでさ、僕が縁側に腰を下すと彼女は僕の處へ何を持つて来たと思ふ。ヴォーズウオースの詩集だらう。僕ア實にどうしてよいかわからなかつた、そしていつもならあゝはしまいと思つたに。故郷の歌を貴方は好き？ と云つてわざ／＼そのページを繰りひろげてくれた。然しあんなに好意を示してくれたのはあれが初めてさ。なにも君に見せよがしにしたのではあるまいが。然しあの時は實際君が邪魔でならなかつた……。」

眞紅になつて辯解しかけると孝さんは突然眩で遮つて、

「何だつて！ 邪魔だつたつて!! 君は實に恩知らずだよ。君は少くとも僕にお禮を云つて可んだよ。あの時の僕の苦しさ、さんゝん君と彼女とのあまい會話をみせてくれられ、おまけに花を取つてくれたらう、君の欲するまゝによ。おれはすつかり君を恨んだ、そしてその花の中に忘れな草とバンゼーが一番多かつたぢやないか。また日曜にでも行き給へよ。」

かう云つて手ひどくこづきまはしました。公二さんは足元の小石を蹴り乍ら、

忍ばれずや瑠璃の色こき忘れな草

淋しく咲けばラインの乙女を

の歌を低く口ずさんでゐました。

長い晩春の陽も曇り乍ら朱黄色に暮れて、蛙の鳴音が益々高い。ただ若葉の森だけが白く光つて見えます。歸途は大崎から御殿山に出ました。

公二さんは自分がまだ一高に入れなかつた時分丸一年間、朝に夕に散歩したこの大崎の原、そこへ三年後將に卒業せんとして偶然来て見れば依然として姿を變へてゐませむ。入學當時の苦心とその以前の感想が交々胸をついて出て來ます。随分とその頃の心はビュアなものであつた。自分の爲した事について自ら責められる様なこともなかつた。生の意義を疑ふやうなことも、人の心を苦に病むやうなこともなかつた。少なくとも自分が自分で支配することが出來た。

四六

公二さんは泉子さんをつれて、何處とも知れぬ山の道を散歩して居りました。綠玉を溶かしたやうな新緑のいろが、心の臟まで沁み徹るほど頭上に左右からおつ冠さつてゐる。土の濕氣から立ちのぼる酔ふやうな香ひと静寂の境地、兄妹は夢のやうに手を引きつれて上つてゆくうち、公二さんは何だか突然一種の恐怖に襲はれました。それが前から來るのか後から來るのか、横から來るのかはわかりませんが……。

心の上部で不安の波が胸をおどくさせるのを強いて堪えて、ピクピクし乍ら進むと、恰ど崖の上から一本の醜い楓の樹が突き出てゐました。その幹にまきついた蛇が一匹鎌首をもたげて此方を見てゐるのでした。

公二さんははつと立ちすくみました。解つた、解つた。今までの恐怖の原因が！これが自分を惹きつけたのだ。皐月の野畑に獨り紅く咲く虞美人草の様に、遠くの方から自分を惹きつけたのが此奴だつたのだ、と思ひました。けれど妹を愕かせまい心づかひの爲に、だまつてたい泉子さんをかばふやうにして通り抜けました。

が、どうも氣になつて仕方がありません。黒い頭布を被つた傀儡師に縁つらるゝ人形の様、公二さんの頭は後を向きましました。居ない、蛇がゐなくなつた。何處へ行つたらう……急に高まる公二さんの鼓動は、胸の上にのせた手が弾かれるやうでした。いくらかの好奇心は突嗟に驚怖心と變つて、足がふるへた、身もすくみました。

はつと公二さんの心ついた時には、泉子さんは道傍に倒れてゐました。

その長い黒髪を地に曳いて！ 公二さんは馳け寄つて直覺的に胸に手をあて、みました。

案にたがはず小鳩の様な呼吸の喘ぎは、もう刻々に微弱になりつゝあるではありませんか。たつた先刻までは並んで歩いてゐてもその若くすこやかな情熱の強さが耳に響いたほどのに。

公二さんは男泣きに泣き出しました。泣きながら抱き起して懷をかきわけてみると、まあどうでせう！！ 蛇はまだ眞白な胸の凸起に食ひついたまゝ自己を忘れ總てを忘れて、心持よい薫りを放つ戀に耽つてゐる。まるで戀人同士の様に！！ 血を吸つてゐる。大理石彫刻の様な顔の色が若葉の蔭影ならぬ青みの度を増してくる。…… あゝ何と云ふ神々しさ、ギリシア神話の女神を思ひ出させる。怡と聖それ自身の様に！！

ついに泉子さんは公二さんに抱えられたまゝ、だん／＼息が絶てしまひました。公二さんはどうすることも出来ませんでした。けれどもまだその唇の鮮かさと顔色の美しさ、どうしてこれが死んだと思はれやう。公二さんは自分の腕に力のあらん限り、強く強くアンブラッソーしました。胸を胸に顔を顔に、あるだけの血を唇に集めて強くはげしく物狂はしいペースをくり返しました。惜しさの念が今までの驚怖に討ち勝て、悔恨の情が總ての強迫をおしのけて、公二さんの胸を破れよとばかりかき亂す。その苦しさ、堪へがたい愛着の情、愛する妹よ、妹よ、歸つてくれ、歸つてくれ、おれの胸の苦しさを少しでも知るならば、この兄の心を醫す爲に今一度笑つてくれ!! 苦しい、苦しい、切ない……。

公二さんはもがいて叫んで目が覺めました。夢だつたのでした。しか

し胸は現實に轟いてゐました。

幸福な小蛇よ、智者の蛇よ。自分の愛情を注ぐ女に、自分の胸に溢るゝ限りのパッションを提供する爲に、自分の烈しい愛を現實なものと

する爲に、相手の乙女の胸にかくの如く深く深く食ひ込めと云ふのか。太古人類が先祖のアダムとエヴに無花果の味を教へた奴よ、そして兩人に快樂と悔恨を以つて報ひた奴よ。矢張りお前は偉い智者だ。

今のおれは如何だ、成る程自分は確かに熱烈に涼子に愛を献げてる。

全身全靈をあげて。そして何等の報酬も得ない。それでお前は満足してゐるかと言はれると實に自分の不甲斐なさに泣かれる。時々は思ひあまつてまるで血の様な文字をペンの先から滴らすことはあつても、自分はそれを送る勇氣すらない。弱虫め!!

グニーズの女神よ、手を貸せ。そして彼女の胸に鋭い戀の矢を射込んで、強い戀の香に酔はしてくれ、口吻しやうが抱擁しやうか後はおれの勝手だ。そして彼女をして、

Je voudrais bien nourrir un petit moment siparee de vous!

Oi mon cheri.

と叫ばしてくれ!!

公二さんは物狂はしう轉々しました。

私の生命は其秘密を有つてゐる。私の靈は其神秘を有つてゐる。
一瞬間に戀が萌え立つたのだ。

惱だ！その惱は望もない、だから私はこれをもみ消さねばならなかつた。

しかも私の戀する女はそんな事とは露知らぬ。

あゝ私は彼女の側に居りながらも孤獨の心を懷いて時を過して行くだらう。

そして思ひ切つて求めることもせず、何も受ることもなく、此世の生活を終つてしまふだらう。

神様は彼女を美しくやさしく造つたが、彼女は足下から起つて來る愛の囁に耳も傾け涙ともせず、無心に自分の道を通つて行く。

敬虔の心で嚴なつとめに身を委ねてる彼女は、自分のことで一ぱいになつてゐる、この詩を讀んで云ふだらう。一體この女は誰でし

やう、と。そして了解することが出来ないだらう。

それは薄暗い梅雨の日の午後でした。異形の雲が空に蟠つて、むし暑
い油汗のじとじと湧き出すやうな。公二さんは一生懸命に佛國詩人ア
ルヴェールのソソチを譯してゐますと、折よく孝さんがやつて來ました。
早速譯したはや／＼を讀み上げてきかせました。

首を並べて書齋の窓から雨にけふる遠木立を眺めると、紫が、つた桐
の花がポタ／＼と庭に落ちました。柔かい情緒が何より嬉しいもので
した。

二人は妙に別れがつらくつて未練らしく縫れ合ひ乍ら夕方戶外へ出ま
したが、二度もカツフエへ入つたりして、重たい足駄を引きすり乍ら四
時間ほど歩きまはりました。しつとりと露を宿した若葉のいろがようご

ざいました。終に雨上りの泥濘を氣にし乍ら、日比谷へ出ました。花やかなアークライトに反射した若緑の艶は、物凄ほど目に沁みました。

二人はわざと暗い樹蔭をくぐりと選つて、池の畔のベンチに腰を下しました。まるで戀人同士のやうに人目を避けつゝ、背に背をよせて孝さんは云ひました。

「近頃御手紙がありますか。」

この間は公二さんに一種の苦痛と口惜しさを與へました。が、こんな場合には案外軽く思ひがけぬ返辭の出るものでした。

「なんにもありやしないさ。もうそんな話題は云ひつこなした。」

「君、惠美子は決して僕を嫌つてはゐない。少くとも愛してくれる。」

孝さんはまた自分のことを持ち出しました。最初涼子さんの事を云ひ

出したのはこの伏線だつたのだなと、公二さんはひがんでむしやくしやしました。

「先達の訪問の時彼女は常にも似ぬ冷たさを見せたんですよ、僕に失望をもつてのみ報ひた。が、僕が歸宅とすぐ電話で、その短かい數言によつて、僕の耳に温情を吹き込んで呉れるんです。だから僕は、僕は……。」

たゞ父なる人、兄なる人の態度、これが僕には大なる故障だ。惠美ちやんは何時の場合にも僕よりも元氣よく大膽だけれど、僕は徒らにもがくばかりだ。自由な交際によつて報いられる君を思ふと實に僕はいやになる。」

公二さんはこれをも皮肉なやうに解りました。

夜霧はだん／＼濃く重くなつて來ました。サーシャ……と噴水の音

眞黒な樹々のしげみの底では戀の囁きにも似た葉摺れ。紫銀色のアーク
燈は夢のやうな息を吐いて、ぢつとしてゐるとむづがゆい様な青葉の匂
ひが鼻の先まで迫つてくる。

「君、僕は思ふが恵美子のやうな現代の女性はあまりに強過ぎる。あれ
では不都合だ、彼女等は自ら與へる事のみを知つて、受けるだけの情
緒と度量に乏しい。……」

「要するに涼子と僕は別れなければならぬんだ。それを考へると馬鹿
々々しくて仕方がない！」

公二さんは投り出すやうにとんちんかんな返辭をしました。

四七

苗賣りの涼しい呼聲が朝々毎に聞かれるやうになつて、縁日の宵は植木屋店で賑はひ、街路樹の柳や篠懸や公孫樹も、こんもりした青葉に飾られました。自然の恩寵をうけて初夏の都會の女は、皆活々と見ちがへるやうな美人になります。殊に蒼白い花瓦斯の光りを浴びた夕化粧の濃艶さなどは眩しいやうに見えます。丁度さうした夕でした、公二さんは赤坂見附から何氣なく電車に飛び乗つて、持つてた包を傍の空いてる席へおきました。するとそこへ若い女が來て腰を下さうとしましたから吃驚して取上げました。そのあわて方が可笑しかつたか、囁きの様な柔かな笑ひの氣配が四方から起りました。しまつた、と公二さんはもう眼

のやりばがなかつたのです、車中は遠足歸りらしい妙齡の女學生たちで一杯でしたから。

しかし乗心地は決してわるくはありませんでした。柏葉健兒の自分が美しい注視の焦點となつてゐることを知つて。で、澄ましてモウパッサンの第一頁をあけました。と、前面なる乙女が急に笑ひ出しました。それは涼子さんでありました。

「ヤッ。」

始めて氣のついた公二さんは、突然のことに大きな聲でかう叫びました。その頓狂さに周囲の乙女達は、水の堰を切つたやうに一齊にぶつとふきだして了ひました。

「何處へ？ 横須賀の歸りですつて。——随分遠いんですね。」

「えへ。」

涼子さんはやつとこれだけ答へました。俯向いて袴のひもをいちぢり乍ら！前髪を透く耳朶が火の様でした。

云ひたい事は澤山ありましたけれど、公二さんももうこれ以上口を利く勇氣はありませんでした。無關心な風をしてモウバツサンの

『野の遊び』

を讀みつゝけてゐました。しかも彼女は何を語るかと始終耳を傾け乍ら。

電車は四谷見附で混んで來ました。その混雑にまぎれて涼子さんは挨拶もなく降りて了ひました、お友達と一緒に。公二さんは何處までも共にあらばやと願つたのに……しかも何の言葉も残さず……。柏木へ歸る

涼子りやうこさんはこゝで中野線なかのせんに乗替のりかへるのでした。

常々つねづね涼子りやうこさんが「私わたしは外そとで男をとこの方かたと會あふのは本當ほんたうにいやでございますわ。そんな時とき私わたしはだまつてゐますから。」と暗あんに云譯いひわけの樣やうに云いつてゐたのを思おもひ出だして、僅わずかに胸中きょうちゆうの鬱憤うつぱんは慰なぐさめましたけれど、一しよ緒しよに行いきたい!! こんな叫さけびが心こころの底そこです。公二こうじさんは窓玻璃まどがらすに顔かほおしつけて、夕間ゆふやみにほんのりと浮ういて見える涼子りやうこさんの像おもかげをおひました。女同士をんなどうしの輕かるやかに交かす別わかれの言葉ことばが小鳥こどりの樣やうに聞きえます。

機きを取逃とりにがした、と公二こうじさんは思おもひました。つまらぬ、おれは本當ほんたうに馬鹿かだ。自分じぶん乍はならみじめさにあきれた。おれほど勝手かつてな奴やつが又またとあるか、おれほど矛盾むじゆんの多おほい人間にんげんもあるまい。

「かうする」と云いつて置おきなながらすぐその裏うらから「いやこれではならぬ」

と打消してしまふ。常にこれを繰り返してゐる、それが生活の全部だ。

切角静まりかけた心をかきませる。決心がぐらり／＼と裏返りする。

それはみんな涼子さん故だ、今日も遇はなかつたらば!! と今更思つて

も追ひつかぬ。もう駄目だ!!! 氣があせる!! あせる／＼。

殆ど喪心したやうになつて麻布の邸へ歸つたとき、公二さんは或物が

自分に缺けてるのを心づきました。それは兄妹に對する愛でありました。

それも涼子さんがおれの心を空虚にしたからだ。おれの胸からすべての

紅さを奪つてしまつたのだ。おれは妹達の態度が氣に食はなくなつた。

もしおれに涼子みたいな妹があつたらば、と思ふにつけて罪もないのに

益々叱り飛ばしてやりたいやうな、憎んでやりたいやうな、わけのわか

らぬ殘虐な發作がむら／＼と起りました。とも知らず折からお千賀さん

の弾べる、妙なお琴の爪音の洩れてくるのもあはれや物狂はしい疝癪のたねでした。

『僕は當分家を出て獨りで暮したい。』

やるせなさに堪えかねた公二さんは、終に突然かう云ひ出してお母様にすべての不平をぶつけました。そのくせ涙は……熱い湯の様なのが兩の臉から溢れんとしてゐました。齒を食ひしばつて眼を張つて辛うじて抑へましたが、唇の戰慄は止まりませんでした。

お母様はどんなにお心苦しかつたでせう、しばらくは物も有仰いませんでした。公二さんはぐるりと背を向けてしまひました。泣顔をかくす爲に……。

やがてお母様は口を開いて、嚙んでくゝめるやうに北海以來の苦心

特に公二さんの爲に盡された心勞を、淳々と説き聞かされました。一句は一句よりも公二さんの胸に強く響く。それまで總身に燃えてゐた不満や悲しみは、みんな悔悟と同情の念の爲におひ拂はれてしまひました。一パイに塞がつてゐた胸もすつきりして……代りに割るゝばかり頭が痛めて來ました。

で、可かげんに話を切り上げて、ふらくする足許に力を入れて踏みしめ、二階へ上りました。そして手さぐりで電燈をひねつて戸棚から夜具を引き出すと、そのまゝごろりと引被りました。

不覺の涙は止めむ術もなしに溢れます。兩手に被ふた指の透間から……何の涙か自分にもわかりませむ。たゞ胸の底からくつくつと込み上げて來る。蜂谷がどきんどきんと波打つ。お母様は公二さんの後から直に

上つていらつしやいました。そして公二さんの名をお呼びになるのです、
細い力のない聲で。

公二さんは餘程だまつてゐやうとしましたが、お母様がお可哀想で仕
方がない。そこで出来るだけ厭な顔を見せまい。勉めて元氣を出して、
「なんですか。」と答へた聲はまだ怪しく震へてゐました。

お母様は優しく、早くお眠りなさいよと横顔をのぞき込んで、拔足し
て階段を下りて行かれる。

その足音が消えてしまふと公二さんはいきなり兩手を合せぬばかりに
お母様、許して下さいまし、と心の内で叫びました。僕はもうもう涼子
さんのことなんか思ひ切ります、そして身體を丈夫にして御安心させる
やうにします。僕はきつと誓ひます。

夜はだん／＼深くなる、眠らぬまゝに寝返りばかり幾反轉、階下の時計は寢ぼけた様にポーンポーンと二時を打ちました。

四八

翌日公二さんは孝さんと呼んで、昨日からの事を残らず打明けました。そして自分の決心を語りますと、孝さんはびつくりした眼を大きく瞻つて「何故？」と沈痛な一語を發したばかりでした。

公二さんもう多くは申しませんでした。たゞ「あきらめ」あるのみと思つたからであります。今までに涼子さんから貰つた手紙や繪葉書はみな取出して孝さんの目の前でずた／＼に破りすてました。中にもその寫眞を顔の真中から眞二つにしたときは、申譯かないと思ひました。呪

ひの刃でもあてるやうな気がして……。

寸々に裂かれし巻紙、片々にむしりしペーパー。五彩の花片の様なのを皆嵐のごとき手に丸めて火鉢の中に投げ入れ、ば、むら／＼と立つ紫のきな臭い煙!! かうして少しの未練も心の底に残るなど願つたのです。けれど、孝さんは面をそむけて静に、

「止め給へ、馬鹿な！ 負けしみ!!」

「何とでも云ひ給へ、これでも自分だけは大きな決心があつての事だから。さア、過去を封じて明日からは、新しい力と歡びを感じて生きるんだ、努力だ、進軍だー」

兩人は學校の構内の涼しい葉櫻の綠蔭の草原に寝ころんで、雜誌に耽りました。

公二さんはこのあひだあれほど堅く決心したことですけれど、どうしても涼子さんを思ひきることは出来ない。絶えず胸が痙攣されるやうで切なくてならない、と孝さんに告白へました。そうして草に額をおしつけて、

○ ma chere! refusezmoi tout dun coup,

と讒語の様に打呻きました。そしたら君は死ぬであらう、と孝さんは云ひます。否、それは當らない、おれは Je ne demand pas mieux! と答へるであらう、こんな長たらしいろくでもない夢は早く醒めるが可んだと、公二さんは靴底でたゞら踏みました。

孝さんもやゝ改まつて云ひ出しました。

「僕も決心した。決心といふと大變に聞えるが、それは何でもない。徹底した生を享けたいと云ふのです。換言すれば僕は自我の生活に入りたいのです。」

然し公二さんは黙つてゐました。おれだつて色彩の濃い自我の生活がしたい。でもそれが出来ないんだ。「お前は誰の爲に生活してるんだ。」と訊かれたら「おれは人の爲に生きてるんだ。」と答へる外知らない。馬鹿な！と嘲はれても仕方がない、考へて見れば馬鹿々々しくて仕方がない。でも實際自分の生活は全で人から左右せられて居る。

「駄目だ、母がある、家庭の事情が許さん。おれが自我！あくまで強い自我を徹底させたらおれの家はどうなる事であらう。母が可哀想だ。」

駄目だ。到底駄目だ。』

孝さんはなほ語をついで涼子さんに對して君はあくまで熱烈な態度を
とれ、とすゝめるのでありました。結果は敢て問ふ處でない、ぐづぐ
せずと短兵急にやり給へ。君は卑劣だ。自分の心の内に起つた猜疑の眼
を以て涼子さんに對する、そして涼子さんの純粹の愛情を惡意に解す
る君は自分で自分を苦しめてゐる。僕ならそんなにくよくよしない。

涼子さんは君の訪問の度毎に深切さを増すのではないか、涼子さんの
手紙を見給へ。あの愛の籠つた手紙を！今暫くだ。そして成功不成功は
君次第だ。君が大學を出るまではたしかだ。彼女は誰にも奪はれぬであ
らう、やつぱり君を樂ましてくれる。僕は君を祝福する。

孝さんはいつてもかう云ふ持論でした。けれども公二さんにはやつぱり

それが、嘲弄氣味のやうに聞かれました。なほ孝さんはさも確信を見せた調子で、

「今度こそはあの結末をつけます。鎌倉の叔父がまた航海に出るので、留守が淋しいから遊びに来てくれと云はれました。試験がすんだらすぐ行くでせう。そして叔母さんに頼んで恵美ちゃんを呼んでもらひます。多分これが僕等の最後の解決をつけるでせう。君も來給へ。」

「然し僕が行つてはお邪魔になるだらうから、まあよさう。」

「馬鹿な！」

と噛んだ物をほき出すやうに云ふ。

六月の十九日に卒業試験が終りました。何となく肩の重荷が下りたやうで心うれしく、珍しく公二さんは學校の歸りに三丁目の望月寫眞館で一吋、一高の帽子を脱ぐのを記念する爲に撮影したりしました。

そして今日こそは兼て思つてゐたことをすつかり聞いて貰ふつもりで柏木へまはりました。案内知つた裏庭から例のお座敷の縁側に腰を下しますと、涼子さんがしとやかに紅茶を持つて來ましたので、公二さんは引きとめて、暫しの沈黙の後、

『涼子さん！ 僕は全く貴女を怨みましたよ。』

と云ひ出したとき自分乍ら頭がぐらくしました。涼子さんはお盆を持つたまゝ耳の根まで眞紅になつてうなだれましたが、おつと面をあげて辯解しはじめました。

「松平さんが貴方と私のことをお麗さんに話したんですつて。私もう何と云はれたつてかまはないと思つてゐましたの、だけど先日赤坂見附ではまるで驚いてしまひましたわ。皆さんが、誰だ〜と聞くんでせう。仕方なしに親類の方だと申しましたの、何度云はせられたか知れませんか。そしてわざと左様ならとも申さずに失禮したんです。すると後でみんなに弄かはれて困りましたわ、ほんとうに……。」

そこへ博士が這入つて來られました。涼子さんは逃げる様に座をすべり出る二人きりで、話をしてゐるといつもこの通りなのでした。公二さんはもう歸らねばと制服の膝を正してもち〜しました。

博士はお兄様の近況を頻りと尋ねられて、そして公二さんに、兄の様では困る。勉強して早く大學を出ろ！と云はれるのでした。それが非常

に公二さんを激させました。博士も矢張り兄を普通ののらくら者と思つて居られるか、失敬な!! 分らずやめ、私の兄はそんな人間ではないんです。たとひそれが先生の云はれる通りであつたにしろ、私に對して兄の悪口を云ふとは!! 否、否、勝手に思へ。どうとも思へ。今に見ろ、人に負てなるものか!! 残念!! 勉強だ、歸つて勉強だ!! と自分がいま目の前で侮辱を受けたやうに火の様な悲憤が胸元にこみ上げました。しかし博士は何も老婆心から、弟にはかくあれかしと案じて下さるのだもの、感謝しなければならぬ。とは萬々承知しながら、博士のお言葉のきれるより早し、暇を告げて一目散に家路に就きました。心の中で残念!! と叫び乍ら……。

涼子さんは、博士の背後に小さくなつて、お玄關に見送つてゐました。

五一

大學だいがくの入學にようくし試驗けいもすみました。出來できたか出來できぬかおれは知らぬ。然しかし京都きょうとへは行ゆかぬつもりだ。これから旅行りょこうだ。と公きんじ二にさんは子供こどもの樣やうになつていそぐと、青木堂あおきどうで買かつたベルモットを一本ほん片手かたてに下さげ、片手かたてにピケットの包つみかを抱かかえてばいと電車でんしゃに飛とび乗のつて了しましました。取殘とりごされた友人いうじん達は驚愕けうかくの眼めを瞻みつて見送みおくり乍たがら、狐きつねにつまゝれたやうに佇立ちよりつてゐました。

それは夏なつと云いへば暑あついに極きまつてゐるものゝ、殊ことにこの二三日にちとせき時々ときとき驟雨しゅううのばらぐと來くるやうな空合くらあひで、水蒸氣すいじょうきが濃こく重おもく頭腦あたまを壓あつして感かんじの悪いわる膚はだからはじりぐと焦いらいるゝ樣やうな汗あせが湧わき出だす。風かぜは生なまぬるゝ、砂塵さぜん

がポツ／＼と上つてゐました。

公二さんは近頃益々人と離れて來ました。上品ぶつたむづかしい議論などは眞平御免で、今迄親しかつた辯論部の連中に非常な嫌惡の念を持つやうになつたのも、一つはこれが爲でした。こんな行爲が遂に公二さんの心から愛や友情といふものを根こぎにしてしまつて、その反對に一種の惡しみを生ずるやうになりました。涼子さんに對してまでも。

そしてすつかり瘦せましたのでお父様は公二さんを慰めて、この夏はゆつくり遊んで來いと過分の旅行費を下さいました。父母の爲にも一日も早く身體を直さねばならぬ、と氣を取直して公二さんは旅行に出る前に今一度吉野家を訪問しました。最後の別れを告ぐる爲と云ふ覺悟で!! 半年前と今門をくゞる時の心持の相違はまあ何といふことでせう。奥

庭の茂みはいつに増して縁濃く、夫人は常に深切でありました。涼子さんの面には白玉の様な艶が溢れて、いそ／＼ともてなします。然し公二さんの心は暗く沈むでゐました。希望の光明も絶望の淵にまでは、その恵み深い光りを投げません。胸の鼓動は平静で、晨の湖面の様でした。涼子さんの表情にも態度にも特に何等の注意も拂はねば、興味も持つてはならぬのでした。以前には月一回の訪問がどれほど待たれた事でありましたらう、どれほどの愉快に酬はれて、どれほどの希望に充ちて歸り／＼したことでせう。それが今は如何だ、と思ふと残念で堪らず意識せぬ涙が……公二さんはあわてハ拳で引こすりました。

この日はおもに博士とばかりお話して、お兩人には御挨拶もせず、も顔も見ず逃ぐるが如く辭し去りました。そしておれはかうしてとう／＼

う涼子さんを心の中から追ひ出してしまつた、これからがおれの活動の時機だ、ヴァンジャンスの戦だ!! と叫びました。

五二

七月の末に東京を立つてから、或は伊勢に坂神に京都に海に山に、公二さんは随分目眩しく飛び歩きました。後になつて考へてみるとそれらは何等の實質もなく、胡麻化しの跡のみ歴然と數へられるやうで、たい時間を過したと云ふに過ぎなんだ。卑怯な方法であつたとも思ひましたが、公二さんにとつてはその場合他の方法がなかつたのです。あの魔の様な絆からのがれたいと思ふ一すちに切なる努力であつたのでした。

けれども伊豆の山間の長岡温泉は氣に入つて、二句に近く留逗してゐ

ました。ゆるやかに蜿蜒つた山脈とそしてその滴る様に柔かい若緑の色と
 清い山の水とは、どんなに公二さんを樂しませてくれたでせう。朝まだ
 きまだ深い眠りから覺めぬ宿をぬけいで、公二さんはよく小川に沿ふ
 た百合や撫子咲く森に身をかくしました。そうしてほてつた兩足をそう
 つと下草の白露の上のせて、いろんなことを考へるのでした。静寂で
 した。歸る頃には十國峠の方の空がうるはしく彩どられて、眞紅な太陽
 が溶けさうに揺ら／＼とさし上ります。朝霧のウエールを被いで川の面
 はちら／＼躍つてゐます。

お友達からの手紙にはよく云つて來ました。君、涼子さんの事を思ひ
 出さないか、と。公二さんは微笑をもつてこれを葬り去りました。成る
 程自分は最早あきらめて涼子さんを思ひ切つたのである。然し全然涼子

さんのことを念頭から忘れてしまへと云ふのは全く不可能事である。殊にあの山の若縁!! これが過ぎにし伊東の春を思はせないですまうか、散りかゝる緋桃の花こそなけれ。

山間は秋の立つのが早うございます。深みゆく葉のみどりにも、梢を渡る風の音にも、もうしんみりとしたうら寂しい氣が流れて居ました。たい白い日光の眩ゆくみなぎった空の色のみが、僅に夏らしい明るい感を抱かせるばかり。秋だ! かう云ふ叫びが勢よくお腹の底から湧いて来る。

五三

公二さんは九月の初旬東京へ歸ると、すぐ孝さんを訪ねました。

「どうだった!」

孝さんは眞珠の様な皎齒を見せて微笑しながら、うれしそうに迎へました。公二さんは黒くなつた腕をまくり上げて、こんなに太つたと云はぬばかりに椅子に腰を下しました。

レースの窓掛をそよがして東南向きの窓から涼しい風が吹き通すので公二さんはしとりの汗もとみに乾いて、卓の上に着たく積んである書物を片端から取上げて頁を繰つて見ました。レミートグールモン——フランス——いろいろなのがある。孝さんは矢張り幸福だ!! と思つて公二さんは太息を吐きました。

十二歳になる富貴子ちゃんは暫く見なかつた間に、二つも年長けた様にな大きくなつてゐましたが、突然公二さんの膝に飛びついて胸に顔を埋

めました。のび／＼とした靴下に軽げな洋装、真中から分たお下髪のお頭をふり乍ら。これが涼子さんだつたら、と思ひ乍ら力一パイ抱きしめると、苦しがつて脚をびん／＼させる。スツと出てゐる細い腕の薄すりと狐色に焦げたのも可愛らしい。お兄さまに似た人形立の容貌よし。

談話半ばにお玄關の方で賑やかな笑聲がして、大きい方の妹さんの縁さんが鎌倉から歸つて來ました。叔母さまも御一緒らしうございました。活潑な縁さんはまだ帽子も脱らずに此宿へ這入つて來るといきなり、『兄様、お二人の秘密を聞いちやつてよ。叔母さまと一緒に散々笑つたのよ。随分可笑しかつたわよ。』

と可愛い顔を真紅にして、身體を二つに折つて笑ひつけました。

公二さんは眞面目になつて、それが何を意味するものであるかを知ら

うと大いに力めました。が解りませむ。孝さんは苦笑し乍ら、例の事件が叔母さまに漏れた理由を説明しました。

いづぞや孝さんが伊豆から鎌倉へ行つたとき、

「ねえ孝ちゃん、矢野さんの御病氣は、何でも餘程お安くないんですつ

てね、えい。」

と不意に聞かれて度膽を抜かれた孝さんは、なんですつて？ とたゞ云つただけでした。

「え、名は何と云ふの？ 貴方もうちやんと知つてるんでせう、御親友

ぢやありませんか。」

「知りません、僕がそんな事。」

「よし、それならそれで可。今度矢野さんが来たらうんと油を絞つて、

思ひ切りいぢめて上げないぢや。』

と叔母さまは得意さうに笑ひました。

僕はあの時だけはほんとに驚いてしまつたよ。その上なんと云ひ出されるかわからないでね、と孝さんは一息に紅茶をあほり乍ら哄笑しました。

その實自分のノートの片端に誰の戯書か孝さんと恵美ちゃん、公二さんと涼子さんの名を並べて書いて、そして和歌が添へてあつたのを何時のまにか叔母さまに発見されたのを、孝さんはすこしも知らなかつたのださうでした。

秘密で終る秘密は無い？ と公二さんは打ちうめいて、何だかつくづく恐しくなつて來ました。自分はどうなつてもよいやうなもの、萬一

こんな噂がひよつと涼子さんの御両親の耳にでも入つたら何とせう。

「ね、君、最早心のスタビリテイの出来上つた今となつて見れば、こんな事ぐらゐは何でもないが、これが正月頃の事だつたらまた病氣にでもなる處だつたらう、ほい命が惜しいわ。」

五四

涼子さんばかりが女と云ふわけではなし、公二さんの周囲には、友人の妹さん方やら親戚のお嬢さん達やら、どれも蕾の花ながら先生偲ばるゝ美しい少女たちが澤山ありました。お麗ちやんなどもその一人でした。公二さんはこの少女によつて涼子さんに對する不満足をいくらか充たす事が出来るやうになりました。それは最初の程は涼子さんに對する

誠心まことこころからして、つれなくお麗うつくちやんを疎あだんじました。しかしわざと疎あだんすると云いふことそれ自身ごしんが、既すでにお麗うつくちやんの赤あかい純潔じゆんけつな頬ほや心臓ハートの方ほうに幾分いくぶんなりとも惹ひきつけられた證據しやうこでした。

男同胞をとこはらからのないお麗うつくちやんは昔むかしから親類しんるいの公二きみじさんを、兄にい様さまと呼よんでゐました。そして何でも兄にい様さまくと云いつて無邪氣むじゃきに慕したつてくれる。散歩さんぽにも連つれてつて頂戴ちやうだいと甘あまへる。何なんといふ可愛かあいい奴やつだらうと思おもふ事ことさへありました。

で、おれはもう日曜にちようの外ほかは遊あそばないと固かたく心にきめてゐながらふとお麗うつくちやんから、地理ちりの不審ふしんを伺うかがひたいから是非ぜい來きて頂戴ちやうだいなどと電話でんわをかけられると、明日あしたまわりませうとつい返辭へんじしてしまふ。そんな事ことで何なにが出來できる、と直すぐ後悔こうかいして自分じぶんを叱しかつて見みてもおつつかない。

翌日學校の歸りにまはると、ダリヤや秋草の咲き亂れた庭に向つて机を据たお下髪のお麗ちやんは教科書をひろげてゐました。公二さんはいさなり上衣を脱いで麥湯を飲む、ついでさまに三四杯！ それでやつと人心地がつくと、お麗ちやんは膝を向け直して、ちろ／＼と公二さんの顔を見てゐましたが、

「貴方は實際家ね。」

と突然口を切る。

「何故？」

と公二さんは葛饅頭を一息に二つ三つ頬ばりました。

「だつて近頃は吉野さんへばかり行つてらつしやるんぢやないの。そして家へなんぞは少しも來て下さらないのねえ、ひどいわ。」

「何だ、そんな事か、つまらない！」

苦笑にまぎらすのを追究するやうに、

「涼子様は美人ねえ。」

「なあんのこつた。」

「でも貴方は佛英和で大變な評判よ。何でも涼子様が非常に褒めるんですつて。眞面目で親孝行でよくお出来になるつてねえ。——破けた靴をはいて破けた夏帽子を冠つて、いつでも電車の内でフランス語の小説を讀んでお出の方つてみんな知つてゐるわ。さういふ、松平さんや有田さんが云つてましたわ、先日も甲武線の電車でお友達と並んで腰をかけて、「君ね、何故露西亞の女はかう氣持がよい程はき／＼してゐるでせう。例へばサアニンのカルサヴィナ……僕は現代の女性にあんな人

があつたらと思ひますよ。」なんて話合つていらしたつてねえ。」

公二さんはもう相手にしないで、口笛を吹いておました。と、お麗ちやんは涙に霞んだらしいのを、おいつと睜つた眼の大きさ、美しさ。うつむいてしまつて正面に顔は見せませんでした。その小さな心臓の烈しく波立つてゐるのは、軽いもすりんの單衣の胸が鼓動毎にあほるやうなので知れました。

お前はまだ若いよ、可愛いよ。人間はその時分が一番楽しいんだ、と公二さんは心の中でつぶやきました。そうしてその繊細な身體をわがたくましい腕で思ふ存分抱きしめたうございました。何心もなくひしと寄り添つてゐるお麗ちやんの薄い衣と白蠟の様な肉を通して、火よりも烈しい熱が公二さんの四肢に顫動を興へます。けれど公二さんはどうして

よいかわからずにとゞ、お麗ちゃんの手を膝の上にあづかつたまゝ、
なほ無關心らしく口笛をつゞけてゐました。

五五

公二さんは學校の歸りに濡れた傘をぶら下げて、室町の新之助さんの
處へ寄りました。新之助さんはつい二三日前北海道旅行から歸つたばかりで、
二ヶ月も會はなかつたのですから話は山の様に溜つてゐる筈でしたが、
逢つて見ると別に何のこともない。矢張り新さんと自分だと思ひ
ました。

兩人は泥濘を踏んで魚河岸に沿ふてこゝかしこ彷徨ひました。淡い夕
靄の中に寶石を置き並べた様に見える灯の瞬きを眺め乍ら―そして空

腹の半は屋臺店のお館の立食で出来ましたけれど、猶電車で銀座まで行つてしまひました。

二人はとあるカフェエの二階へ上りました。高度な花瓦斯がきまりのわるいほど明るく照つて、大理石張の卓の白い色が寂しい。注文した品は並べられても、二人とも食べ様ともせず飲まふとも思はず、伏目勝に卓上の灰皿を弄そんで居りました。コップの泡は徒らに立つに任せて……。

と、突然新之助さんが口を切りました。少し頬を紅らめた氣味で、

「ねえ、君、僕ね今大變な事に係つてるのさ。ある家でね、養子が要るんだ。僕の家のお親戚さ。君行かないか？ 財産はあるせ。」

公二さんは泣きたい様な笑ひ出した様な一種息つまる様な妙な氣分

に壓倒されて、暫しの程はたゞ黙して友人の面を見入るのみでしたが、やがてその視線を白壁の方へそらすと、すうと暗い黒影が自分の心を明るみから死の陰に引張つてゆくかと思はれました。生真面目な顔を頰杖に据て、返辭いかにと期待してゐる新さんに向つて、

「戀の爲の戀と云ふものはあるかしら。そして人は戀に破れたときは、もう過去としてこれを葬り去ることの出来るものだらうか、もし思ひ出となつたら甘さを覚えるであらうか、苦惱を感じるものだらうか。」

お門ちがひのこの反問に驚かされて、怪しむやうな眼眸に頭の方から足の方まで測量でもするやうに見下した新さんは、何もかも總て了解してゐると云ふ調子で、

「もつと具體的に云つてくれ給へ。一臂の力は貸すものを。」

と靜に云ふのでした。幸ひ周圍の卓にも客は一人もゐませんでした。丁度好い機會だと興奮しきつて公二さんは語りました。そして自分のしたことにジャスチイフイケションを與へて貰はうとしました。ところが逐一聞き終つた新さんは、

「君の戀はそれは遊戯です、一個の玩具です。」

と思ひがけなくも大變攻撃しました。その公二さんの神聖なる戀を！そして、君は眞の戀の魔力に觸れる爲に、然りか否か聞く爲に、もつと突進して自分の赤心を披瀝せねばならぬ。君は卑怯だ、否と云はれる事が恐ろしいのか。然しそれはどうせ聞くべき宣告を少し延引するに過ぎぬ。そして打撃は今よりもひどからう。それに君は涼子に苦悶を與へる

様な事は、到底忍びられぬなんてことを云つてるやうだが、そんな犠牲的な態度を持してゐてはこんな事は駄目です。もつと徹底せねばならぬ、と。

折しも一群の連中がどや／＼と上つて來ましたので、二人は勘定をして立ち上りました。戶外へ出ると屋根の上に天の川が眞白う流れて、露店のカンテラのゆらぎにも、大路の柳にももううら悲しいほど涼しい初秋の微風が動いてゐました。

五六

その後とても吉野家へ行かなければならぬ機會は度々ありましたが、たゞ公二さんの感激が以前のやうではなくなつたので、おれの心の中に

は最早パツシヨンが無くなつたらしいと自分でも思ひました。

晚餐の用意が出来たからなどと引きとめられても、面白くもないのですぐに歸り／＼しました。涼子さんはすこし痩せました。それがいつもより一層美しい、公二さんもう思ひ切つてちつと相手の面を凝視ることの出来るやうになつてゐました。涼やかな黒瞳のうるみが今にも溢れさう！ あれがアムールの泉でなくてどうせう。あれが乙女の眞の力でなくてどうしやう、口吻けてすゝりたい位、燈火になど映ては一入キラ／＼して！！

公二さんはなんだか小鳥に逃られた様な氣がするのでした。別に惜しいとも思はぬが物足らぬ様で……。

五七

お母様は大阪へいらしてこの一週間ほどお留守でした。

或日公二さんは學校で散々頭をなやませて歸つてくると、彼地の御親戚から手紙が來てゐて、お母様が御病氣御入院との事でした。病症はどうも寧扶斯らしい……。

今日はなんと云ふ日だ！ またもや惡魔がおれを闇暗に引ばつてゆく努力がおれを裏切つた。何をやる氣力もない。惡魔と云ふ奴は何處までその毒手をさしのばすのであらう。切角人が丹精して美しい眞紅な花を咲かせやうとすると、ほんの瞬間にほきりと莖を根元から折り取つてしまふんだ。と書齋の壘のうへに打倒れたまゝ、泉子さんがお風呂の加減

のよいことを知らせに來ても、身動きもしませんでした。

憂愁にみちた同胞三人きりの夕餐を寂しく終ると、公二さんは久し振りに散歩に飛び出しました。やゝ冷た過ぎる宵でした。しめつた空氣の底に花の如き灯が輝いてゐます。勢よく走る電車、廣告燈の明滅、雑踏のさいめき、なやましい胸をマントの下に抱くやうにして、公二さんは銀座の街の並木の下をふら〜と歩いてゐました。

歩きながら考へてみると、公二さんはつく〜自分ながら自分が惘然でたまりませんでした。それや若いんですもの、自分だつて出来るだけの快樂や華やかさを望みます。然しながら「犠牲」だの「偽善」だの「虚榮」だの「ミリュウ」だのと云ふ大きな手が、常に頭上をおさへてゐて自由な活動をゆるしません。挺身して自ら享樂し陶醉し得る事が出来ま

せんだ、からむしろ徹底した遊蕩兒の群が、美しく思はれて仕方ないでした。

が、ふと我に返りますと、穴あらば這入りたい様な氣持になりました。勉強だ！ とそれからまつしぐらに邸へ歸りつくや否や、袴も脱らす帽子も冠つたなり本箱をあけて参考書を引張り出してゐるところへ、お千賀さんがあはてふためいて電報を持つて來ました。受取らうとする手も渡す手も、ぶる／＼震へて仕方がありませんでした。

果してお母様が重態と云ふ報知でした。公二さんはもしこれを齎した人がお千賀さんでなかつたらいきなりこん畜生めと撲つたかも知れませむ。青い切手の眞二つに裂かれた柔かな電報紙を膝にのせて見つめてゐるお千賀さんの眼にも、逆しらぬばかりの涙が充滿でした。公二さんは

夢中で郵便局へ飛んで行つて、打返して容體の問合せやら、けたゝましくお兄様のところへ電話をかけたたり、お父様へ電報を打つたりしました。

これで母が死んで見ろ、殆んど兩親を失つたも同様なこの憐な四人の同胞は如何なるのだ。妙齡の妹を如何するんだ。自分と母！かう思ふと、どうしても自分は自分の爲に生在してるのだなんと云ふ考へには到底なれない。おれは母の爲に生きるんだ。母あるが故にわれあり、われあるが故に母があるのだ。おれが中學に入つてからの母さんの苦心！

おれは親不孝な人間だ。然しこの事に考へ及ぶと自分は必ず偉くなつて安心さしてあげねばならぬと思つてゐた。人から見たらば極端な形式主義な奴だと思ふかも知れぬがさうだつたのだ。

母が死んだらおれは如何したらよからう。おれは妹達や涼子さんに

「死」と云ふものがあるなどと考へたことはまだないが、母について、常々から不吉な不安におそはれる。それは勿論艶々しい腫や丸々と脂肪に富んでゐる若い女から直覺的にその人の死を思ふものは誰しもあるまいが、母の様に苦勞に壓倒されて了つた瘦せた肉體を見ると、悲哀を感せずには居られない。

先日柏木に行つたときも、涼子さんと夫人は口をそろへて、

「御勉強して母様を安心させておあげなさいな。仲々孝行は出来ないものですから、御丈夫なうちになさい。亡くなられてから悔いても仕方ありませんよ。』

と云はれた。實にその通り自分だつて孝行したいものだ、せねばならぬと思つてゐるけれども——心の内ではどんなに希望してゐたらう、どん

なにあせつてるだらう。然しそれが出来ないんだ。おれは泣きたくなる
不甲斐なしめ！ 最後におれを導いてゆく所は何處だ。

野分の木の葉が風にまかれて廻るやうに、公二さんの頭は旋廻し出しました。座つてゐる壘がせり上つて、自分だけすん／＼地底へ沈んでゆくやう。飛び立つていきなり電燈をひねると、あとは暗闇！ 公二さんは頸窩を抱えて思はず、お母アさん、神さま、と叫んだのでした。

五八

大阪へはお兄様が急行されました。

が、其後は幸ひにして病人も持ち直して、一日増しに快く、回復期に入つたとの吉報ばかりがありました。

秋晴の空は實に瑠璃のごと高う澄んで、庭前の楓の紅みが燃るやう。

吹く風も枝を鳴らさず、小鳥は聲高に秋の歌を頌してゐます。そこに自由があるんだ！と思ふとこの日頃籠り勝にしてゐた公二さんは一時も早く戸外に飛び出して大口開いて呼吸してみたくつて堪らない。郊外にでも誘はうと孝さんに電話をかけて見ますと、孝さんもおかあさまが御病氣でこの頃逗子へ轉地して居られる。で、今日はこれからそこへ出かけるところだとのことなので、二人は期せずして連れ立ちました。

逗子の櫻山は雑木林が黄金色に染まつて、満山錦繡の様に午後の陽に輝り榮てゐました。あらゆる夏季の別荘は今は大方向を閉ちて、籠も壊れ庭も荒れ、たま〜人の住む家には病人のものらしい華美な色彩の布圍などの二階の欄干に干してあるのが僅に單調を破つて、それが更に一

層の寂しさを増すのでした。

今年の一月公二さんは孝さんと二人で、敗残のからき生から自分を救ひ出す爲に、陽も沈む夕つ方を冷い凍るやうな雨交りの風にふかれて此地に下りたことを思ひ出しました。あの時分はほんとうに煩悶してゐましたつけ、そして森戸の神社の處で一晚泊つて千鳥の歌に耳を傾けたのも、今はたゞ一挿話としての記憶のほか残つてゐない。もうあの様な熱情も今はない、觸れれば流れる様な紅い血も色褪せてしまつた。ヴィヴな血管の鼓動もしない。

清らかに白く痩せたおかあ様は、それでも病床の上起き直つて幼い人たちを膝下に集めて、いろ／＼なお哢をさせ乍らにこやかに笑つて居られました。場合が場合故身に引きくらべて、公二さんは胸が一ぱいに

なりました。孝さんの兩腕にはどれほどの重い責任がかゝつてゐるか、そして人よりも特別に繊細な友の身體を思ふとき、公二さんの眼には人知れず熱い涙の溢るゝを覺えました。

立派な家に生れ偉い父を持ち愛しい弟妹の多くと美しき戀人を有する友よ、君はひたすらに惠美子さんの楽しい戀の夢にのみ耽つてゐるがその中にこの君の母、優しい病める母の上を思はぬであらうか。はたまた母を失ふたなら、この可愛い弟妹達はどうなるであらうと君は考へぬであらうか。成程戀は總てである。われらは若さを欲す、歡樂を望む。戀の爲には親もない兄妹もない！これが自分達の理想であらうか。が、強き友よ、僕にはそれが出来ないのだ。

枯葉のそよぐ蓮池にかさこそと夕風が渡る。磯邊の秋もわびしい。暮

れゆく縁の柱に身を凭せて、小兒達の嬉戯の聲を背後に聞きながら、公二さんの感慨は無量でした。

五九

涼子さんが夫人の代理に、お留守見舞に來てくれました。

折あしくと云はうかよくと云はうか、二人の妹さんは打揃つての外出中でしたので、御主人役に公二さんは獨りまごく。しかし出來るだけの禮儀をもつて迎へました。

涼子さんは桃割に結つてゐました。青磁色に紅葉の刺繡模様の半襟が黒地の縞お召を一層意氣に見せて、金通しの白茶地の帯をいつもの堅矢ではなくお太鼓に締めたのも大變大入びで見えました。二階の廣いお座

敷で、暫く二人は話しました。無論話題はお母様の事ばかりでした。

「涼子さん、母は大病に罹つて實に生きるか死ぬかの境だつたんです。

涼子さん、母が死んだら僕は如何しやう……そんなことがあれば僕は死の宣告をうけたも同様です。否、それよりも一層苦しいかも知れない。

僕は今迄母の爲に生きて來たんです。涼子さん、家の母は若い時から異郷に旅立ちして、下僕女中と同じ生活を經て來た。そして餘りに苦勞をし過しました。僕の爲に兄の爲に父の爲に。

僕の十四の年に父は——勿論その當時の種々の事情があつたからですが、僕を百性にして縁家の一人娘のところへ婿にやる考へでした。母はそれを悲しく思つて極力反對した。父はひどく怒つたけれども、

たつた二人男同胞を手許において思ふ充分修業させる事も出来ないで
は、あまりと云へば親甲斐もない。

そこで母はそれまで使つてゐた女中を解雇して、僕を中學校へ入れて
くれたんです。僕が郷里から虎の門の邸へ出て来た日から、母は朝か
ら晩までお臺所に引きこもつて立働かなければならなかつた。

僕は本能的に母の爲に勉強せねばならないと思ひ泌みて、何等の不平
反抗がなかつた。早く偉くなつて母に安心させやう、ただ一圖にかう
考へるのでした。母の爲の希望、母の爲の努力、僕の生活はさうだつ
たのです。従つて生そのものに對する煩悶もなかつた。

それなのに今母に死なれて御覽なさい。僕は生きる對象、努力の目的
がなくなつて了ふではありませんか、僕は運命のあまりの強い打撃に

泣くにも泣けなかつたのです。」

「だつてそれは止むを得ませんわ。人は親でも同胞でも死ぬ爲に生きる様なものではありませんか。もし貴君のやうに論じてゆくと、すべての人は自分の生の対象を失つたときには死ななくちやならなくなるぢやアありませんの、昔の殿様と近臣の様に。人生といふものはそんなものとは思はれないの、利害から打算した人の群、それが社會ぢやアないのでせうか。理屈はともかくとして……」

「いや僕は社會全體を標準にして論ずるのではないのです。そして他の人はいざ知らず只自分と母、かう狭く考へて見るときに……」

「まア待つて下さい。——現代の青年で貴君の様な思想を持つてる人はごく少い事と思ひますわ、そして貴君は幸福でもあり、又不幸ですわ。」

なせつて……私が恰度そう云ふ状態にあるのですもの。」

「然し涼子さん、僕は繰り返していふが社會全體の人が僕の様な思想を持つてるといふのではない、僕は極く狭く僕と母との間についてだけの事を云つてゐるのです。僕は田舎の百性に埋れなければならなかつた

——その處を今の母に救はれた。自分の好きな學問を修める事も出来る様になつた。僕は知己を得たのです。人生意氣に感ず、功名また誰か論せん、僕は自分の名譽榮華、そんな事は少しも思はなかつた。ただひたすらに母の心安めん爲と十餘年の長い年月、一生懸命に勉強した。理屈は少しもない、ただ母の笑顔見ん爲にでした、——極めて果敢ない努力！と罵る人があるかも知れない。

その自分を理解してくれる人が危ふいというんだ、かう考へるときに

努力の綱のフツツリと切れるのはあたりまへぢやないですか。人は己れを知る者の爲に死す、僕は母の病氣が氣になつて……本當に仕事も何も手につかなかつた。」

「それでは代りに自分を解してくれる人を見つけたらば——又努力の意味が出て来るんですか。お母様がおなくなりになつたとして——假定ですよ、貴方はお母様の事なんか忘れて了つて、新しい知己の爲に生きて行かうとなさるんですか。そうすると自分を知つてくれた人の爲に生きると云つても、それは非常にアルビトレールなものですわね、貴方も利己主義な方ね。」

「然し涼子さん、僕はあまりに世間を見ないからかも知れないが、母の外には自分を理解して呉れる人は一人もないと思つてゐるのです。」

「嘘です。……嘘だといふことを貴方は知らないんです。いゝえ知つて
ゐらつしやるんです……。」

と矢庭に俯伏した涼子さんの桃割は、公二さんの膝の上にありました。
公二さんの顔は蒼白でした。云ふべき言葉も知らぬやう、ただ唇が顫へ
てゐました。眼には涙が充滿でした。

やがて低いけれど凄じ、そして感激の調子を帯びた公二さんの聲が聞
えました。

「涼子さん、貴女は僕の爲に「何處へ行く」のロシアになつて下さい。

今の場合僕を救ふものは貴女の外にないのです。……」

かう云ひかけた時階段を登る静なスリッパの足音がしました。お千賀
さんが歸つて來たのでした。公二さんの勇氣は俄に頭をもたげて、ムド

コン河を渡るべく一躍馬首を汀に進めました。涼子さんは渡された手紙を、そのまゝ無意識に温い懐の奥深くおし入れました。殆んど突盛の間だつたのですもの、お互に何を考へるひまもなかつたのです。

いお千賀さんが座に現はれてからは、黙りん坊の公二さんがほんとに不思議なほど多辯で快活でした。この場の様子を覺られまいとする姿勢だつたのですれど、かへつて怪しまれて眼を大きくして、

「まあ涼子様、うちの兄は如何したんでせう。平生あの沈黙家のくせに今日のこの御機嫌は。」

「あらー」

と云つたまゝ涼子さんはほつと紅くなつて俯きました。

「僕はね、涼子さん、貴女が来て下さつたので、それがこんなうれしい

いんですよ。』

そんなことを云つて笑ひ乍ら、歸途をば兄妹して電車の停留所まで見送りしました。空は厚い雨雲に蔽はれて陰氣な夕方でしたが、公二さんの心は絶對に明るく、満足しきつて幸福に別れました。

家へ歸ると、

『お嬢様、涼子様はお美しうございますね。』

小間使の濱がお千賀さんの脱捨を仕末しながら、さも感心したやうに話しかけました。

『それや美人よ、我輩の戀人だもの。』

公二さんは畳の上に寝そべり乍ら、臍の緒切つて以來始めてのこんな戯談を口にしました。が、お千賀さんは聞えませんと云ふ様な調子で、

せつせと着物を着替てゐました。涼子さんとお千賀さんとは、さう氣の合ふと云ふ方ではありませんでした。

六〇

おれは涼子にいよ／＼自分の戀を告げた。それに對する最後の意見を求めた。あとはたゞ運命の神がよろしくやつてくれる、とわれから呑氣にかまへてはみたものゝ、矢張り心配になつて堪らないので公二さんは漸之助さんの處へ遊びにまゐりました。そして昨日ありし事件ども語るうちにこの友は、君、それはいけない。極めてまづい手段だつた。やがて來るべき成功？を自分の手から破るやうなもの、もし彼女が君の申出を待つてましたと云つて直ぐに容れてくれるのならばこの上もないこ

とであるが、或は彼女は君の告白によつてかつ驚きかつ嫌惡の念に驅られやせんかしら。さうすると君は自分で自分の未來を呪ふことになる。餘程うまくやらないと、と云つてくれました。が、公二さんは頭をふりました。

『それは元より結果といふことを考へては出來ぬことだ。結果は眼の前に見えてゐる。すべてがおれに不利なんだこの不利を歴々と見てゐながら、敢てするおれの心を知るならば、直ぐに仔細はわかるだらう。』とせか／＼眉をこすり乍ら。

「新之助さん、僕と涼子とはたとひ僕等の戀が順潮に進んでも、結婚が出来る身の上ではない。戀と結婚、これは目的を異にしてゐる。戀は必ずしも結婚の爲の戀ぢやない。また君の意見とは反對かも知れぬが、

僕は戀人の肉體の占有、握手、を戀愛の要件としてない。他の人は精神的戀愛では満足が出来ぬと云ふ。肉體の結合を要求するに至る。が、一度その満足を得たときが戀愛の最上でその黄金時代であらう、と同時に下り坂であらねばならぬ。人はお互に戀人を自分のものにしたその瞬間から、今度はそれを失ふまいと悶える。嫉妬をする。肉に囚はれて了はねばならぬ。怒り、惡み、嫉み、嫉み、人殺し、すべての罪惡はこれに根をおいてゐる。

僕はあくまでも精神生活を根底とした生き方をしてゆきたいんだ。それが僕の住む世界なんだ。その上に涼子はまだ肺病が癒り切てゐない。十四の年から取つた病魔が、折にふれては彼女を難ます。肺病の人が妊娠すれば命を奪はれると云ふではないか。

「僕等は結婚は出来ない。そしてしないつもりだ。それなのに僕は僕の告白をした。涼子に僕の戀を容れてくれと願つた。何たる矛盾！ と人は云ふ。

然しそれは彼女から拒まれたいからだつた。そう云ふと益々わからなくなるだらう、が、實はかうだ。彼女からはきつぱり拒絶されたら、いさぎよく斷念もすることが出来やう。お互に愛し合つてる間は別れても思ひ切れない。

僕の氣象として結果を見なければ承知が出来ない。僕は總ての理論は結果を條件としてのみ認める事が出来る。僕は經驗派です。理論そのまゝに理論を承認する事が出来ない。涼子が家庭の事情から必ず僕を拒むであらうと心のうちに思ひ乍らも現實に拒絶されない間は安心(?)が

出来ない。僕は告白をした、拒まれたい爲に……。あまりに愛せられて
ゐた彼女の家庭から拒まれる爲に……。」

「公二さん、それはおかしい。」

と新之助さんがさへぎつた。

「君は涼子さんを愛してる。そしてその愛は神に對する畏敬、父母姉妹
に對する親愛、自分より偉い人に對する憧憬の心だと云つてゐた。そ
れだのに……何故今度のやうなことをしたんです。それぢや君はあん
まりなエゴイストと云ふものだ、君の理論からゆくと、自分の苦惱か
ら免れる爲に告白をした、なんと云ふことだ。チレンマに立つた彼女
がどの位苦しむかはつきりと知つてゐながら——。それが理想家の
君の執るべき唯一の道だつたらうか。」

「新之助さん、僕が悪かつたのです。僕はそれを知つてゐる……知つてゐる……知つてゐながら告白をしたのだ。

然し決して涼子が憎いからではないんだ。苦しめやうなんてそんな卑怯な心は微塵もない。たい苦しまぎれにやつたんだ……。僕はあの時告白をしなかつたなら、どんな事をしたか知れやしない。死！ それも恐ろしかつた。そして告白が唯一の薬だと思つたんだ。が、その薬がまだ呑み切れないうちに僕は悔い初めた。涼子が可愛想だ。おれは獨りで部屋の内凝つとしてゐられなくなつたから、君にあひに来たんだ。如何したら可か……」

「公二さん、それは君がね、自分の作つた繩で自分を繋るといふ奴さ、商鞅と同じ運命に陥つたのさ。」

戀を單なる愛——精神上の——聖く麗はしい憧憬の念と思つてた。それが君の持論だつた。そして君は肉を却けた。戀に肉は不必要である。ところがそう問屋はうまくおろさないさ。君は自分の説を貫く事が出来なくなつた。そして節を折つて告白した、肉を求めた……」

「否、否、新之助さん、それはちがふ、そんな事。僕には肉は不必要だ。たい告白をすれば自分の重荷が軽くなれると思ひ違つて……」

「いつまで何を云つて居るのだ。もうよし給へ、つまりあまりに高尚過ぎる自説に服従出来なくなつたんぢやないか。世間的戀の前に降伏したのだ。」

公二さんは耳にも入れず、

「さうだ、涼子さんはどんなに悲しむでるであらふ。おれにはそれが堪

えられない。謝罪に行かう。行かなくつちやならない……」

「公二さん、君はどこまでお目出度く出来上つてるんだい。謝罪に行く——誰に？ 馬鹿なことを云ふもんぢやない。涼子さんにあやまる前に、先づ自分自身にあやまり給へ。今まで間違つた説を守つて頑張つてゐた事を。」

「さうかなア。」

柔順にしかし浮の空に引き据られた公二さんは抑へがたい惱ましさに思はず掌を額へ持つてゆき乍ら、顔をあわれに引き歪めました。

六一

終に最後の日は來ました。霹靂を打つて公二さんの耳に雷霆と響さま

した。来るべき日は遂に來らねばならぬと、薄氷を踏むが如き思ひでど
れ程これ待つてゐたでせう。

私の可愛いへびーさん。

お母様が病院からお歸りになるのですつて。あんまりお菓子をおね
だりしてお腹を損してはいけませんよ。

私は貴君のお手紙を一字残らず讀みました。私は悲しい、此様な貴
君の本心を知つたからです。

可愛いへびーさん、私は無邪氣なあなたを愛します、そして永久に
愛したい。然しあなたのほんとうの心を知つた今は、わたしとあな
たとの間に怪しい隔てが出來ました。私は今迄と同じ心を以つてあ
なたに對する事が出來なくなりました。それがかなしい。あなたが

さうしたのです。

あなたはゲーテの「ツエルテルの悲しみ」をおよみになつた事がありませんか。私の今の境遇は恰度ロツテそれ自身です。私自身は彼女の美しさはない。けれど最早定められた運命に従ふの外ないのである。

お庭の山茶花が白く咲きました。私はあなたのお好きなあの花を見るにつけてもたい無心の昔が思はれて慕はしうございます。そして悲しい。

お友達は修學旅行に箱根へまゐりました。私は書齋でまる一週間といふものを思索にふける事が出来ました。あなたにお返事する事が出来ました。

お正月にはお妹さまと是非お遊びにいらして下さい。

あなたの涼子より

ペビ―坊様

かねて期したる事ながら公二さんは、氣も絶々になつて半時ばかりは仰のけに打倒れたまゝで居りました。

ロツテはウエルテルをすてなければならなかつた。否、ウエルテルはロツテを思ひ切つて死ななければならなかつた。アルベルトがある限りは。それも明白にロツテから拒けられなかつたウエルテルはどれほど自れと自れを苦めたであらう。ロツテに『わたくしには歴としたアルベルトさんがありますから、お氣の毒ですが貴君には。』とことわれるウエルテルよ、若い男は幸であらうか不幸であらうか。

彼女は初めからおれをベビー坊と呼んでゐた。そして全でベビーの様に可愛らしい人だと思つて交際してゐた。然し無邪氣なベビーと思はれてゐた若い男は、ウエルテルの悲しみに身を殺さねばならぬ程難むのであつた。遂に堪かねて最後の告白をしたのである。

三月以來通じよかしと努めた誠心は遂にロツテには通じなかつたのだと彼女は云ふけれども果して如何かしたら、ロツテはそうと知りながらウエルテルの感情を弄したのではあるまいか。お正月には遊びにいらつしやいと。彼女はアルベルトとの仲を見せつける爲か。いくらお人よしのベビーさんでも……公二さんは子供の様に大聲をあげて、頭髪を掻きむしつて泣き喚きたうございました。

けれどもよく自分の未來を思ひ陸上を思ふときに、徒らに失戀に泣く

ことは出来ませんでした。公二さんはむつくと起きて、今一度最後の手紙を齎して決心しました。

六一

公二さんは長い手紙を書きました。東京二番の頃の生活から北海道の旅行、さては三四月以來九月迄の経過を委しく記して最後に、われは君をわすれじ。人は申します、戀は性慾と相伴はねばならぬ。戀の目的、結果は同様であらねばならぬ、結婚であらねばならぬ、然らずんばそれは遊戯的であると。

然し私は思ふ、戀の爲の戀、それは存在せぬものではない。私は一度貴女が既に夫となるべき人がある身であるといふ事をきいて、非常に悲し

く思つた。然し私ほもとく貴女の心身を占有しやうと云ふ考へは持つて居なかつた。だから貴女があなたの夫となるべき方と結婚なさる事を私は少しも羨しく思はぬ、むしろ貴女の幸福を願ふのです。たゞ私は貴女を戀する事をやめないばかりです、と書き加へかけて筆を投げました。

滿一ヶ年の追憶は灰色、紫、紅の糸もて綾と織り出され種々の模様となつて頭腦を眩惑させます。自分の出様が今少し早かつたら、——せめて高等學校の一年頃から彼女を征服することに力めたなら……とも思ひますが、然し公二さんが馬力を出し初めた頃には、彼女ははや許婚の後であつたと人は申します。よくはわかりませんが夫人の言葉つきやらその態度から推して考へて見ると、成る程左様だつたかとも思

ひあたります。それにしても涼子さんは、あの時分から人の心をよく知つてゐるくせに、知つて、おれを弄したのか、女と云ふものは實にわれ／＼の到底敵する事の出来ぬものだ、と太息を吐きました。

六三

けれどもその後涼子さんから泉子さんにあてられた手紙の一節こそ、また公二さんの心を新らしく攪亂すものでありました。

私ほんとうに／＼うれしくてたまりません。昨日小森先生からお兄様の御近況を伺ひましたの、宣教師のステツシユ様も大變ほめてゐらつしやいました。あの方はきつと熱心な信者になられるでせう、神様からよほど恵まれた方だと思ひますつて。何卒これからは明る

い道におたどり下さいまし、私の心から御願ひいたします。さうすればこんなうれしいことはございません。あなたの御兄様はお母様が大お好きでございます。その大すきなお母様に御心配をおかけしないのが第一でございます。もし御兄様が生涯神の御導きによつて正しい道におすゝみ遊ばしたなら、御本人ばかりではなく皆々様まで御幸福だと存じます。どうぞいたらぬ私の言葉でございますけれど、おさく下さいましたなら私の限りなきよろこびでございます。私はこの頃こんな事思つて居ります。

生意氣なこと申して御笑ひにならないで下さいまし。でもこれから散々苦しんでと思ひますの、十字架を負つてけはしい路をたどりませんでは。

どうぞこの旨お兄さまによりしく御傳へ願います。

涼子様はどうなすつたんでせう、こんな事を、と不審さうに泉子さんから其文を見せられたとき、公二さんの胸はどれほどひどく波立つたでせう、斷乎たる絶交状をこそ豫期してゐたものを！ 人の好い人間はすべて物事を好意的にのみ解します。彼女は正しく戀以上の大いなる愛によつて自分を救はんとしてゐるのである、と公二さんは更に感激と發奮の涙に咽ばざるを得ませんでした。

六四

その以前から公二さんのお兄様はお父様と意見が合はずに、いろいろな事情から家を出て下宿屋の二階に轉がつてゐました。そして心の淋し

さや憂悶をまぎらす爲に、はかない生き方をして居られました。彼奴、酔ひとれめ、秀才の末路、こんな陰口も聞えて、長上、恩師、先輩の間の評判は甚だよくありませんでした。

公二さんはそれが悲しうございました。でこの頃の自分にはお兄様の立場がだん／＼理解されて來るのでした。抑へ得ぬ胸の惱みや痛恨をかくす爲には心にもない行爲や、自己を欺いて空虚な生活をも敢てして行かねばならぬ人達に同情の涙を惜しむべきではない。

僅に自分の不平、不満、反抗の念を満足させる爲に、親の情同胞の愛をもすて、世間と云ふやつ批評も顧る暇のない……敗殘の兒に今は自分をも見出しさうだ。

さうでもしなければ氣が狂ひさうなんだ。何と云ふ不甲斐なさなし

だ！

けれども公二さんは自分のそんな考へを、老いたまへる母君の前に晒け出すには堪えられませんでした。自分は母の心配の種となるとも力になる事が出来ぬ、と落涙しました。が、駄目でした。断然自分も家を出やう！

さう思ひ定め乍らもまだぐづぐづと決行しかねてゐるところへ、孝さんから葉書が来ました。かねてさう云ふ心當りがあつたらばと頼んでおいたからでした。

公二さん。

私は貴兄に氣持のよい部屋を見つけたのです、それは四谷見附に近い、ある大きな奥深い洋館の一室です、持主はカトリックの宣教師

です。何でも眞面目な人に貸して上げたい、——殊に帝大生にとの事ですから、私は今の貴兄にはあの僧院の生活が最もふさはしいではなからうかと一寸思ひつきましたのでおしらせ致します。これに定めやう、と飛び上つてすぐ公二さんは交渉に出かけました。

六五

最初この別居問題についてお友達はみんな云ひました、止せ！と。然しかうと思ひ立つた事は結果を見ないでは承知の出来ぬもの、そう云はれると獨更やつてみたくなる。

妹が可哀想ぢやないかと新ちやんは云　しくれました。成る程さうだこんな事情から兄貴達がみんな居なくなつたら、可憐な妹たちはどれ程

心細く情なく思ふだらう、と思ひ返しても見ましたが、矢張り駄目だ、どうせ兄と妹は決して一致することの出来ぬ運命をもつてゐる。お互の胸裡を少しも解せず傍に居たからと云つて何になる、と断然思ひ切つて僧院へ移ることにして了ひました。

初めの程は何となく落ちつきがなくなつて朝も早く眠がさめ、勉強も出来ませんでしたが、一日二日と經つにつれて非常に居心地がよく、それは雜風景な一高の自治寮の比ではありませんでした。緑色の卓掛や白塗の本立の配置もよく、青い海と髪の長い女の繪額をかけたたり、ベイズに眞紅な花を挿したり、アボロの裸體像を飾つたり。來訪の友人達はびつくりして、

「アージ、ゼット、コム、アンブランスタン、ゾオートル、シャンブ

ル、ネスパー（まるで皇子さまの様だ）

と叫びました。公二さんも内心得意で、いろいろ装飾品の置きかへに苦心したりしました。

が、直きにそんな事もつまらなくなりました。用事があつてたま／＼歸郎する度に泉子さんは、お兄さま泊つてらつしやいなとせがむ。マントの袖に取りついて甘へる。お千賀さんはお千賀さんで晚餐だけでもと引きとめて、効々しい心づくしのお手料理が暖い茶の間の團欒の卓上に並べられる時など、おれだつてどれ程めたからう、と落涙するほど心弱くなつてゐる公二さんは、わざと強面でしりぞけました。それがせめてもの果敢ない虚勢なのであります。

そのくせ僧院に歸ると寂しさに堪えられずなつて、救ひでも求めるや

うに卓上たくじょうに打伏うちふして、泉子いんこさんの名なを呼よぶこともありました。

「泉いんちゃん、僕は矢張やっぱりお前まへが一番可愛かわいいよ。戀人こいびともいらぬ、女友達をんなともだちもね。二人ふたりは仲なかよく暮くして行ゆかう。戀こひなんかもうしたくない、いや出で來きさうもない。しかしその妹いもうともやがては人手ひとでは奪うばはれなければならぬ

い。」

六六

公二きみじさんは日々ひび四谷見附よつやみつけから甲武線かぶせんの電車でんしゃで通學つうがくしました。それが計はからずも涼子りょうこさんに遇あはせる機會きかいをつくりました。

花電車はなでんしゃなどと呼よばれて青春せいしゅんの男女學生おんなおとこがくせいを溢あふる、ばかり載のせてあるこの電車でんしゃは、朝あさは殊ことに見附邊みつけあたりで混み合あふ。そうして毎日乗降まいにちのりおりする人は大概たいていき

まつてゐます。場所も時刻も。女では三輪田、雙葉、跡見、お茶の水、佛英和、男では帝大、早稻田、高商、一高！ その中に公二さんも涼子さんも交つてゐました。

初めての朝でした。何心なく乗込まうとした公二さんは、チラと車内に涼子さんを見つけました。焦茶色の毛皮のボア、渦巻模様の紫銘仙の羽織。はつとたぢろいで立ちすくんだ瞬間、全身の血が逆流するばかりの面眩さと憎さの念がむら／＼こみ上げたのであります。はたと視線の衝突した涼子さんは、あわてて面を伏せました。

公二さんは胸の鼓動の烈しさに、暫時は四邊が眞暗になりました。ただ辛うじて柱に倚つて立つてゐることが出来ました。無論その電車はやり過ぎてしまひました。

彼日の會見こそ最後の日よ。われはソリチエードの生活に入りてひたすら學びの道に身を委ぬべきぞかし、われはただ彼女に劣らざるやう心がくべし。最早彼女を見じ、その父を見じ、母を見じ。若しわれにして彼女の家門に訪ふことあらば、これわが最後の日よ。否、死すともまた何をか彼女に云はんや！ かうしたけなげな決心はたつた一度の涼子さんの出現によつて破られました。

歸途にもまた、成るべく圖書館で時間を過すやうにしても、丁度涼子さんがいろ／＼なお稽古をすまして水道橋から電車に乗るのは、もう灯のちら／＼點きはじめる頃なので、よく同じ車に乗り合せてしまふ。そんな場合公二さんは男子としての禮を欠くことを恐れず常に挨拶だけはしました。そして冷汗が腋の下に湧きました。涼子さんはいつも恥かし

げに顔を染て、お友達の間から會釋を返します。

最初のうちはそれが非常に恐ろしうございました。四谷見附で下りるともう後も振り向かず、物にでも追はれた様に一散に石段を駆け上つてしまふ。

然し次第に馴れて公二さんはこの事に興味を持つて來ました。どうかして涼子さんを見なかつた日は、苛々と物足らなさに堪らなくなりまして。不可抗の力にでも引きずられるやうに、自然と足はそちらへ吸ひつけられてしまふ。どうしてもその引力から免れることが出來ませむ。よしつ、自分は毎日彼女を見やう、と力み返りました。

時にはメートレスとつれ立つて歸る涼子さんの姿を見出すこともありません。折柄の西陽がラチアンな光りをその美しい面輪に投げますと、青

春の直潮はぐねつと双頬に上つて、そこは紫の悦び躍つるやうに見えます。その傍にグレーな先生の貌がさも若い女に向つて、そんなシャルマントな風をしてはいけませんと云つてる様で、公二さんにはそれが癪に降りました。貴女は若い間に戀と云ふものを味ふた事がないのですか？ つて訊きたい程に思はれました。涼子さんは公二さんの横顔を恐るゝちつと見つめます。公二さんは面をそむけて勝誇つた風にペーヴメントの上をあちこち歩を移す、憎いほどおちついて。そんな場合の氣持——實になんと形容してよいかわかりません。

六七

僕は君が寂しいだらうと思ひます、と云つて友人達によく慰藉や激勵

の手紙を寄せました。公二さんはその友情が身に沁みてうれしく、今までもよくみんなおれに愛想をつかさなかつた、と今更の様に耻ぢました。自分は毎日涼子さんのことばかり思ひつめてゐた時分、みんなの厚い深切に對してどんな態度を執つたかと思ひますと……。

孝さんからはこんな事を云つてまゐりました。

近頃は君と顔を合せる機もなかつた。多分朝から晩まで圖書館の内
でフランスの小説を読んでゐた事と思ふ。ユーゴのノートルダム
ドバリは如何でした。

それでもどちらつかずにぶらくしてゐる私、家の人達にも全く信用
を失つて終つた自分を省みて、内心君が羨ましい。

君も案外悲しいことを云ふ。淋しさは戀の常素である。われ獨りな

りと思へば力強くもなりません。われ二人なりと思へば悲しさ寂しさがついて来るのは初めからの覺悟ですもの。然しその淋しさ、悲しさは單なるものではありません。絶対的のものではない。楽しい悲しさ、華やかな寂しさである。それはサロメの口に塗れた苦味です、その苦味の中に麗はしい光りを認め今それにバツカスの歌を高唱しつゝ進まふとして居られるのです。裏切られる恐れがある？然しそのときこそ私達は眞の孤獨といふ事を自認し自確し得るものと思ふ。そして勿論反抗の心が他所から侵入して來ます。それでも自暴自棄に陥入るには尙早いと思ひます。私は思ふ、この時こそ私達の立脚地をたしかに明かにきめなければならぬ。私共は眞に檢められた自分の胸の中に自覺の歎びのコーラスを聞く事が出來ませ

う、そこに信仰が起りませう、永遠に對する憧憬と努力とが生れま
す。

犠牲！ すべての進化になくてならぬものです。私は美しい牧歌的
な物語をきいた。

昔、昔、山國に王があつた。黄金と銀の大鐘を造つて山から山へ美
妙な音響を響かせたい！ 彼れの望みはあまりに大き過ぎた。

鐘の鑄造を仰せ付かつたその國第一の老匠は幾度か失敗した。それ
が當り前である。が、王は怒つた。これが最後の試みぢやぞよ。

鑄物師は覺悟をした。

鑄物師に一人の娘があつた。年は十六、美しかった。神にお祈りを
献げた。神の御告は『そなたの死によつて……』とあつた。神様も

悪戯好きなきな奴さ、昔から人身御供といふときつと美女だ。美人を嫌ひなものはないと見える。

最後の試みの日は来た。とろ／＼する黄金の液、老匠は震へる手から銀の溶爐にそれを流し入れた瞬間、娘は身を躍らして飛び込んで溶爐の中に溶けて死んだ。

美事に鐘は出来上つた。音は玲瓏として山から山に響き渡つた。鐘は美事に出来上つた。

犠牲はすべてに免れがたい。それは進化の要素である。我等はその結果を汲み取る事を忘れてはならぬ。

夢の様な三年の生活、その間に君から貰つた手紙、涼子さんとの戀の記念の手紙を私はすべて焼き棄てやう。

その煙よ、重き戀の荷を背負ふたかるい薄紫の煙よ。さらば！

孝　よ　り

公　さ　ん

六八

女の子は十六七になると餘程注意せねばならぬとある先輩が云ひました。なるほど乙女の羞恥と云ふものは年とるに従つて一枚一枚紙をはがすやうに薄れてゆくものらしい。そして微妙な初々しい心はなくなつてひしろ異性に近附きたい、自分の可弱い力で男を捕えたいと云ふ様な一種の好奇心が出てくるものらしい、と公二さんは思ひました。

あなたはお麗さんが好きでせう、家のお姉さんがさう云つてよ、とま

だ十になつたばかりの小雪ちやんが云ふ。公二さんは驚いて雪ちやんの顔を見ました。そのお姉さまと云ふ君子さんも未だやつと今年女學校の三年生で十六なのであります。女の子と云ふものは表面ではあたし男なんか……といふ様な顔をして、そして密に殊更に注意を拂つてゐるらしい。公二さんは別段これと云つて君子さんと話をした事もありませむ。遇へば君子さんの方から澄ました顔をして他所へ行つてしまふ。しかし先日一高の記念祭のとき、公二さんはお麗さんやそのおかあ様と一緒にありました。そして君子さんにも群集の中で逢ひました。その後公二さんがお麗さんの家へ行きますと、

「ねえ、貴方君子さんの所へ遊びに行く？　あたし君子さんに聞いたら否、些とも来ませんと云つてましたわ。」

と意味ありさうにじろ／＼見ました。女の子と云ふものはこんなにも嫉妬心の強いものかといやになりました。これを戀の變態と云ふなら公二さんは大變艶福家なわけですけれど、さうまで深い意味はなくつてもまあ一人の男が二人の乙女を知つてるとすると、二人の乙女は相互に、その男の事については何にも知らない様な様子をする、しやうと力めるものです。一人の女性の前に二人の男が立つときは、その男達はつとめて自己廣告の競争をやりますが、乙女達はその反對であります。

お麗さんのおかあさまは近頃それとなしに、家の赤ン坊ももう十七になりました、と口癖に云はれますが、公二さんは矢張りまだねんねの様な氣がしてゐました。それでも時々冷汗を流させるやうなことを云ひます。何でも涼子さんのことが餘程氣になつて堪らぬらしい。行く度に涼

子さんの噂が出ます。それによつてどれだけ公二さんの心が虐げられましたか……。

流石の公二さんにも乙女の心裡がうすく解かりかけて來ました。さう考へて見るとこれまでのすべての態度も泣き顔の意味もはつきり解せる。

四月に入つてからの或日、公二さんは孝さんを連れて訪問しました。すると従來白粉氣なしたつたお麗さんの今日は美しく化粧してゐるのに氣がつかしました。そして珍しく叮嚀にお挨拶しました。それは孝さんがゐたからかも知れませんが、公二さんはお麗さんが御挨拶なんぞしたのを初めて見たのでありました。

「公二さん、うちの赤ン坊もお化粧するやうになりましたよ。」

夫人はお茶をすゝめ乍らいと思想にお麗さんの方を見て微笑みますと
 あら、ひどいわお母さま!! と上臆を仄紅くして腮を襟にすりつけて俯
 向く嬌態が、見ちがへるほどつゝましく大人びて見えよした。

これは少女が成長する單なる一つの過程に過ぎない——と思ひ乍らも
 公二さんは、なほ非常に意味あるものゝやうに思はれてならないのでし
 た。女は己れを愛する者の爲に化粧する……何となく生存競争の悲哀と
 云ふことを感じさせられます。今迄は温室の裡に育くまれた花も、これ
 からは飾窓をかざる一鉢となつて競争壇裡に出なければならぬ。
 しかも装ひのなつた乙女はもう今までのやうに打ちくつろぎませむ。
 何故か近頃急に公二さんに對してまで「あたし知らないわ。」と云ふ様な
 風ばかり見せる。しつかり掴んでた指の透間からするくと砂の漏つて

ゆくやうな寂しみを、公二さんはどうすることも出来ませんでした。

六九

だん／＼學校の方が忙しくなつたので、戀なんかしてゐる暇がない。うそだらうと云ふ人もあるかも知れぬが事實だから仕方がない。世の中がせち辛くなるのも無理はない。否、世の中がせち辛いからかも知れぬおれは全く思想と云ふものから遠ざかつた。教科書以外に本一冊讀まぬ。朝起きてから寝るまでノート専心だ。そしてそれが面白いのだから猶面白。

大學に入るといやに俗化するねと人は口をそろへて云ふ。それでなくては駄目だ、おれ達は今まで麗らかな日林の中を詩集手にして歩めば、

美しの乙女が微笑んで寄つて来る。二人は相擁く、そして戀におちると云ふ様な甘い夢を見てゐたんだ。そして世の中もその通りと思つてゐたんだ。處が赤門をくいと、林の中を歩いてゐても乙女に會はぬ。會つても乙女は人の手に凭れてゐた。或は妻だの許嫁と云ふ鐵鎖に足をつながれてゐる。また他の乙女はすげなく脊を見せる。すべてがかうだ。

公二さんはさう云つて笑つてゐました。孝さんとても今は盲目的に恵美子さんを戀ひわぶると云ふよりも、少しは批評眼を以つて對手を觀賞し得る餘裕が出来。

「人は大人になると寂しい。」

など云つたりもしました。

無論公二さんもあれつきり柏木を訪ねませんでした。處が或時突然そ

の令嬢の母なる人が用達の序だと云ふことで、公二さんの家に立寄られました。公二さんは驚きました。でも挨拶に出ないわけにもゆきませんでした。

が、逢つて見ればなつかしいのは矢張り昔馴染の人でした。公二さんは柏木の庭の長い秋の日や春の宵の過ぎにし方を、思ひ出さずにはゐられませんでした。然し夫人の艶のよかつた頬はこけて、額には絹糸のやうな細かい皺がふえてゐました。年といふものは遠慮容赦なく烙印を皮膚の上におす。けどそれにしてもたつた一年餘の経過にしては、あまりにも衰へ方の烈しいことよ。何か大きな悲痛でも身のまほりを取りかこんででもゐるのでなければ。

夫人はいろいろ打明話をされました。それで公二さんは、今京都大學

へ入つて居られる御養子の曉さんが、常に夫人の心配の種を蒔いてるんだと云ふ事がわかりました。心一つに思ひあまつて、夫人は此家へ足を向けられたのであります。涼子さんはこの頃病氣勝に暮されてゐるさうです。あまりにもつれない曉さんの仕向けによつて!!

「歴とした許嫁の女がありながら、他の女に心を向けたりするものですから——狭い處女氣の嫉妬からですわね。」

夫人は情に迫つてそれ以上を云ひつゞけることが出来ませんでした。

涼子さんは懊惱の極、古い胸の痛みさへ覺え出しました。神經が極度に昂まると、やゝ狂的の行爲を免れない様な事までもする。それが聖人の様に父君を悲しませました。夫人は泣くよりほかありませんでした。涼子さんの心は切れない鋸で引かれるやうでしたらう。

「お母さま、この本にね、愛と云ふ字が二十五あつてよ。お父様に知らして上げるわ。」

「いやな涼子ちゃんね、そんな事どうだつてよいぢやないの。」

「いーえ、公二さんが有仰つたこと覚えてゐらつしやる。」

No Iivo is io Ione

私は愛と云ふ字を澤山數へるんだわよ。」

こんな取止めのない事を口走る。

「私^{わたし}がわるかつたのです。けれどももう七年前から許嫁の間柄ですから

……」

と夫人は手布を眼にあて、

「あんまり暁を甘やかしたのが却つて毒になりました。今の様な有様で

は行く末が思はれます。どつちか早く死ぬでせう、涼子は早く死にたいと云つてゐます。乃木さんみたいに私の家は断絶して終へば後に心残りはありませんが、娘を残して死ぬ事は出来ません。それが悲しい。」

と身を震はしてお泣きになります。

公二さんは心の底から苦しい吐息が出ました。夫人の前にひれ伏しました。

「僕は涼子さんに謝罪せねばなりません。涼子さんの氣に障るやうなことを耳に入れなければよかつたんです。どうぞ許して下さい。」

「否、いつかのお手紙のことですか。あんな事は若い人には有勝のことです。それに涼子と私との外には誰も知る人もないんですし、實のところ涼子も貴方をお慕ひ申してゐましたのです。が、何しろ七年前か

らの許嫁がありましたので……どうぞあれの身の程も思ひやつて下さい。夫とせねばならぬ男からは——肺病の娘なんか——おれはお前の犠牲にならねばならないんだぞ。と云はぬばかりの勝手氣儘な待遇をうけます。まるで小説にでもある事そのまゝの様です。私は貴方だけが便りに思はれます。私を母と思つて、この後も力になつて下さい。ねえ——そして遊びに来て下さい。」

公二さんは固く腕ぐみをしたまゝでありました。

夫人は夜に入つてから歸られました。公二さんは護衛の爲に柏木まで送つてゆきました。一年あまり足踏せなかつた門を喪家の犬の如くに從つて這入つた玄關の瓦斯燈の眩しさ。思はず面を伏せたとたんに頭上から涼子さんの、

「アラ、まあ如何したの……」

と緊張しきつた聲。公二さんははつとして血の循環も一時にとまつた様な気がしました。不動の姿勢で佇立したつきり……黙つてゐました。涼子さんは意外の表情……だらうと公二さんは思ひました。もう仰ぎ見る勇氣はありませんでした。

晩くもあるし公二さんはお玄關先から直ぐ歸りました。後日の來訪を約して!!

七〇

あんまり晴れて頭痛のしさうな好い秋日和、青々と澄み渡つた空に赤蜻蛉飛び交ふ長閑な午後を、公二さんは柏木の里に出ました。

黄ばむだ木の葉が門口に堆かく掃き寄せられて、その中からふすくと薄い煙が立ちのぼる。門内を覗き込むと、植木屋さんがしきりとちよき／＼やつてゐました。間毎の障子の紙の白いのが、松の葉越しにちら／＼と、小春とは云ひながら流石に木々の梢渡る風はうら寂しい。令嬢を慕つての訪問毎に恐ろしい／＼と思つて氣のおかれた父なる博士も、この後は決して恐ろしくはないと心に決めました。妙なものだとか二さんは思ひました。良心にやましい點やわだかまりのある時は、非常に恐怖心を抱いて妙に長上の人を懼れるものですけど、些の野心をも包蔵しない今の身の上には懼らねばならぬ何物もないのがうれしい勝利のやうに感ぜられました。そしてこの誇りを潰すことの痛はしきは公二さんは這入りかけた踵を急に返して駒込へ出て、お麗さんの家へゆきま

した。御大典を前に控えてるので、どの街でも大掃除にいそがしい時節でした。墨を打つ音がこだまを返して響いて来る。

お麗さんはお不在でした。

「まあ、お兄さまの方かと思つた。すつかり顔を忘れて了つた位！ お久しぶりですねえ。」

夫人はいそくと内庭に面したいつもの九疊のお座敷へ通して下さいましたけれど、此家へもすつかり御無沙汰に打過ぎてゐた月日が、公二さんとみんなの間に隔の垣を造りました。何やら物足らなくつて仕方がない。秋の陽はかん／＼照つて、てらく／＼と拭き込んだ縁側が燃えるやうに熱く、閑寂の氣の満ち渡つたお庭に、銀杏の黄葉がひまなく散る。瑠璃色の空を白い雲が、とぎれとぎれに西の方へ流れて！

七一

涼子さんの御病氣のことを聞かれて、お母様は有仰いました。あまり
柏木へは行かぬ方がいゝ、同情といふものは理智を盲目にする。感情に
走ると飛んだことになるから、と。しかし公二さんはそんな言に従つて
は居られませんでした。

そしてそれは非常に寒い秋雨の日でした。庭の花壇なんかすつかりす
がれて、芙蓉の坊主がカラ／＼と風に鳴つてゐました。兎も角も一年ぶ
りで、二人は再び公然と相會ふ機會を得ました。

意久地なしめ、曾て自分を拒絶した女の面前に何の面目あつて出る、
と人は云ふだらうと、公二さんは内心慙怩たらざるを得ませんでした。

然し、然し自分はたしかに拒絶されたとしても、自分の彼女に對する好意の減するわけがない。單なる男の意地といふ狭い見地に立つて彼女を憎むことは出来ない。と自分で自分に辯解しました。涼子さんは少しやつれて更けたやうではありますけれど、桃の花の様な頬の色、凸起した眸を持った小猫の様な眼、豊かな黒髪!! その美しさは昔にもまして、輝りとのふて居りました。

「涼子さん、僕は僕のあの告白によつて貴女が怒りもし、かつ少なからず難まされた事と思ひます。僕は自分のした事が道徳に背いた事であるとは思はない。寧ろ青年の取るべき當然の手段を取つたのである。僕はあの事については決して誰人にも羞ぢ恐れる事はない。然し

……」

「それは私だつて若い人のとるべき第一歩だと思つてゐます。私は如何して貴方をわるく思ふ事が出来ませう——私たち母娘はいつも貴方のお噂をして居ましたわ、貴方の様な方をお子に持った貴方のお母様が羨ましいつて。」

「何卒お世辭だけはよして下さい。それが僕は一番嫌ひです。殊に貴女の許嫁の方の前で僕の事を褒めるのはよして下さい。それは一種の罪悪です、人を若しめて喜ぶといふものです。」

「まあ酷いわ、それどころか私は始終貴方の事について心配して……だつて私のあのはしたない御返事が貴方を怒らした。いゝえ、それは確ですもの。途中で見れば厭なお顔して逃げる、電車で遇へばお尻を向ける、少しも訪ねて下さらない。私はどんなに辛かつたでせう。」

第一貴方が一番愛するお母様をすて、お家を出られたと聞いたとき、私は如何してよいか全く知りませんでしたの。貴方の將來は私の手紙一本で左右して終つた。——眠られぬ夜を幾つか重ねました。貴方には棄てられ、貴方のお母様からは怨まれる。私はすべての成行を神様の御心一つに委せました。

それでも貴方がより清い心を育くみ乍ら、健やかな身體をもつて純潔な生活をして居なさる事をさる方から承つて、私は貴方に感謝しました。神様は人を見殺しにはなさいませんでしたわ。

それから私の心はのんびりとして、常に春にあるやうでした。」

「それです、それです。それは僕も同様です。ですから今日僕は自分の恥を恥とも思はず、わざわざ伺つたのですよ。僕は背徳な事はしない。

動機は純潔だつた、然し結果といふものに對して僕は盲目でした。僕のあの態度が貴女を苦めしやしないか——僕の胸にこの考へが蟠まつてゐた。僕は自分の愛する人に苦痛を與へる事を知り乍ら黙つてる事は出来ない。然し拒まれた男が女の前に出るといふ事——謝罪に——は容易な事ではない。貴女は會つて呉れぬであらう、僕は今迄幾度か伺ひ度かつた。が、この故障が許さなかつたのです。」

「公二さん、何卒もう何にも有仰らないで下さい。私は古傷に觸られる様な氣がします。」

「然し僕としては……殊に貴女の御病氣と許婚との關係についてお母さまから承つたとき、貴女にお詫をし、貴女に感謝する事の出来る機會はこの外にないと思つたのです。」

僕が先晩お母様を御送り申してこの玄關を入らねばならなかつたとき
 そして明るい瓦斯燈の下で貴女の貌を見ねばならなかつたとき、僕の
 足はすくんで了つた。舌が硬ばつて何にも云ふ事が出来なかつた。今
 日だつてひよろめく足を踏みしめながらこのお部屋まで来る間に、僕
 の肉體と精神とは極度に疲勞した。泣くにも涙が出ないのです、僅に
 狂的な笑ひが途方もない時に迸るのです。」

「否、否、お詫だなんて、それは私の云ふ事です。けれど、けれどそんな事はみんな忘れて、そして兄妹として清いお交際をして戴きたいのですわ。私は誰人にも憚らずに申します。私は貴方のどんな行爲について、決して悪意を持つてないんです、むしろ愛するとも。」

兩手に顔をおほふたまゝ、涼子さんはきつぱり申しました。女と云ふ

ものが或場合には男よりも大膽なものであると云ふ事實を、公二さんは確りと突きつけられてたぢくとなりました。

かくて兩人の間には漸と昔の親みのこぐちが解けかゝつて來ました。

「ペビーさん、お嫁さんをもらつては如何？ 私ね、見つけるわ。」

「僕ですか、まあよませう。もう結婚なんかしたくありません。」

「まア可笑しい。結婚なんかもうしないつて！ 一度くらのした事があ

るんですか。そんな事云はずとマ、の云ふことをおききなさいな。ね

え、貴方の理想は？」

小首を傾げる可哀さ。公二さんはまたく悲しくなつて、胸元からぐ

つと痛いやうなかたまりがこみ上げました。

「貴女です。涼子さん、桃割に結つて奇麗な半襟をかけた、日本式の美

人でなければ……」

「え、貴方がお好きだから今朝これに結つたのよ。」

巻の邊へ手をやつて、被ぐやうに襟脚を撫でると、得も知れの芳香がばつと緋ぢりめんの袖口からこぼれました。

七二

その新春はインフルエンザが非常に流行して、柏木の里の一家もどつと病床の人になりました。公二さんは博士から頼まれた用事があつたのでその返事をもたらしして訪問したとき、博士だけは起きて居られましたが、他の方々には會ふことが出来ませんでした。

そこで公二さんは諸處の店頭をさがしまはつてマリアの美しい繪端書

を求め、早速御見舞を書いて出しました。

ところが御養子の曉さんも丁度歸省して居られました。そこへ公二さんからの繪端書がとどいたのでありました。

公二さんは何の氣もなく學校から歸ると、一枚の葉書が机の上にて待つてゐました。差出人は涼子さんと曉さんの連名でした。

これからは決して柏木へは來て下さるな。あなたの葉書によるとあとで遊びに來るとの事なれどそれはよして呉れ。心配する人は外に澤山あるからゆめく無用。

公二さんはこの非常識な文句を讀むであきれました。淺ましいやうな悲しいやうな曉さんが惘然なやうな氣がいたしました。馬鹿々々しくつて怒れもしませんでした。なほまだ最後につけ加へてありました。これ

は私ばかりの考へではない。家族一同の希望である。」と、

先達訪ねたときも夫人は、貴方を他人とは思ひません。いやでせうが末長く相談相手になつて下さい。今までのことはお互に水に流して、としみく云はれた。

それをお世辭とは思はないし、曉さんが嫉妬に驅られてむしやくしやまざれにこんな手段をとつたのだ、とは知れてゐながら、若い青年氣の一筋に、考へれば考へるほど、上もないこの侮辱には堪えられませんでした。終にその葉書をつかんで、柏木へ出かけて行きました。それは暗雲が低く徂來する寂しい夕方でした。

夫人はちつと公二さんの云ふ言をきいてゐました。そしてただ、

「頼りない私を可哀想だと思つたら時々は遊びに来て下さい。それでも

いやと有仰るなら仕方がありませんが、何卒そんな事を云はないで……。

……。

「否、奥さん、いくらお人よしの僕だつてこれには少々堪えられなくなります。僕は貴女方の平和を亂す爲に深切ではなかつたつもりです。

それは御存知でせうが！　しかし仕方がない曉君に疑をかけたのも僕の不徳の至すところですから——最早お宅へは上りませんから。いつまでも痛くない腹をさぐられてゐては、僕にしたところがこんなつまらない事はありません。然し決して貴女方に對して悪意を持つ所か、常に感謝の心を以つて永久の平和を願つてゐます。これだけを御記憶願ひたいのです。」

夫人は蒼ざめた面を上げて、承知したと有仰いました。

「ですが奥さん、この事件は涼子さんに黙つてゐて下さい、餘計な心配をかける爲に僕は來たのではないんですから。」

けれどその間にもう涼子さんは出て來て傍に座りました。いつもの通り匂やかな笑を浮べて嬌へるやうに挨拶する。公二さんはだまつて頭だけ下げました。夫人の話によると病氣も大分重かつたとの事でしたが、さしてそんな様にも見えぬ。よくは見ませんでした。公二さんは自分があまりに馬鹿々々しい煩悶をしたやうな氣が致しました。惻巧な涼子さんは忽ち理由ありげなこの場の様子を直覺しました。

「お母さま、なかに。公二さんが變な貌してゐるんちやあないの。喧嘩なすつたの……いけないお母さまね。公二さん、かまはないからうんと甘へてお上げなさいな。あなたはお母さまのお可愛がりぢやないの。」

二人を見くらべて云ふ。公二さんは傍を向いてしまひました。

「公二さんではひどいぢやないの。私にはかりおしやべりさせて…お母

さま、一體どうあそばしたのよ。え？」

公二さんはせわしく目瞬いて、云ふなどの意味を夫人に目くばせしました。

「あら、いゝぢやないの。公二さん、よ、どうしたのよ。そんな陰氣な貌をしないで！ さア、召し上れよ。私いま剃きくして上げるわねえこのペビーはほんとに世話の焼ける事ねえ。」

と涼子さんは手づから蜜柑の皮をむいて呉れました。織い指先につまんでさしつけて、

「さア召上れ。でなければお口へおしこめてよ。」

公二さんはそれをも拒む勇氣はありませんでした。が、食べやうとも思はれない。だまつて手に受けて眺めました。と、冷い蜜柑の薄皮に涼子さんのデリーシアスな皮膚の暖みが残つてるやうな氣がして、握りしめたうございました。

でも公二さんは強情に、口を利きませんでした。涼子さんは終に泣きさうな顔をして、私があてわけるければ行つてしまひます、と出て行つて了ひました。それを機に公二さんはすぐに立ち上つて暇をつげました。

恰ど雨がどしやぶりに降つて來ましたので、傘をとすゝめられるのも無理やりに却けて歸らうとしましたが、まさかにそれは禮儀が許しませむ。止むを得ずに借りて玄関を出ぬうとすると、また涼子さんが衝立の蔭にちらりと姿を見せました。ふり返つた公二さんは、

「御身體をお大切に……。」

僅にこれだけ云ひました。そして何にも知らない小間使の花ややなんかが、公二さんの様子がいつもとちがつて可笑しいと云つて笑ふのを、他事のやうに聞き流し乍ら傘にかくれて門を出ました。雨は益々ふりしきる、電が方々で光る、物凄い夜になりました。

七三

それからまた一年の月日の経過したところが、目下の公二さんの状態でありました。

公二さんもだん／＼おちついて來ました。もう時は過ぎたのであります。過ぎ去つた事に逡巡して徒らに哀傷の聲を漏らすセンチメンタリ

ストであつてはならない。花散り失せし後は青葉の蔭に健實な果を結ばねばなりません。さまざまの現實は一時におしよせて来てゐます。もう卒業も目の前だし、就職先も定つてゐるし新しい社會もひかへてゐます。種々の分岐點が待伏せて居ります。結婚の問題も御両親の胸にないとも云へませぬ。

たま〜お家の御用で吉野家へ行つても、もうやるせない悲しさをおどけて茶化して了ふことが出来るやうになりました。あの双の眸でちつと見つめられても、お嬢様には御機嫌でござりまするかな、などと左圍次の太い假聲交りかなんかで。

でも差向ひで一つ手爐なぞに手をかざし合つてると、流石に手持無沙汰になつて黙つたまゝ、無意識のすさびに灰なぞ均らし初めてその上に

火箸の先で幾度となく心、心、心、と書いたりしました。そしてふと顔をあげたとき涼子さんの視線がちつと注がれてありましたので、我にもあらず赧くなつてあわてて灰をかきませやうとしました。

「公二さん、その字を消すのはおよしなさいな。」

涼子さんはかう云つて、急に袂を顔へおしあててヒステリックに泣き出しました。公二さんは吃驚しました。その場を取なす適當な言葉も出て来ませんでした。

公二さんの遠くへ赴任するといふことがきまつてから、涼子さんは一入名残が惜しくなつたらしく、離れともない風情を見せることが度々でした。ともすれば、

「貴方はこれから外國へいらして、好き自由な真似をなさるんぢやああ

りませんか。そして私なんかの事は忘れておしまひになる。」
と口癖の様に拗たりしました。

「さうですとも、面白いでさア。親をすて故郷を後にし、失戀の胸を抱いて寂しく世界を放浪するなんぞは。……たゞ一人で、家庭も持たず妻もなく子もなく……それが一番呑氣でせう。いや仕方がないですよ。豈われ敢て孤獨を好まんやですよ。」

涼子さんはいきなり公二さんの手を取つて握りしめました。公二さんの全身の筋肉は或物によつて刺戟され、ビク／＼と蠢動しました。更にまたブル／＼と戦きました。

「公二さん、ゆるしてね。私は罪がふかいんですわ、さぞ私をお怒みなすつたでせうねえ。だけと……だけと……私の胸は……」

「否、決して……決して。あなたがロツテであらねばならぬと聞かされた時、成る程一時は僕だつて悲觀しました。ほんとうに僕は死を思つた。然し貴女の僕に對する深い親切と變らぬ愛が僕を復活させてくれました。僕はあの當時の煩悶を酒によつてか肉によつてか——世間の人の様に——醫さねばならなかつたでせう、もし對手が貴女でなかつたらば。」

僕は實に貴女から僕の妹にあてられた手紙を見て——その時から復活したのです。僕は未來に於て孤獨の生活をしませう。然し僕の心には貴女があります。……」

「公二さん、それは本當ですか……うれしい……うれしい。」
と猶も力をこめて握りしめました。

「公二さん、私だつて——私だつて苦しかつたんですわ。私は貴方をお慕ひ申して居りました。多分貴方よりも私の方が先きだつたのです。』
 今更泣かれたつてどうなるものぞ、と公二さんは苦しく固く黙てゐました。けれども執られた手を振り拂ふことは出来ませんでした。それほどばかりか、意氣地なくもピリ／＼震へる。

「公二さん、春でしたわ。麴町のお宅をお訪ねしたとき——私の心を貴方が占領なすつたのは。あの時はお麗さんや女學部へ行つてらした岡野さんやなんかも御一緒にしたわね。』

「え、あの日は僕だつてよく覚えてゐます。午前中にひどい驟雨のあつた日でした、學校の野球部が早稲田にスコルクで破れたその日です。』

「夕方貴方は私と母を四谷見附まで送つて下さつたのね。ほんとうに綺麗な夕方でしたわね。夕靄がしつとりこめて……あの時強い〜ある物が私の心を奪ひました。忘れることは出来ません。」

「僕はお宅までお供したいと思つたのですが……」

「貴方は四谷見附からお歸りになつてしまふ。私は電車のシートに身を置いた時、熱い〜涙が湧いてたまりませんでしたの。悲しくて悲しくて——淋しい。理由もないのに……。貴方が何故何處までも送つて来て下さらないんだらうと……。それが怨めしく悲しくて。」

その夜私は眠られませんでした。かういふ事が幾夜か續いたでせう。深い〜初戀におちたんです、私は貴方を片時も忘れることが出来なかつたのです。それでも貴方はちつともお感じにならなかつた——私

はさう思つてましたの。』

涼子さんは堪え得ず、公二さんの膝に突俯して潜々と泣き入るのでした。

「涼子さん、それは僕だつてどれ程貴女を慕つたこととせう。然し僕の戀の爲に可憐な貴女を悶えさせる事が辛かつたのです、だから僕は我慢してゐました——幾度か告白しやうとしながら。餘りに僕は迂濶でした。』

「はい、その有難いお心はよく後で知つて居ります。私だつて少さい時から形式上は許婚と定つて居りますが……」

公二さんも夢見る様な面貌で涼子さんの肩に唇をおしつけてそつと抱きました。

「別れるのはいやですわ——」

涼子さんは血に餓えた蛇の様に、しつかと公二さんの兩手に縋つて、いよ／＼ちぎれるほど握り緊めます。水の滴れるやうな黒髪から甘い香油の香が酔はせるやうに立ちのぼります。今は堪えられなくなつて公二さんは半ば夢中で涼子さんの頬に、ひしと自分の顔をすりつけました。

二人は長い間さうやつたまゝで、口も利かすにゐました。

やがて我に返つて、涼子さんの肩から顔を離した公二さんは、きつとした眼色に感情の激動と苦悶の色をおしつゝ、み乍ら、何とも云へぬ切なさうな太息を吐きました。もう今は以前の公二さんではありませぬからかうなつてくれればそれだけの覺悟と責任感も生じて來ます。涼子さんの心一つによつては、と云ふ氣にもなりました。

けれども涼子さんは頭をふつて、案外にきつぱりと申しました。

「でもね、私の身はね、今の位置からどうにも動ける體ではありません。貴方は最初からこの涼をお手許におつれになれるとはお思ひにならなかつたのでせう、決して／＼そんな考へをお起しになつてはいけません。貴女はほんとうに親不孝です、私の爲に……大切な貴方のお母様の大切なお方を、めちや／＼にしては貴方より私が申譯ありません。よく考へて見て下さい、私がどうなりませう、どうせ／＼思ふまゝにはならないんですもの。戀に生きるか世間に従ふかと有仰るけれども何もかも後に見て貴方と一緒に逃れ出たとしても、私の心は戀を殺すより以上の苦しみを持たなければなりませんわ。私はそれよりか美しく詩の様にお別れして行つた方が望みですの。でも、私の心は貴方は

少しも解しては下さらないのでせう。情死なんかを最も美しいと思つてゐる人は、それで満足に思ふでせう。けれど私には神をすてる事は出来ませんもの、良心にそむくのは必苦しい……』

「涼子さん、神だの良心といふものは何であるか知つてゐますか、神といふものは最も精錬された自我で、良心とは最も眞實な自己です。人が偽らざる生活をしてゆく時に良心の苛責をうける筈のものではない。貴女はまだ自己といふものを欺いてゐますね、でなければ眞の戀の力を感じないかだ。貴女の戀と云ふものは、親や世間と同じ價値、否、それらの物を戀以上に見てゐる。『情死なんか馬鹿々々しい』といふ貴女はまだ虚偽の生活から脱することが出来ないんです。然し何も僕が心中して下さいと言ふのではありませんから御安心なさい。

眞まことに自じ覺かくした人ひと間げんは世せ間げんからどのやうに酷こ評ひやうされ、敵てき視しされても少すこし
も煩わづら悶もんはないのです。貴あなた女なはそれが出来できないと云いひますね。

貴あなた女なは僕ぼくを戀こひしてると云いふ。然しかし良よ心こころがとがめると有あ仰やうる。それは虚き
偽いつはりの戀こひだからだ、一ひと時じ的てきの戀こひであるからだ、浮う氣きな戀こひだからだ。

僕ぼくは貴あなた女なの戀こひが浮う氣きであり戯たはれであるならば、少すこしも心しん配ぱいする必要ひつ要ようは
ない。が、もし不ふ幸かう(?)にも貴あなた女なの戀こひが眞まこと實じつの戀こひであるとすれば――

そして世せ間げんの爲ために抑おさへてゐるのだとすれば――非ひ常じょうに心しん配ぱいになる。僕ぼく
にも責せき任にんがあるのだから。だから今いまの内うちによく考かんへてもらひたいと思おも
ふ、貴あなた女なが戀こひをすて、結けつ婚こんして――それで果はたして幸かう福ふくであるかどうか
一ひと時じ的てきでなく親おやをも安あん心しんさせる事ことが出来できるか。

女おんなと云いふものは結けつ婚こんしない間あひだは戀こひだの愛あいだの云いふけれど、結けつ婚こんしてし

まへば戀人の甘い接吻の味も忘れてしまふのが常だ、そんな男があつたつけかしらと思ふ位のものだ。だから女は結婚さへすればそれで幸福になれると云ふ説をとれば、貴女なんか少しも心配する事はない。婚禮の夜あけからは全く僕の事を忘れて下さる、それに貴女は未來の夫たるべき人を決して嫌つてゐるのではない。

僕はどうしても貴女が本當に僕を愛して下さるのだとは思へない。たゞもし眞實ならば貴女の將來について大いに考慮せねばならないのです。だからこの問題はよく考へて見て下さい。貴女の偽りのない心に問ふて下さい。「眞實に戀してゐるかどうか」と。」

「そのわけは、私の決心がつかないから貴方が奥さんをおもらひになるのにおこまりだと云ふ意味ですか。……。」

「申談云つちやいけません。僕（ぼく）のことは決して心配（しんぱい）はいりません。いくら馬鹿（ばか）だつて男（おとこ）です。ですからお爲（たから）ごかしを云（い）ふのはよして下さい。」

僕は自分の幸福（きうふ）なんかを期待（きたい）してはゐませんよ、今（いま）となつては。』

夫人（ふじん）が這入（はひ）つて來（こ）られました。涼子（りやうこ）さんは突然（とつぜん）鏡臺（きやうだい）の前（まへ）まではね退（の）いて、何氣（なにげ）なく刷毛（しりげ）でポン／＼鼻（はな）の先（さき）を打（う）つてゐました。女の心理（こころ）状態（じょうたい）つてかうしたものと、公二（きみじ）さんはつく／＼悲哀（ひがい）と滑稽（こつげい）を同程度（どうていど）に感（かん）せずには居（ゐ）られませんでした。

甘いお蜜柑（みつかん）をむきながら三人（さんにん）はお火鉢（ひばち）を圓（まる）く取巻（とりま）きました。夫人（ふじん）は近頃（きんごろ）公二（きみじ）さんの顔（かほ）さへ見（み）ると、

「公二（きみじ）さん、貴方（あなた）は早く御婚禮（ごこんらい）なさらなければいけませんわ。』

と云（い）はれるのでした。けれど公二（きみじ）さんは今日（けふ）は意地（いぢ）わるく、

「貴女方の爲にですか。僕によつて破壊の恐れのある、貴女方の平和を維持する爲に、僕の精神生活を犠牲にしると有仰るんですか。」

「まあ公二さん、何と云ふ言を云ひなさるの。私たちは眞に貴方を肉身の様に可愛く思つて、それでこんなおすゝめもするんですよ。」

「成る程言葉は便利なものですわね。然し奥さん、貴女は僕が愛のない女を妻にして、家を外に遊んで歩くやうなことがあつても、それでも氣の毒だとは思つて下さらないんですか。僕は、僕は……」

「公二さん、もうそのお話はよしにしませうよ。」

俯向いてゐた涼子さんは悲しさうに面をあげてはらくしました。

「否、僕は云ひます。奥さん、貴女が眞に僕を愛して下さるんなら、何故貴女は僕の愛する唯一の戀人との結婚を許して下さらないんでせう

………
公二さんは逆上て眞紅になつてゐました、爪の先までも。が、涼子さんがこの際なんにも言はずに黙してゐるのを見ると、忽ち悲しくなりました。自分が思ひ切つてこゝまでぶつつかつたならば、涼子さんもキツト共々夫人にお願ひするに相違ない、と云ふ心頼みが充分にあつたのでしたのに……。

公二さんは思はず力一杯に頭髪をむしり初めました。後の柱にドシン／＼と音させて後脳部をぶつつけました。

「あら、公二さん、いけませんわ。もうこのお話はよして下さい。後生ですから……。」

と云ひ乍ら涼子さんは柔い左右の袖に公二さんの頸を抱きました。

「まあ！ 鏡を御覧なさいな。貴方のその恐ろしい顔と、もちや／＼の髪の毛を！ さアちつとしてゐらつしやい。」

と自分の胸に掻い抱いたまゝ、桃割の前髪の花飾をとつて叮嚀に梳きつけました。公二さんの頭髪は艶がよく純黒で、實に鴉の濡羽のやうでした。それをやゝ左勝の英國風に分てゐます。

「奥さん、僕さへ生きてゐなかつたらそれで可んでせう。否、僕が日本にさへ居なかつたら、貴女の目につくところに居なかつたら。——何に、それなら何でもありません。さア、早速箒で掃き出して下さい。然しそれでも僕には、他の女と結婚は出来ません、自分の妻になる人には見す／＼みぢめな生活をさせねばなりませんから——それは罪惡です。」

公二さんは我ながら言葉が過ぎたと思つてハツとしました。が、この場合自分は全然踏みつけにされてるんだ、存在を無視されたんだと思はずには居られませんでした。従つて意地にも反抗の念が勃發せずには居りません。

「奥さん、貴女は何故眞實の事を打ちあけて下さらないんです。御迷惑ならなせ迷惑ですと有仰つて下さらぬのです。蛇の生殺してみたいにされては困ります、生きるに生きられず、死ぬに死なれぬ。不徹底な態度で僕を苦しめるのはやめて下さい。

もしまた貴女は本當に僕を愛して下さるんなら、僕と涼子さんと結婚させて下さい。それは世間が許さないと云ふんですか！世間がなんです。貴女は甘い物を食べても、世間が甘くないと云へば、甘いと云

つてはいけない、世間に従はねばならないと有仰るんですか。更に食べたものでも口を拭つて、食はない振りをしろと有仰るんですか。虚偽の生活をしろ、自己を欺けと教へるんですか。然し他人を欺くとも眞の自己を欺き終へるでせうか。それは僕には出来ない。それがいけない。そんな妥協的な姑息手段をとるから、後で悲劇が起るんです。

人間の心はさう容易に抑へつけておかれるものではありません。』

『でも今の境遇では、涼子の事は思ひ切つて頂くより仕様が無いのですもの。私は一日も早く貴方をそんな苦しみから救ひ上げたいと、唯そればかり考へてゐるんですよ。どうぞ早く、御夫人をお迎へなすつて頂戴ね。それより以外に總てを眞の幸福に導く道はありません。涼子や私の言葉を容れて下さるのも、貴方の涼子に對する眞の愛ではな

いでせうか。』

「僕はもうお暇しませう。」

公二さんは涼子さんの顔を見ながら、ついと立ち上りました。玄関へついて出た涼子さんは、オーバーを取つて着せかけ乍ら、

「公二さん！」

公二さんは静に見返しました。涼子さんはくづれるやうに公二さんの肩に凭りかゝつて、またホロ／＼と泣くのでした。公二さんは冷たい沈黙をつつけてゐました、どうするのを見てやれ！ といふ氣持になつて。

「公二さん。」

返辭がないので涼子さんは、苛々したやうに身悶えて、涙によこれた頬がピク／＼と痙攣してゐます。

「公二さんてばー」

公二さんは何となく涼子さんの態度が癪に障つてたまりませんでしたので、

「奥さん。」

と奥の方を向いて、どなるやうな大聲で呼びました。

涼子さんは突然ばつとはね退いて、襖の際まで走りました。

「ザマー見ろ。」

公二さんは心の中でさう叫び乍ら、靴音正しく去りました。

七四

公二さんにはどうしても涼子さんの心がわかりませんでした。何の爲

にあんな真似をするのであらう？ 別れたくないと取違つて泣くかと思へばすぐその下から、未来の夫にすまないと思ふわ、と云つて一入烈しく泣く。

ある女に、公二さん、女つていふものはいつでも泣けるんですよ、つて笑はれてから、成る程そんなものかなアと思ふやうにもなりましたがしかし涼子さんの場合になると、矢張り普通の女のそれよりも意味のあるやうに思はれてなりません。

そんな事ばかり考へてゐる公二さんは、學校へ出ても先生のお講義を完全にノートすることの出来ないのはあたりまへでした。筆記帳は毎日驚くほど不整で誤脱だらけ。孝さんに、

「公二さん、また考へ初めたねえ、オアゾーブランの事を。」

と心配さうに顔を覗き込まれて、

「なアに、さうでもないかね。」

と胡麻化す公二さんは半分泣き笑ひでした。

とうとう或日先輩の岡崎さんの夫人のところへ出かけてゆきました。

岡崎さんの夫人は女學部の専修部を出て、去年結婚したばかりのノヴェアマダム。白い額に分前髪の波打つてゐる、背の高い、印象的なハイカラの快活なひとでした。

公二さんの告へを皆まで聞かず笑つて、

「貴方は弄かはれてるんですわ。」

一も二もなくかう云はれた時には、公二さんは自分の戀人に對して非常な侮辱を加へられたやうな氣がしました。けれども心を静めて、岡崎

夫人のいふことを聞きました。

「公二さん、貴方はあんまり物事を眞面目にとり過ぎます。だから女には一時的に可愛がられる、然しうっかりすると弄かばれる危険がありますよ。女には先天的にさういふ氣分のあるものですからねえ、たゞ單に男の感情を弄そんで楽しんで、果敢ない慰安を得やうとする……」

「成る程、御尤もです。しかし涼子に限つて……」

「いやですよ、公二さん。貴方も涼子さんの事はすつかり思ひ切つて結婚おしなさいな。さうして皆さんを安心させてお上げなさいな。」

こゝでもまた同じ様なことを云はれる。公二さんは何の爲に岡崎夫人を訪ねたのかわからなくなつて了りました。が、活々としたこの新家庭の

空気が、公二さんにも心地ようございました。結婚して楽しい生活が出るものなら、して見たいと思はれて来ました。

「それではよろしくお願ひませうかなア。」

とまるで十三四の少年が親からお説教をうけた時のやうな心持になつて、頭をかきく降参してしまひました。

「なんだい、馬鹿に話もてるぢやないか。」

御良人の岡崎さんは來客を送り出して、二階から下りて來たついでに差のぞきました。

「え、今ね、公二さんのお嫁さんの御相談をしてるのですよ。」

「なに、君、結婚する氣があるんですか、本當に。それなら候補者もありませんかね。」

糞糞の灰灰がばら／＼と落ちるのもかまはず座座り込んで膝膝をすゝめる。
 かう話話が具體具體的的になつてくると、公二公二さんは直直ぐまた後悔後悔しました。
 さうして何故何故おれはかう根底根底のない確信確信のない人間人間だらう、と自分自分が
 ら悲悲しくなりました。

七五

涼子涼子さんの手紙手紙やなんかは鈴音鈴音も見せられました。そして、
 「嫉嫉けるわねえなんて破破かれては困困りますよ。」

と自暴自暴氣味氣味のやうにわざとはしやいで云いふ公二公二さんの申談申談を、

「私わたしはそんな不誠實不誠實な心持心持で、貴方あなたがたを見ては居をりません。」

とたしなめるやうにしんみり答こたへました。實際じっさい岡崎夫人岡崎夫人の様ように一慨げんに

断定してしまふのも、涼子さんに對して氣の毒のやうな氣がしました。はがゆいやうではありますけれど、鈴音はむしろ涼子さんの方に同情を持つて居りました。純粹の乙女心と云ふものは、熱いやうで冷たいもの單純なやうで複雑なもの、と思つて居りますから。理智の發達した女性には殊に考へることも多うございますから。

それに許嫁といふ問題もするぶん厄介なものでした。公二さん達の戀のいきさつを聞くにつけ、端しなくも鈴音に一つの記憶が新しくよみがへりました。それはいくらか自分に關聯してゐた許嫁事件で、その當時は事もなく思ひすてられてゐたものでしたが、二年ほど前のまだ春淺い如月の頃でした。切に鈴音に面會を求め、未知のうら若い女性がありました。最初こそ、心なく取次に拒絶させましたけれど、二三日つゞけ

て訪なふ人の、あまりにもしほらしく思ひ入つた様子に、ついほだされて逢ひました。

まだあどけない可愛い聲の主は、思つたよりもなほ小さい人で、荒い糸織の緋の羽織を着てしよんぼりと座布團の上に座つてゐました。

鈴音は初対面などにはあまり人なつきのいゝ方ではありませんから、先方もどきまぎしてしまつて、しどろもどろの挨拶をしました。途切れ／＼に袂を膝の上で弄りながら、鈴音は別に何の興味も持たないのでただはア／＼と受け流しつゝ、二人の間の手爐を少しおしやるやうにしながら、冷たく見据て居りました。結び切れない程房々あるその乙女の束髪の巻の邊を……。

やがて一生懸命のやうに顔をあげたその乙女は、さう美しいと云ふは

うではありませんが、丸顔の眼のぱつちりした、皮薄の頬の、眉と眉との間の遠いやうな、いかにも愛らしく柔かなよい感じを與へました。小柄のせい加若々しい、十九と云ふ年よりも……。

乙女の名は文江さんと云ひました。家は四谷の方の木線間屋で一人娘なさうでした。けれども一人の兄さんがありました。幼少の時から一緒には育ちましたが、實の兄妹ではありませんでした。ゆく／＼は二人を結婚させると云ふ、親達の心ぐみなのでありました。

文江さんは第三高女に、兄なる青年は高商に通つて居りました。秀才でした。そしてまことに性質のすなほな優しい青年でした。親たちは生みの娘にも増して頼もしいものにしてゐました。文江さんは本當に幸福でした。

ところが兄さんは病氣になりました。人のいやがる肺病でした。早速鎌倉へ移されました。そして同じ病院に診療をうけに来つゝあつた鈴音をかいま見て、いつか烈しい懊惱に囚はれたのでした。

しかし青年は病人でした。しかも養子の身分でした。何にしたつて、「諦める」と云ふことより以外に、考へる方法もありません。あきらめてその土地を去つてしまひました。けれども諦め切れませんでした。胸が焼かれるやうでした。一人で熱海の方に行つてゐた間など、ただ鈴音の戀しさに悩み暮したやうなものでした。

返子に葉山に茅ヶ崎に平塚に、青年は三年越し病みつづけて居りました。夏冬の休暇には文江さんもよく看護に來ました。青年は病氣以來一層氣が弱くなつて、涙のこぼれる程感傷的に優しかつたさうです。いち

らしいと云つて文江さんの母さまはよく泣きました。

秘めたる思ひをいよ／＼それと文江さんに打ちあけたのは、亡くなる一ヶ月程前、どつと病勢が重つて、枕が上らなくなつてからださうでした。

文江さんは怨みはしませんでした。意外な事とも思ひませんでした。むしろその女の人が見たくなりました。そうして寂しい兄の胸中を察して、しみじみ悲しく聲を放つて泣きました。

それからはもう明けても暮れても、病人は文江さんを相手に鈴音の噂ばかりしつづけてゐたさうでした。それが何よりの心やりらしうございました。文江さんは自分までが苦しくなつて、せめて自分がその女を訪ねて見やうかと相談しました。が、病人は切にとめました。そして文江

さんにすまない〜と云ひつづけ乍ら、死にたくなないと悶え乍ら、終に二十四を一期として、茅ヶ崎の假寓で逝きました。

あれほどに思ひつめてゐたものゆゑ、もし鈴音にあてた遺書でもありはしまいかと文江さんは遺物の整理をする時に額の裏、枕當の中まで注意しましたけれど、それらしいものも見あたらず、よく〜覺悟してゐたものと見え、長年書きためた日記などもすつかり仕末してありました。

文江さんがたど〜と面から手布を放さず話すこの長物語の間、鈴音は例の沈着な表情を微動だもさせず聞いてゐましたが、自分の様な面白味のない人間でも、それほどに思ひ込んでくれる人があるのかしら、とふと傷ましいやうな滑稽なやうな氣がして來ました。そして流石にその頃——見染められたと云ふ當時の、まだ肩揚の痕跡も失せ切らなかつた

筈の自分を思ふと、すこし面ぼてりも覺えました。と共にそんな病人の徒然な病床の空想のいゝ對象に散々されてゐたのだと、不快な氣持もしました。が、目の前に俯いて泣いてゐる文江さんのしほらしい様子を見ると、こんな女がありながら、とまた笑へなくなりました。

「兄と同じ御病氣で小笠原島へ轉地なすつて、すつかり御丈夫におんなすつた方がありますのよ。兄にも大變おすゝめ下すつたのですけれど、やつぱり兄は……」

ばつと双頬に羞らひの色を見せ乍ら、

「貴女のお傍をそんなに遠く離れて了ふのが厭だつたのでございます。」

鈴音はちくりと胸が痛うござんした。

「何處に居りまして兄は、時々此地へ見にまゐつたさうでございます。」

の、そうしていつも御門に同じ標札がかゝつてゐるので、安心したといつて居りました。貴女はよくお琴を弾いてらつしやいましたつて。』
鈴音はだまつて火箸の先で、赤く熾つた櫻炭の切口を突ついで居りました。

「今更貴女にきいて頂いたつて……馬鹿な奴だと御さげすみも恥かしうございます。兄の本意でもありませんまい、けれども私は……私は……どうしても我慢が出来なくなりました。あんまり兄が可哀想で……さうかと云つて貴女より外に……私、両親にだつてこんな事は申せません……」

大粒の涙の玉を長い睫毛に貫き乍ら、文江さんは口邊の煙擧つたやうな笑ひ方をしました。そして兄さんは好きなひとだつたけれど、自分は

兄さんに對して戀はなかつた。兄さんもさうだつた。あんまり親み過ぎてゐたせいであらう。だのに兄さんは自分を憚つてあんな悲しい戀をした。私は私でこれから自分の戀を探します、それが亡くなつた人に對しても第一の追善であらうし、あれほどすまながつてゐた自責の念を少しでも輕めてやる事が出来るにちがひない故、と昂奮しきつた調子で云ひました。

鈴音はこの乙女が自暴でも起しかけてるのではあるまいかと氣づかはれましたが、さうでもなささうでした。その日は丁度青年の二七日にあたる日だつたさうでした。

兄の恥辱だからとて姓も住所も委しうは明かさず、そのくせ立ちともなげにもちくしてゐる乙女を、鈴音は出来るだけ優しく慰めて二三町

ある電車の停留所まで見送つてやりましたが、その乙女は肩のすれ合ふやうにして歩いて、もつと何か聞いて貰ひたさうでした。

あの乙女はどうしたことでせう、幸福な戀を見つけたでせうか。いまその事をしみてと思ひ出しました。

婚約の女があつたばかりに、三年の間思ひつゞけ乍ら、自分には一言も洩らさずに逝つてしまつたひと。どんな人か鈴音は知りませんが——それを一度は男らしいと思ひ込みたものゝ、今考へてみると本當に弱い、あまりにその人は弱かつた。眞實の戀なら何物にも打勝たなくてはならぬ。女の榮は靈も肉も抱容してくれるやうな、大きな力強い對手の生氣を躍動させるにある。

確乎たる自我の信念や凜とした男性美の缺けた男の戀は、砂上に立て

たバベルの塔みたいなものであります。朝日に榮ゆる尖頂の金の輝きに眩めてゐる内に、脚下の石は一つ／＼動き初めてることを本人は知らない。いくら男の建てた塔の中に安らかに穩かに住むやうにつくられた女だからつて、その塔の礎のゆるぐのを見ては、いやでもちつとしては居られません。うか／＼すれば共倒れになつてしまふ。

孝さんは今は全然恵美子さんとの戀から冷めて、今度はもつと優しくつゝましい女を求めてゐる。男が偉く頼母しくつて女が優しく溶け合ふ時にこそ、まことの戀は保證せられる。兩個相許すところに戀あるのが、自然の法則でありませうもの。

人生の春ですもの、若い人達は毎日詩を作る特權を持つてゐます。春を蒔むも雨にあり、春をやるも雨にあり、雨こそ天地の生命を培ふ。若

一人達ひとたちに涙なみだあり、歡よろこびて泣なき悲かなしみて泣なき詩しを作つくつて泣なく。泣ないて泣ないて泣なき明あかして、いつしかに各かく個この落おち着つくべき運えん命めいに到たう達たうする。異い常じやうの
 昇しやう番ばんも異い常じやうの眩びん惑わくも、怒いかりも怨うらみも、惱なやみも、戀こゝろも、たゞまゝならぬ涙なみだ
 がまゝにする。寂さびしう覺さめた鈴すず音ねの心こゝろは今いまはひたすら、藝げい術じゆつの方ほうへ
 と傾かたむきを増ますばかり。さのふけふかたく門もん戸こを鎖とぎし客きやくを謝しやして、專せん心しんに
 繪え筆ふでをなめてゐるさうであります。その大たい作さくがこの秋あきには何なに處どこかのサロ
 ンの一いっ隅ぐうを飾かざるかも知しれません。多た情じやう多た恨こんの鈴すず音ねの涙なみだで溶といた繪えの具ぐの
 香かが今いまから忍しのばれる。

その後ごどうなつた事ことやら、公きみ二にさん達たちの噂うはさもあれつきうに残かこつてゐま
 す……。〔まはり〕

大正七年一月十七日印

刷

大正七年一月十九日發行

行

大正七年二月十五日再版發行

大正七年四月十二日三版發行

定價金八拾五錢

著者 內藤千代子

發行者 田中金一郎
東京市京橋區長崎町二丁目九番地

印刷者 田中潔
東京市京橋區長崎町二丁目九番地

不許複製

發行所

京橋區長崎町二丁目九番
振替東京三三三〇番

京橋堂出版部

發賣所

東京神田區淡路町一丁目一
振替東京九〇七九番
電話神田一三二番

泰山房